

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

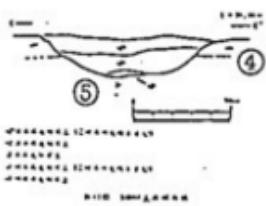
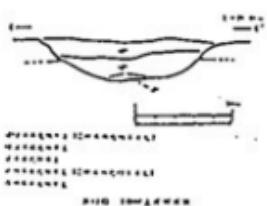
第十一冊

三条番ノ原遺跡

1992.8

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

三条番ノ原遺跡 正誤表

	正	誤
例言 9行	森下英治	森下英二
本文 5頁 24行	主任技師 安藤清和	主任技師 安藤和清
本文 6頁 1～2行	係長(事務) 土井茂樹 (6.1～) 主任主事 斎藤政好	主任技師 土井茂樹 (6.1～) // 斎藤政好
本文 20頁 第9図	△ 焼け石 □ 石 塵	焼け石 石 塵 □
本文 51頁 第43図		
本文 93頁 第5表	遺構一覧	遺溝一覧

序 文

香川県高松市と高知県須崎市とを結ぶ四国横断自動車道は、県内では昭和62年12月に善通寺～豊浜間が、また平成4年5月に高松～善通寺間が開通いたしました。

香川県教育委員会では、昭和57年度から昭和62年度にかけて善通寺～豊浜間で24遺跡の発掘調査を実施し、昭和61年度から順次報告書の作成をおこなってまいりました。また昭和63年度からは、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに調査業務を引継ぎ、報告書の作成、刊行並びに高松～善通寺間の発掘調査を同センターに依頼して実施しているところであります。

今回「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第11冊」として刊行いたしますのは、高松～善通寺間で実施いたしました丸亀市三条町に所在する三条番ノ原遺跡についてであります。

三条番ノ原遺跡の調査では、旧石器時代から鎌倉時代にかけての遺構が検出され、多数の遺物が出土しております。特に古代に施行されたと思われる条里型地割りに伴うと考えられる溝状遺構の検出は、丸亀平野におけるその開始時期や坪割りなどを復元する材料として、条里制研究にとって貴重な資料になるものと考えられます。

本報告が香川県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告にいたるまでの間、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元関係各位には多大な御援助と御協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援賜わりますようお願い申し上げます。

平成4年8月

香川県教育委員会

教育長 松 繁 壽 義

例　　言

1. 本報告書は、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第11冊で、香川県丸亀市三条町1,003～1,052番地で実施した三条番ノ原遺跡（さんじょう ばんのはら いせき）の報告を収録した。

2. 発掘調査は、日本道路公団から委託された香川県教育委員会が主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3. 発掘調査にあたり、昭和63年3月に予備調査を実施し、本調査を昭和63年4月18日から平成元年3月31日まで実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

予備調査 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 片桐孝浩

本 調 査 山根 進・岡 敦憲・片桐孝浩・藤川善規・森下英二・大谷伸一・大前智司

今井（藤原）由記子・岡野 順・片山恭子・藤川（香川）敏美

4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。
(順不同、敬称略)

香川県土木部横断道対策室、普通寺土木事務所横断道対策課、丸亀市土木部高速自動車道担当、四国横断自動車道建設丸亀市郡家地区対策協議会、各地元自治会

5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
本報告書の執筆・編集は片桐孝浩が担当した。

6. 報告書の作成にあたっては、下記の方々の御教示を得た。記して謝意を表したい。
(順不同、敬称略)

福岡市教育委員会 後藤 直、横山邦継、福岡市博物館 池崎謙二、九州歴史資料館 橋口達也、小郡市教育委員会 片岡宏二

7. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第N系の北であり、標高はT.P.を基準としている。

また、遺構は下記の略号により表示している。

S B	掘立柱建物跡	S D	溝状遺構	S E	井戸	S H	堅穴住居跡
S K	土坑	S X	不明遺構				

8. 本文中の遺構に関する数値は、破壊を受けたもの、不確実なものについては（ ）書きとした。

報告書名	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第II冊			
編集	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター			
発行	香川県教育委員会、日本道路公団、財香川県埋蔵文化財調査センター			
刊行年月日	平成4年8月31日			
遺跡名	三条番ノ原遺跡	さんじょうばんのはらいせき		
遺跡略号	OGB I			
所在地	香川県丸亀市三条町		かがわけんまるがめしさんじょうちょう	
頁数	目次等	10頁	総頁 138頁	挿図枚数 66枚
	本文	80頁		写真枚数
	観察表	14頁		98枚
	図版	34頁		
時代	遺構	遺物	その他	
旧石器時代	不明遺構 1	石製品（縦長剝片石核、縦長剝片、横長剝片）		
縄文時代	不明遺構 1	石製品（石器）	石器製作跡	
弥生時代前期	溝 1	弥生土器（壺・甕） 石製品（石錠）	祭祀に使用された特殊な壺が出土	
弥生時代後期	竪穴住居 4 土坑 2 土墳墓？ 1 溝 3	弥生土器（壺・甕・鉢・高杯・支脚・製塩土器） 石製品（石錠）	環濠集落か？	
奈良～鎌倉時代	溝 5	須恵器坏	条里型方格地割に伴う溝	
近世	溝 6 井戸 1	陶磁器碗・皿 備前焼鉢		

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	5
第2章 遺跡の立地と環境	8
第3章 調査の成果	14
第1節 遺構・遺物	14
1. 旧石器時代	14
SX02	14
2. 縄文時代	20
SX01	20
3. 弥生時代前期	21
SD22	21
4. 弥生時代後期	24
SH01	25
SH02	25
SH03	30
SH04	33
SK01	35
SK02	37
SK03	37
SD08・09	39
SD12	40
SD15	42
5. 古代～中世	42
SD01	42
SD02	47
SD04	48
SD05	48

SD11	48
SD14	55
SD17	55
SD18	55
SD20	57
SD27	63
SB01	63
SB02	64
SE01	66
包含層出土遺物	66
6.まとめ	75

挿 図 目 次

第1図 四国横断道埋蔵文化財包蔵地 (普通寺～高松)	4	第29図 SK02出土遺物実測図	38
第2図 三条番ノ原遺跡位置図	8	第30図 SK03平・断面図	39
第3図 周辺地域の遺跡	11	第31図 SK03出土遺物実測図	39
第4図 SX02平・断面図	14	第32図 SD08・09土層断面図	39
第5図 調査区西部遺構配置図	15	第33図 SD12土層断面図	40
第6図 調査区東部遺構配置図	17	第34図 SD12出土遺物実測図	41
第7図 SX02出土遺物実測図	19	第35図 SD15出土遺物実測図	42
第8図 SX01出土遺物実測図	20	第36図 SD01土層断面図	42
第9図 SX01器種別平面分布図 垂直分布図	20	第37図 SD01出土遺物実測図①	44
第10図 SD22上層断面図	21	第38図 SD01出土遺物実測図②	45
第11図 SD22杭列平面図	22	第39図 SD01出土遺物実測図③	46
第12図 SD22出土遺物実測図	23	第40図 SD02土層断面図	47
第13図 SH01平・断面図	24	第41図 SD02出土遺物実測図	47
第14図 SH01出土遺物実測図	25	第42図 SD11平面図	49
第15図 SH02平・断面図	26	第43図 SD04土層断面図	51
第16図 SH02出土遺物実測図①	27	第44図 SD05土層断面図	51
第17図 SH02出土遺物実測図②	28	第45図 SD11土層断面図	51
第18図 SH02出土遺物実測図③	29	第46図 SD04・05・11・14 出土遺物実測図	52
第19図 SH03平・断面図	29	第47図 SD14土層断面図	53
第20図 SH03出土遺物実測図①	30	第48図 SD17出土遺物実測図	56
第21図 SH03出土遺物実測図②	31	第49図 SD18出土遺物実測図	55
第22図 SH03出土遺物実測図③	32	第50図 SD18・20土層断面図	57
第23図 SH04平・断面図	33	第51図 SD27出土遺物実測図①	58
第24図 SH04出土遺物実測図①	34	第52図 SD27土層断面図①	59
第25図 SH04出土遺物実測図②	35	第53図 SD27土層断面図②	61
第26図 SK01平・断面図	36	第54図 SD27出土遺物実測図②	63
第27図 SK01出土遺物実測図	36	第55図 SB01平・断面図	64
第28図 SK02平・断面図	37	第56図 SB02平・断面図	64
		第57図 SE01平・断面図	65

第58図	包含層出土遺物実測図①	68	第63図	包含層出土遺物実測図⑥	73
第59図	包含層出土遺物実測図②	69	第64図	包含層出土遺物実測図⑦	74
第60図	包含層出土遺物実測図③	70	第65図	遺構変遷図(1)	77
第61図	包含層出土遺物実測図④	71	第66図	遺構変遷図(2)	79
第62図	包含層出土遺物実測図⑤	72				

表 目 次

第1表 四国横断自動車道建設に伴う 発掘調査の概要(1)	2	第3表 遺構番号変更表	7
第2表 四国横断自動車道建設に伴う 発掘調査の概要(2)	3	第4表 遺物観察表	81
		第5表 遺構一覧	93

図 版 目 次

図版1 遺構検出状況(1)	②SH04検出状況（南より）
図版2 遺構検出状況(2)	図版14 ①SK02遺物検出状況（北より）
図版3 遺構検出状況(3)	②SD06～09・SK01検出状況（北 より）
図版4 ①発掘前風景	図版15 ①SD12・13検出状況（南より）
②発掘前風景	②SD12遺物出土状況
図版5 ①SX01サヌカイト片出土状況	図版16 ①SD12土層断面（G' - G）
②SX01サヌカイト片出土状況	②SD12土層断面（H' - H）
図版6 ①SD22検出状況（南より）	図版17 ①SD01土層断面（A - A'）
②SD22杭列検出状況（西より）	②SD02土層断面（B - B'）
図版7 ①SD22土層断面（N - N'）	図版18 ①SD11検出状況（北より）
②SD22土層断面（O - O'）	②SD12検出状況（北より）
図版8 ①SH01検出状況（南より）	図版19 ①SD11土層断面
②SH02・03検出状況（東より）	②SD11発掘作業風景
図版9 ①SH02検出状況（東より）	図版20 ①SD14検出状況（北より）
②SH02遺物検出状況	②SD14土層断面（南より）
図版10 ①SH03検出状況（東より）	図版21 ①SD14土層断面（南より）
②SH03遺物出土状況	②SD20土層断面（北より）
図版11 ①SH04検出状況（南より）	図版22 ①SD23・24検出状況（北より）
②SH04土層断面	②SD25検出状況（北より）
図版12 ①SH04遺物出土状況	図版23 ①SE01検出状況
②SH04遺物出土状況	②SE01検出状況
図版13 ①SH04遺物出土状況（南より）	

- | | | | |
|------|--------------|--------------|------------|
| 図版24 | ①SX01・02出土遺物 | ②SD01出土遺物(1) | |
| | ②SX02出土遺物 | ③SD01出土遺物(2) | |
| 図版25 | SD22出土遺物 | ②SD14出土遺物 | |
| 図版26 | SH02出土遺物 | ③SD02出土遺物 | |
| 図版27 | SH03出土遺物 | ④SD11出土遺物 | |
| 図版28 | SH04出土遺物 | 図版32 | ①SD17出土遺物 |
| 図版29 | ①SK01出土遺物 | ②SD27出土遺物 | |
| | ②SK02出土遺物 | 図版33 | 包含層出土遺物(1) |
| | ③SD12出土遺物(1) | 図版34 | 包含層出土遺物(2) |
| 図版30 | ①SD12出土遺物(2) | | |

付 図

付図1 三条番ノ原遺跡遺構配置図

付図2 三条番ノ原遺跡遺構配置図

第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯

四国横断自動車道高松～善通寺間の建設は、同善通寺～豊浜間に引き続き、昭和57年1月8日に整備計画決定され、昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団總裁に対して施工命令が下された。

香川県教育委員会では、この間路線内の埋蔵文化財包蔵地の確認を目的に国庫補助事業として分布調査(註)を実施し、これをもとに調査対象面積を39万㎡余りと判断した。路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、日本道路公団と文化庁の協議により、基本的には記録保存で対応することが決定した。

香川県教育委員会では、これを受けて香川県の担当課である土木部横断道対策室及び日本道路公団高松建設局高松工事事務所と昭和62年度から調査体制等について協議を開始した。

協議の結果、昭和63年度当初から2ヵ年の予定で本調査を実施すること、整理報告は発掘調査の終了後に実施すること等が決定した。これを受けて県教育委員会では調査体制の充実を図ることを目的に、昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設置すると同時に、専門職員の増員等の措置を実施した。

これと並行して、横断道路線内の埋蔵文化財包蔵地の具体的な内容を把握するため、日本道路公団と協議の上、予備調査を実施することになり、用地買収の進捗が著しかった丸亀市郡家地区を対象として、昭和63年3月に県教育委員会が実施した。予備調査の着手に当たっては、地元の四国横断自動車道建設丸亀市郡家地区対策協議会、土木部高速自動車道担当、香川県普通寺土木事務所横断道対策課の多大な協力を得た。

予備調査の結果、郡家地区で集落跡を中心とする6遺跡の内容を把握することができ、同地区での本調査面積を85,150㎡に確定した。

調査体制の整備に伴い、昭和63年度からの本調査は、香川県教育委員会が日本道路公団高松建設局から委託を受け、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

昭和63年4月18日から三条番ノ原遺跡外2遺跡を、残り3遺跡は6月15日から本調査を実施した。今回報告する三条番ノ原遺跡は、郡家地区6遺跡の西端に位置し、調査対象面積は13,341㎡を計り、前述のとおり4月18日から調査に着手し、平成元年度に終了した。

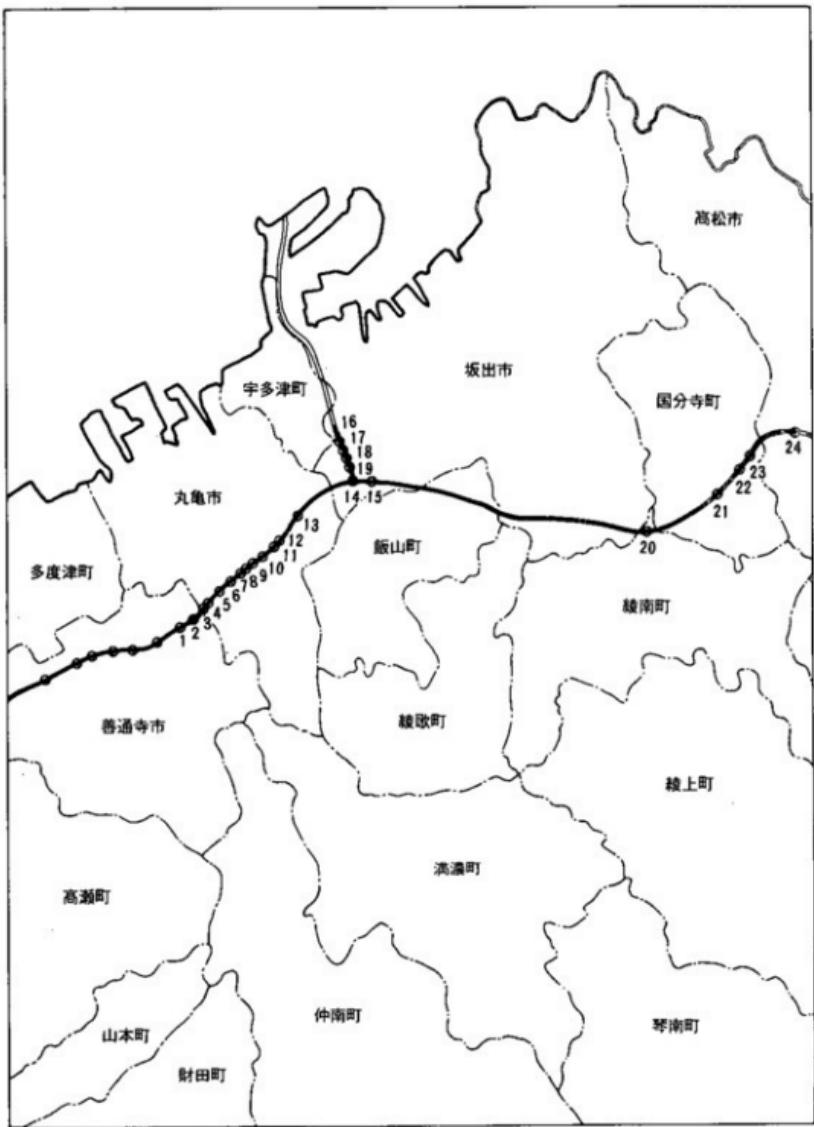
註 「国道バイパス及び四国横断自動車道建設予定地内埋蔵文化財詳細分布・試掘調査概報」
昭和63年3月31日 香川県教育委員会

No.	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	調査期間	遺構	遺物	備考
1	龍川五条遺跡	普通寺市原田町	12,300 10,200	元. 6.26~2. 3.31 2. 4. 9~2. 12. 5	弥生時代墓・堅穴住跡・構	弥生土器・土師器・須恵器	
2	龍川四条遺跡	普通寺市原田町・木穂町	18,200	元. 7. 1~2. 3.31	古代掘立柱建物跡・自然河川・溝	縄文土器・土師器・須恵器	
3	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町	12,041 1,300	63. 4. 18~元. 2. 10 元. 4. 10~2. 3.31	堅穴住跡・自然河川・溝状遺構	弥生土器ほか	
4	三条黒島遺跡	丸亀市三条町	7,677	63. 5. 15~63. 11. 26	ユニット・溝状遺構・壁地跡	旧石器・弥生土器・陶磁器	
5	郡家原遺跡	丸亀市郡家町	17,000 2,600	63. 4. 18~元. 3. 31 元. 4. 10~2. 3.31	堅穴住跡・掘立柱建物跡・溝状遺構	弥生土器・縄文土器・斎弔ほか	
6	郡家一里塚遺跡	丸亀市郡家町	14,067 6,450	63. 4. 18~元. 3. 31 元. 4. 10~2. 3.31	掘立柱建物跡・溝状遺構	有舌尖頭器・縄文土器・灰釉土器	
7	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町	11,175	63. 6. 15~元. 3. 22	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	須恵器・斎弔ほか	
8	郡家田代遺跡	丸亀市川西町	12,741	63. 6. 15~元. 2. 17	掘立柱建物跡・溝状遺構・火葬墓	ナヒ形石器・弥生土器・須恵器	近世陶磁器
9	川西北・原遺跡	丸亀市川西町	3,033	63. 12. 12~元. 3. 25	掘立柱建物跡・溝状遺構		
10	川西北・七条1遺跡	丸亀市川西町	4,034	63. 12. 13~元. 3. 27	溝状遺構・自然河川	土師器・須恵器	
11	川西北・七条2遺跡	丸亀市川西町	4,760	元. 2. 2~元. 3. 31	掘立柱建物跡・溝状遺構	土師器	
12	川西北・鶴治屋遺跡	丸亀市川西町	12,208	元. 4. 10~元. 8. 11	中世掘立柱建物跡・溝・自然河川	土師器・須恵器・近世陶磁器	

第1表 四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(1)

No	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	調査期間	遺物	備考
13	飯野・東二瓦塚遺跡	九鬼市飯野町	3,366	63.12.13～元.3.27	掘立柱建物跡・構造遺跡・自然河川	土器器・須恵器
14	川津東山田遺跡	坂出市川津町・綾歌郡飯山町	28,100	2.8.2～3.3.20	弥生時代窓穴住居跡・古墳時代窓穴住居跡	弥生土器・土師器・須恵器
15	川津川西遺跡	坂出市川津町	5,400	2.5.10～3.1.17	古墳時代窓穴住居跡・溝 古代～中世建物跡・溝	縄文土器・土師器・須恵器・耳環 土馬・墨書き土器
16	川津中條遺跡Ⅰ・Ⅱ区	坂出市川津町	15,290	2.5.10～3.2.28	弥生時代窓穴住居跡・溝・土坑 古代～中世建物跡	弥生土器・耳輪・土師器・須恵器
17	川津下綾遺跡	坂出市川津町	9,650	2.5.10～3.1.31	弥生時代水田・井樋・溝・ 自然河川	縄文土器・石器 弥生土器・石器・木製品
18	川津二代野遺跡	坂出市川津町	10,400	2.5.10～3.3.8	弥生時代溝・自然河川 中世建物跡・溝	弥生土器・石器・土師器
19	川津一ノ又遺跡Ⅲ・IV区	坂出市川津町	35,160	2.4.12～3.3.28	弥生時代窓穴住居跡・建物跡 古墳時代窓穴住居跡	弥生土器・石器・土師器・須恵器 木製品
20	綾柄堺下池前遺跡	綾歌郡綾柄町	2,900	元.5.22～元.7.24	須恵器窯跡	須恵器
21	国分寺下日名代遺跡	綾歌郡国分寺町	11,350	元.8.19～2.2.28	弥生時代溝・水田跡・動物足跡	弥生土器・土師器・須恵器
22	国分寺六ヶ日山古墳	綾歌郡国分寺町	900	元.9.1～元.12.28	前方後円墳（主体部3基）	古式土師器・鉄器
23	国分寺六ヶ日山遺跡	綾歌郡国分寺町	5,600	元.10.1～2.2.28	中近世建物跡	石器・弥生土器・近世陶磁器
24	中間西井戸遺跡	高松市中間町	11,600	元.8.19～2.3.25	弥生～近世建物跡・溝・土坑	弥生土器・土師器・須恵器

第2表 四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(2)



第1図 四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地(善通寺～高松)

第2節 調査の経過

三条番ノ原遺跡の調査は、昭和63年3月に予備調査を行ない、本調査は昭和63年4月に着手した。

丸亀平野での発掘調査は、現在の水田地割りが条里制施行時の条里地割りに合うものかどうかということが課題の一つである。三条番ノ原遺跡は、調査区の西端が從来言われている那珂郡条里の三条と四条の境にあたり、これを明らかにすることが今後の条里制研究にとって重要であるとの視点で調査を開始した。

調査は13,341m²を調査対象面積として、昭和63年4月18日に開始し、平成元年3月31日に終了した。なお、調査対象地内の宅地部分については、平成元年12月11日～平成2年3月31日に調査を実施した。

三条番ノ原遺跡の整理作業は平成3年8月1日に開始し、平成4年3月31日に終了した。

三条番ノ原遺跡の調査・整理の体制は次のとおりである。

昭和63年度

文化行政課				財団法人香川県埋蔵文化財調査センター			
総務	課長	廣瀬 和孝	所長	田丸 秀明			
	課長補佐	高木 尚	次長	小原 克己			
	副主幹	野網朝二郎 (6.1～)	総務	主査(事務) 加藤 正司			
	係長	宮谷 昌之 (～5.31)	主査(土木)	山地 修 (6.1～)			
	主事	横田 秀幸 (6.1～)	主事	三宅 浩司			
	〃	水本久美子	参事	見勢 護			
埋蔵文化財調査	係長	大山 真充	調査	文化財専門員 真鍋 昌宏			
	主任技師	安藤 和清	主任技師	山根 進			
	技師	國木 健司	技師	片桐 孝浩			
			〃	藤川 善規			
				調査技術員 大前 智司			

平成3年度

文化行政課				財団法人香川県埋蔵文化財調査センター			
総括	課長	中村 仁	所長	松本 豊胤			
	主幹	菅原 良弘	次長	安藤 道雄			
	課長補佐	小原 克己 (6.1～)	総務	係長(事務) 加藤 正司 (～5.31)			
	副主幹	野網朝二郎 (～5.31)					

総務	係長	宮内 憲生	主任技師	土井 茂樹 (6.1~)
主事	横田 秀幸 (~5.31)		"	斎藤 政好
"	櫻木 新士 (6.1~)	整理	係長	真鍋 昌宏
"	石川恵三子		主任技師	片桐 孝浩
埋蔵文化財	係長	藤好 史郎		
調査	主任技師	岩橋 孝 北山健一郎		
整理作業従事者				

戸川 昌代, 塩崎 訓子, 青木 民江, 中野 優美, 荒木美千子

第3表 造構番号変更表

溝状造構 (S D)

新	旧	新	旧	新	旧
01	32	10	13	19	30
02	31	11	10	20	35
03	34	12	11	21	03
04	22	13	12	22	01
05	23	14	20	23	05
06	17	15	26	24	04
07	16	16	25	25	19
08	14	17	33	26	18
09	15	18	29	27	

堅穴住居跡 (S H)

新	旧	新	旧	新	旧
01	01(3次)	03	01(2次)		
02	01(2次)	04	S B01		

土坑 (S X)

新	旧	新	旧	新	旧
01	09	03	04		
02	01	04			

井戸 (S E)

新	旧	新	旧	新	旧
01	01				

第2章 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

香川県のはば中央に位置する広義の
丸亀平野は、普通寺・丸亀・坂出平野の
狭義の平野で構成されており、三条番ノ
原遺跡はその中央の狭義の丸亀平野のは
ば中央部に位置する。普通寺平野および
坂出平野は前者が金倉川および弘田川、
後者が大東川の長期間にわたる氾濫、堆
積の末に形成した沖積地である。一方狭
義の丸亀平野は普通寺平野・坂出平野の
ような沖積平野とは異なり、緩やかに南
から北に向って傾斜する緩扇状地からな
るものと考えられる。この扇状地は凹凸
が少ない平坦な地形をしているため、条
里制施行による方格の土地区画がよく残
っている。

^{註2}この緩扇状地に残された現在
の地割りに金倉川および土器川の旧流路
と思われる乱れが確認できる。この乱れ

は、方格土地地割が造られた以後に河川の氾濫があったことを物語っている。

三条番ノ原遺跡はこの方格地割がよく残っているところに立地していることから発掘調査によ
る方格地割の復元を第一の課題とした。

(2) 歴史的環境

広義の丸亀平野には旧石器時代から中・近世にかけての遺跡が多数検出されている。しかし、
現在確認されている遺跡のほとんどは普通寺平野・坂出平野を中心広がっており、古代から近
・現代における丸亀平野中心部の状況が、発掘調査により解明できることが予想された。

ここでは丸亀平野の遺跡の立地から各時代の状況を概観したい。



第2図 三条番ノ原遺跡位置図(1:50,000)

旧石器時代

香川県の五色台・金山は、奈良県と大阪府にまたがる二上山と同様にサヌカイトの原産地として有名である。坂出平野東部の五色台山頂にはナイフ形石器や尖頭器などの製品と共に多数の未製品が散布している国分台遺跡がある。また、瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査で櫃石島・岩黒島・羽佐島…与島の旧石器時代の遺跡の調査が行なわれ、多数の旧石器が出土している。横断道の調査が実施される前までは石材原産地である五色台周辺あるいは備讃瀬戸の島々にのみ旧石器時代の遺跡が存在されるものと思われていたがこの調査により、丸亀平野内陸部、三条黒島遺跡でも旧石器の遺物が検出された。

三条黒島遺跡からは約4m範囲にサヌカイト片が分布する石器集中ブロックが検出された。この石器ブロックからは舟底形石器・スクレイバー・横長剝片など合計140点の剝片が出土している。その中には接合資料もみられ、石器製作技法を考えるにあたり貴重な資料となった。また、一方旧石器時代人の行動範囲にも言及できるものである。

縄文時代

丸亀平野における縄文時代の遺跡は横断道調査の結果、多数検出された。その代表的な遺跡は善通寺平野で確認された永井遺跡である。この永井遺跡では堅穴住居跡などの生活跡は検出されなかったものの、自然流路よりどんぐりなど多數の堅果類と共に縄文時代後期を中心とする土器が多量に出土している。

縄文時代晩期になると遺物の多少にかかわらず出土遺跡をあげると永井遺跡・稻木遺跡A地区・龍川四条遺跡A地区・龍川四条遺跡B地区・下川津遺跡・川津下樋遺跡などがあり、縄文時代後期に比べると遺跡数は増えるようである。しかし、ここで気を付けておかなければならないのはいわゆる突帯文土器の出土を以て縄文時代晩期としている遺跡である。この突帯文土器はその出現及び消長がまだ不明確で、新しくは弥生時代前期まで残ることである。これについては現在のところ明確な土器編年ができていないので、ここにあげた縄文時代晩期の遺跡はいわゆる広義の突帯文土器の出土した遺跡と言い換えられる。

弥生時代

丸亀平野における弥生時代の遺跡は多数確認されている。

弥生時代前期では善通寺平野の甲山北遺跡・三井遺跡・稻木遺跡A地区、丸亀平野の五条遺跡・龍川五条遺跡・中の池遺跡・三条番ノ原遺跡・三条黒島遺跡、坂出平野の下川津遺跡・川津下樋遺跡・川津二代取遺跡などがあげられる。これら広義の丸亀平野に分布する遺跡をまとめると金倉川の自然堤防上に立地する五条遺跡・龍川五条遺跡・中の池遺跡をのぞくとそのほとんどが善通寺平野及び坂出平野の沖積地上に立地していることが判る。

次の弥生時代中期になると平野部における遺跡数は激減し、そのほとんどが丘陵の頂部あるいは海岸線からやや奥まった山裾などのやや高地に営まれる。その代表的な遺跡として善通寺平野

西部に位置する矢ノ塚遺跡・西碑殿遺跡があげられる。

これらの遺跡は中期後半の時期が与えられている。ちょうどこの時期には瀬戸内海沿岸を中心

註3

として香川県紫雲出山遺跡・兵庫県会下山遺跡などの高地性集落が出現する時期にあたり、この香川県での集落の立地が直接この高地性集落の出現となんらかの関係があるかどうかは現在のところ不明である。しかし、集落の立地を考えるにあたり、この集落の移動は避けて通れない問題である。

しかし、なぜ生産基盤である平野から離れたところ(丘陵上・山裾・山頂)に集落を営むのであろうか。今まで言われてきた高地性集落の出現とは別に自然環境の変化(海進)、あるいは沖積平野という立地から河川の氾濫などに対する土木工事の未熟さということも推測される。また、人口増加による母村・分村ということも考えておかなくてはならない。

次に弥生時代後期になると以前まで沖積地(前期)・丘陵上(中期)を中心に集落が営まれていたものが、丸亀平野中央部(緩扇状地)にも集落が営まれるようになるようである。その代表的な遺跡をあげると三条番ノ原遺跡・郡家原遺跡がある。また、沖積平野でも善通寺平野では旧練兵場遺跡・稻木遺跡C地区、坂出平野では下川津遺跡・川津元結木遺跡・川津一ノ又遺跡Ⅲ区・川津一ノ又遺跡Ⅳ区・川津東山田遺跡などがあげられる。このように平野部を中心に大規模な集落が営まれ、遺跡数も増加する。後期以前には沖積平野に主として集落が営まれていたものがなぜ後期になると丸亀平野中央部(緩扇状地)まで集落が営まるようになるのだろうか。

まず、沖積平野が緩扇状地と大きく異なるところは水稻耕作のための水の確保にあるものと思われる。そのために一方では灌溉技術の向上とそれに伴う道具の発達がその要因と考えられる。また、弥生時代後期になっての人口増加もそれに拍車をかけたものと考えられる。このような要因により、耕地面積の確保のために丸亀平野中央部に集落が営まれたことが推測される。

古墳時代

古墳時代になると弥生時代後期の集落を形成していた首長から独自の墳墓を形成するものが現われる。その兆候として弥生時代後期後半頃から現われていたのが稻木遺跡C地区で検出された集石墓群である。この集石墓が直接的に次期の前方後円墳を形成した首長に繋がるかは不明であるが、特に大規模な集落が形成されていた善通寺平野周辺に磨臼山古墳・野田院古墳、坂出平野周辺に爺ヶ松古墳・ハカリゴーロ古墳などの前期古墳が多いことからもつながる可能性が推察される。

古代

古代になると寺院が讃岐国でも盛んに造られる。現在讃岐国には34ヶ所の古代寺院があったといわれており、瀬戸内沿岸諸国では播磨國の次に多く、仏教文化が華開いた土地であった。ここ善通寺・丸亀・坂出平野でも善通寺・中村庵寺・田村庵寺・弘安寺・法點寺・宝幢寺・醍醐寺や、香川県最古の寺院である開法寺あるいは鴨庵寺などの古代寺院が確認されている。



第3図 周辺地域の遺跡

- 1 三条番ノ原遺跡
- 2 聖通寺山古墳
- 3 聖通寺城跡
- 4 田尾白山古墳
- 5 南田尾古墳
- 6 潤見塙古墳
- 7 同宮古墳
- 8 下川津1号墳
- 9 下川津遺跡
- 10 川津中塚遺跡Ⅰ・Ⅱ区
- 11 小山古墳
- 12 運尺貞白山古墳
- 13 金山古墳
- 14 長者原古墳
- 15 川津下塙遺跡
- 16 川津二代目古跡
- 17 川津元祐木道跡
- 18 西又遺跡
- 19 川津一ノ又遺跡Ⅲ・Ⅳ区
- 20 青ノ山古墳群
- 21 青ノ山山頂遺跡
- 22 青ノ山1号墳
- 23 吉岡神社古墳
- 24 青ノ山城跡
- 25 丸丸城
- 26 田村庵寺
- 27 道下遺跡
- 28 金倉城跡
- 29 中の池遺跡
- 30 田村池遺跡
- 31 五条遺跡
- 32 三井遺跡
- 33 上一坊遺跡
- 34 乾道跡
- 35 中村遺跡
- 36 永井遺跡
- 37 稲木遺跡
- 38 金藏寺下所遺跡
- 39 龍川五条遺跡
- 40 龍川西条A遺跡
- 41 龍川西条B遺跡
- 42 三条鹿島遺跡
- 43 郡家原遺跡
- 44 一里屋山遺跡
- 45 郡家大林上遺跡
- 46 郡家田代遺跡
- 47 川西北・原古跡
- 48 川西北・七条1号墳
- 49 川西北・七条2号墳
- 50 川西北・坂右屋追跡
- 51 新野・東二瓦被追跡
- 52 川津東山古道跡
- 53 川津西古道跡
- 54 三ノ池古墳
- 55 向山古墳
- 56 鶴野山山頂追跡
- 57 宝慧寺
- 58 仲村城跡
- 59 下吉田八幡追跡
- 60 丸頭神道跡
- 61 石川遺跡
- 62 甲山北追跡
- 63 甲山城跡
- 64 青龍古墳
- 65 彼ノ宗道跡
- 66 仙遊古跡
- 67 仲村廣寺
- 68 霊通寺
- 69 善通寺西古道跡
- 70 錦伏山古墳群
- 71 陣山遺跡
- 72 同田万塚古墳群
- 73 我孫師B古墳
- 74 我孫師C古墳
- 75 我孫師A古墳
- 76 北原シネバエ古道跡
- 77 北原古墳
- 78 菊原古墳
- 79 王墓山古墳
- 80 鶴力崎3号墳
- 81 鶴力崎1号墳
- 82 忍野山古墳
- 83 公文山古墳群
- 84 西山遺跡

また、丸亀市郡家原遺跡・郡家一里屋遺跡などでは発掘調査の結果、6世紀後半から7世紀にかけての掘立柱建物跡が多数検出されたことも、この辺りに住む有力豪族の存在を裏づけることができる。

また、この丸亀平野は地理的環境で述べたが、緩扁状地のため条里制に伴う方格地割の残りが良い。そして、それを裏付けるように鶴足郡では七条、那珂郡では三条・四条・五条などの地名が残っている。この方格地割の施行が奈良時代の条里制施行時まで遡るのかは不明であるが、この調査が条里制研究の一資料になればと考える。

註1 善通寺市から丸亀市および坂出市にかけての広大な平野は、その中心である扇状地状の丸亀市の平野と金倉川あるいは大東川によって形成された冲積地である善通寺市の平野・坂出市の平野に細分されるものと思われる。そこでここではその形態および立地などから平野全体を呼称する場合には「広義の丸亀平野」を、それぞれの平野を呼称する場合には「狭義の善通寺・丸亀・坂出平野」とする。

註2 条里制は奈良時代に施行されたものであるが、現在の丸亀平野に残る基盤の目状の土地区画が奈良時代に遡るものかが不明であるので、ここでは条里地割ということばを用いず、「方格地割」という用語を用いる。

註3 狹義の高地性集落とは香川県紫雲出山遺跡、兵庫県今下山遺跡などに代表される見張り台あるいは烽火台的な性格をもつ遺跡を指すものである。

第3章 調査の成果

第1節 遺構・遺物

三条番ノ原遺跡では旧石器時代から中・近世までの遺構が多数検出された。

旧石器時代・縄文時代の遺構は希薄であるが、弥生時代後期の遺構は環濠と思われる溝に区画された竪穴住居跡群が検出されている。また、古代から中・近世にかけての溝は真北から約30°西にふった現在の水田地割にあうもので古代の条里制との関連が注目される。

以下、各時期ごとの遺構・遺物について説明する。

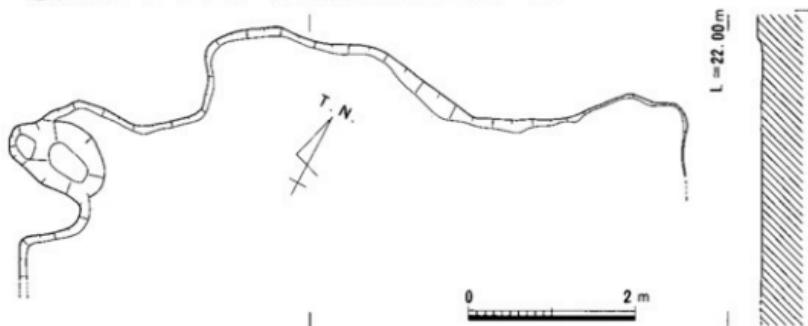
1 旧石器時代

旧石器時代の遺構は調査区西部で土坑状の落ち込みが多数検出された。これらは全て平面形が不定形で出土遺物もかなり風化の激しい少量のサヌカイト片だけであった。そのため土坑状の落ち込み全てが遺構になるかは不明である。しかし、SX02からは縦長剥片や縦長剥片石核などが出土しており、明らかに旧石器時代の土坑であることが判る。また、当遺跡に隣接する三条黒島遺跡からは石器の接合資料が出土していることもあり、旧石器時代にこの地に生活の跡があったものと考えられる。当遺跡の包含層中からはナイフ形石器・舟底形石器が出土している。

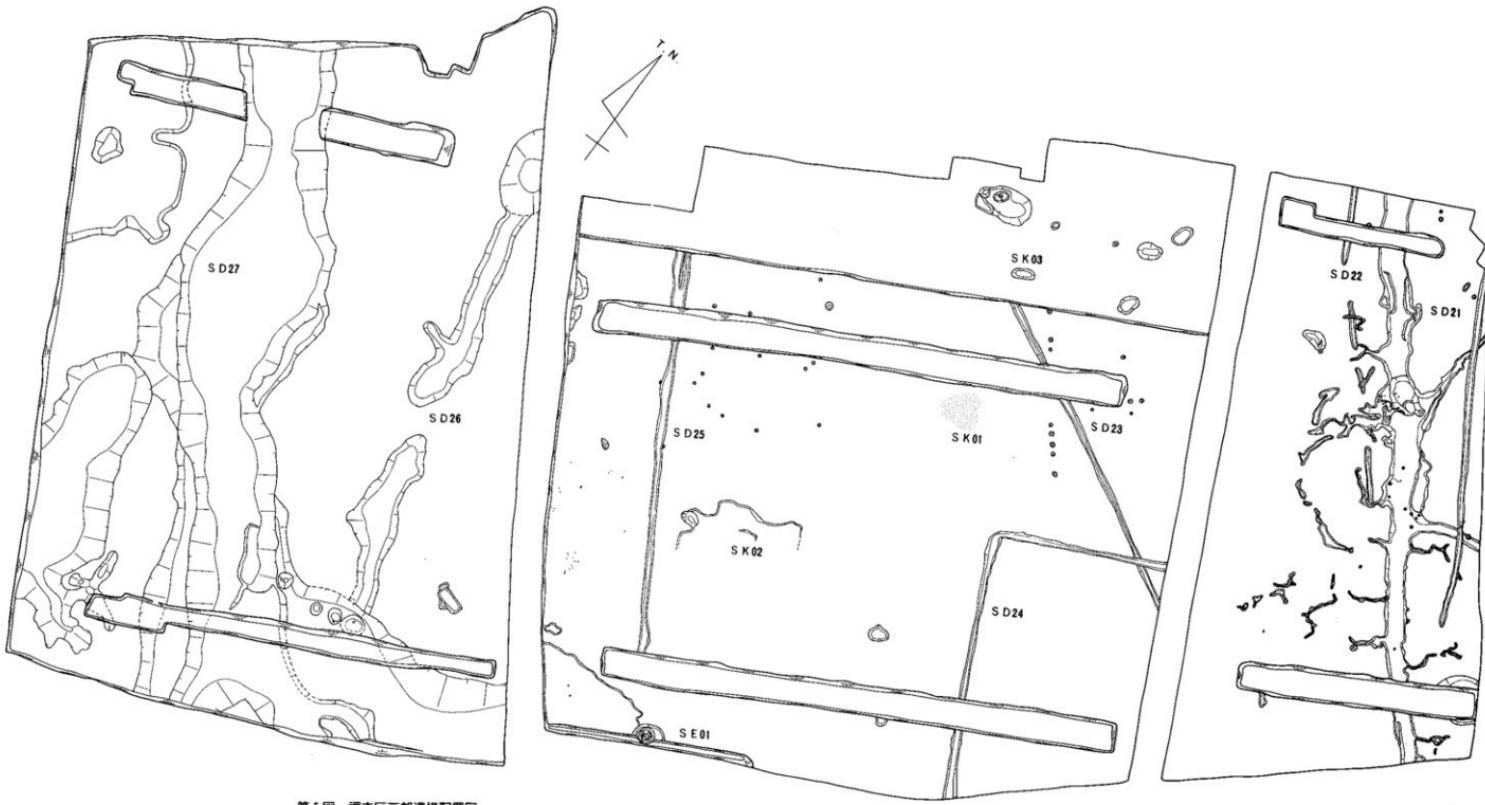
SX02（第4・7図）

SX02は調査区西部で検出された土坑状の落ち込みである。南半分は検出できなかったが、徐々に浅くなるものである。検出面からの深さは0.12mを計る（第4図）。

遺物は石器・サヌカイト片・焼石などが出土地してい（第7図）。

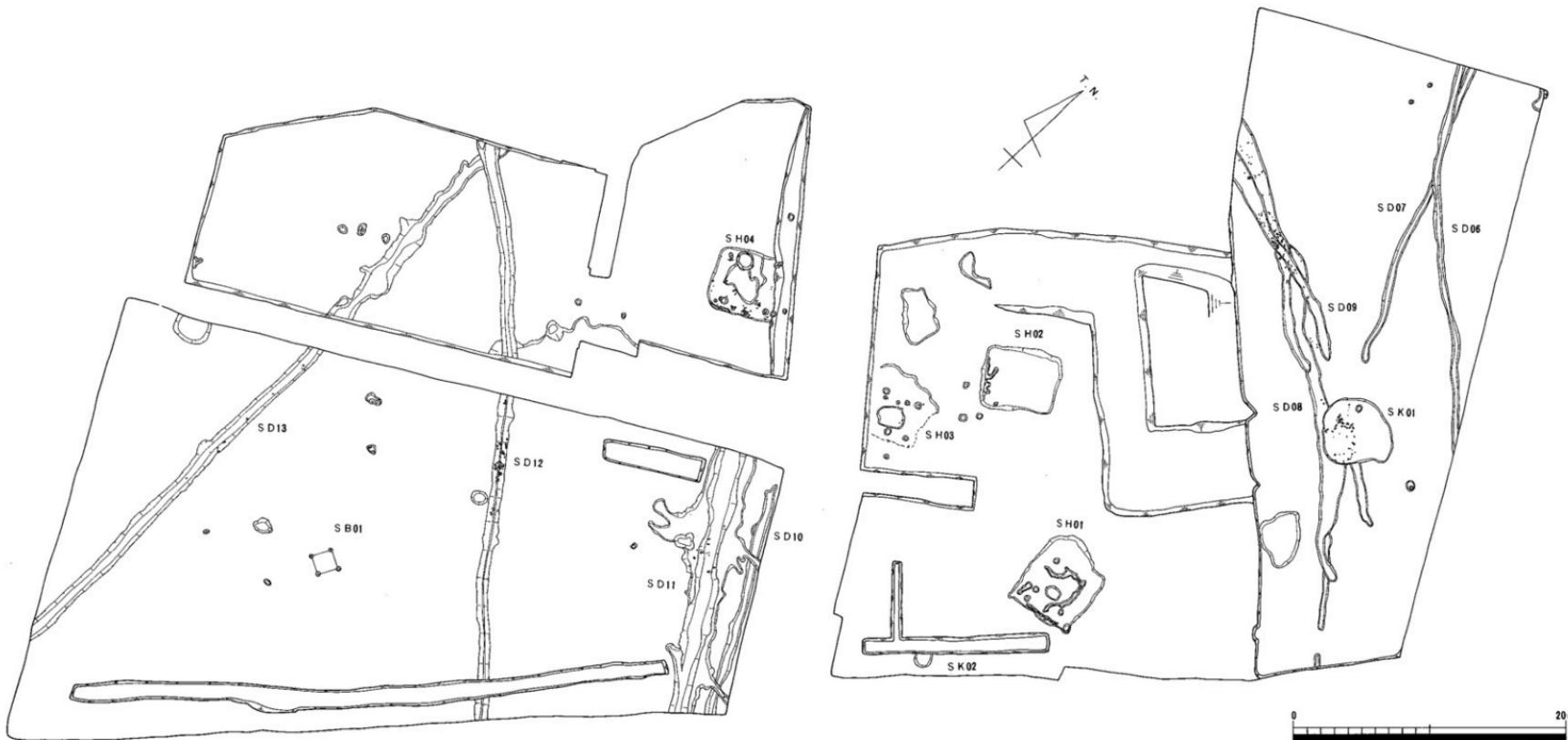


第4図 SX02平・断面図

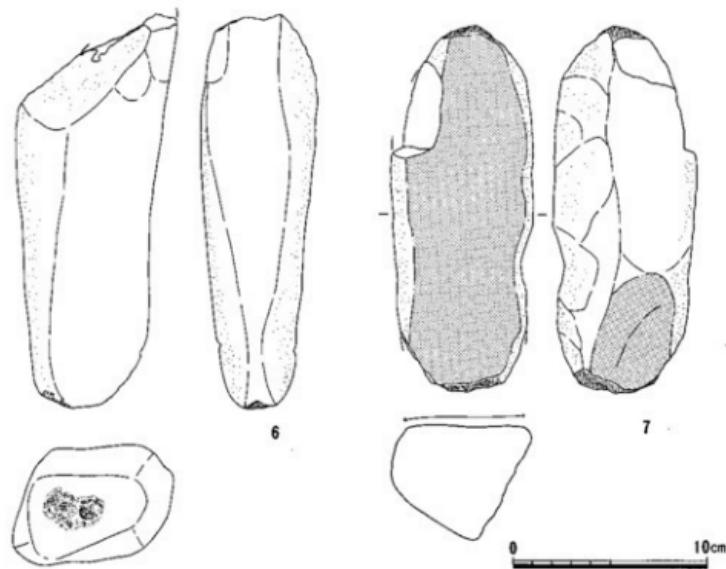
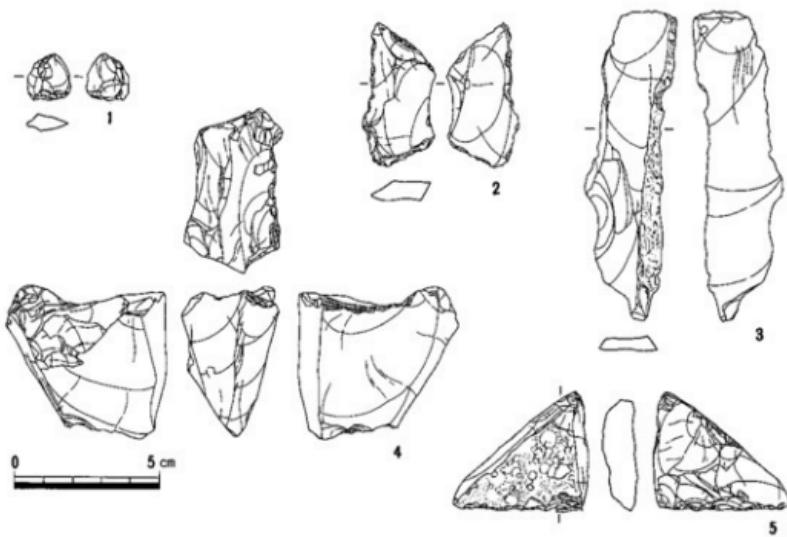


第5図 調査区西部遺構配置図

0 20m



第6図 調査区東部遺構配置図



第7図 SX02出土遺物実測図

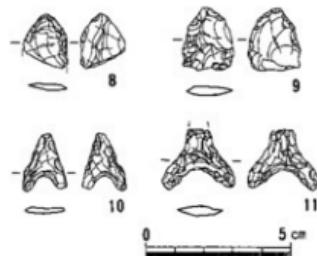
2はサヌカイト製の横長剝片である。左側辺と上下側辺に二次加工が施されている。3はサヌカイト製(白色風化サヌカイト)の縦長剝片である。表面がかなり風化している。4はサヌカイト製の縦長剝片石核である。上面を打面調整し、その面を打点として縦長剝片を取ったようである。5はサヌカイト製のスクレイパーである。6・7は砂岩製の敲き石である。7は上下に敲打痕が確認できる。これら全ての石器はかなり風化している。1はサヌカイト製の石鎌である。長さ1.6cm、幅1.5cmと小さいもので、側辺が丸味を帯びている。縄文時代以降の石鎌に比べるとやや粗い作りで、側辺の細かい調整はみられない。SX02は土坑状の浅い落ち込みを呈するものであり、1には後世の混入の可能性も考えられる。

この土坑状の落ち込みは、出土遺物から旧石器時代のものと考えられる。

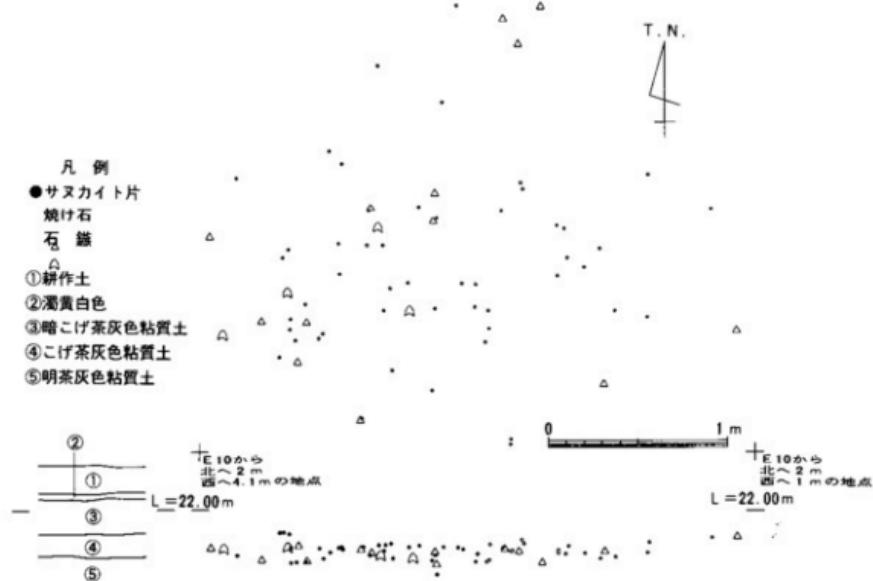
2 縄文時代

縄文時代と思われる遺構は調査区西部で検出された。確実な縄文時代の遺物を供伴する遺構ではないが、出土した石鎌から縄文時代のものと考えられる。この遺構はサヌカイト片が一ヶ所から集中して検出されており、石器製作地的な場所の可能性が考えられる。

SX01 (第8・9図、図版2-①・②)



第8図 SX01出土遺物実測図



第9図 SX01出土石製品 器種別平面分布図・垂直分布図

SX01はサスカイト片(0.5cm~3cm程度の小片)と焼石が約2.5mの範囲に集中して検出されたもので、その中からサスカイト製の石鎚が4点出土している(第9図)。

石鎚4点中2点が完成品で他2点が未製品であった(第8図)。

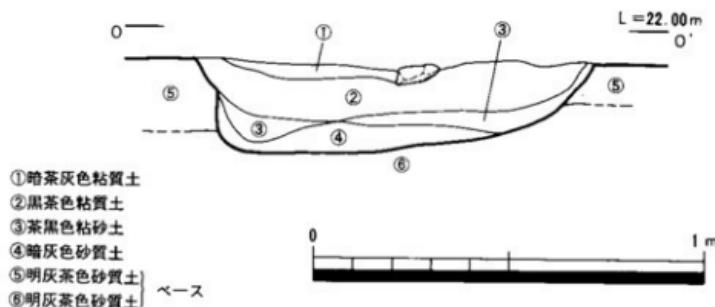
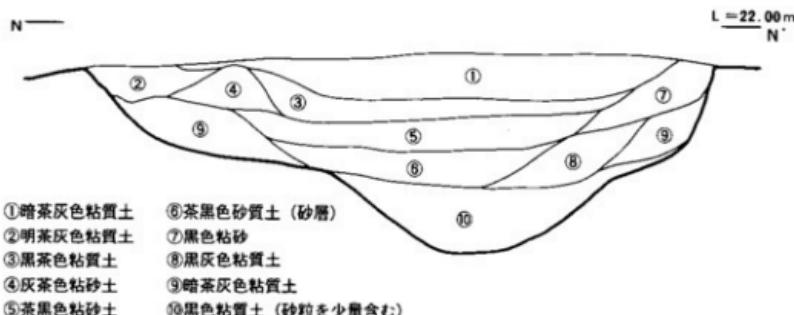
8・9は未製品(基部が平基のものか)の石鎚である。材質はサスカイト製である。10・11はサスカイト製の石鎚である。基部の抉りが深く、足の長い石鎚である。

3 弥生時代前期

弥生時代前期の遺構は調査区のはば中央で検出されている溝だけである。

SD22(第10・11・12図、図版3-①・② 4-①・②)

SD22は南西から北西に流路を取る溝で、検出された中央部でこの溝に流れこむ溝より流れだす溝が検出されている。規模は天幅約1.62m、深さ約0.52mを計る。SD22に流れこむ溝が合流する部分では杭と思われる柱穴が確認されており、この杭が水量の調節機能を持ってい

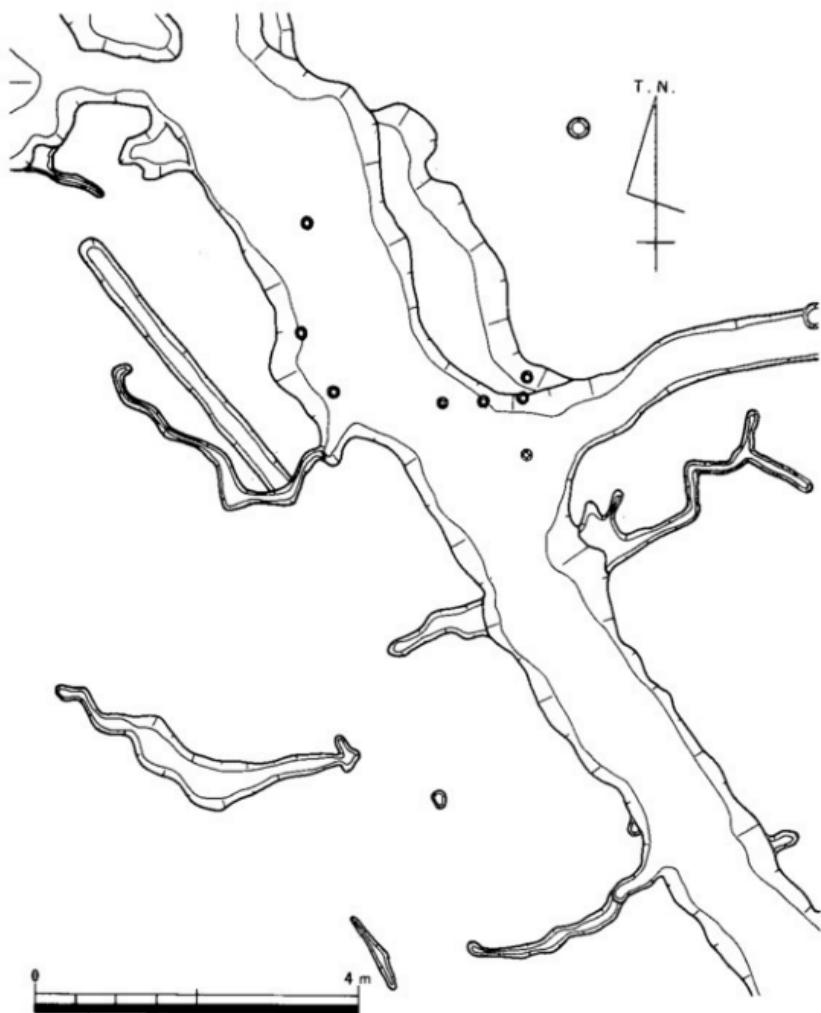


第10図 SD22土層断面図

たのではないかと考えられる(第10・11図)。

遺物は土器と石製品が出土している(第12図)。

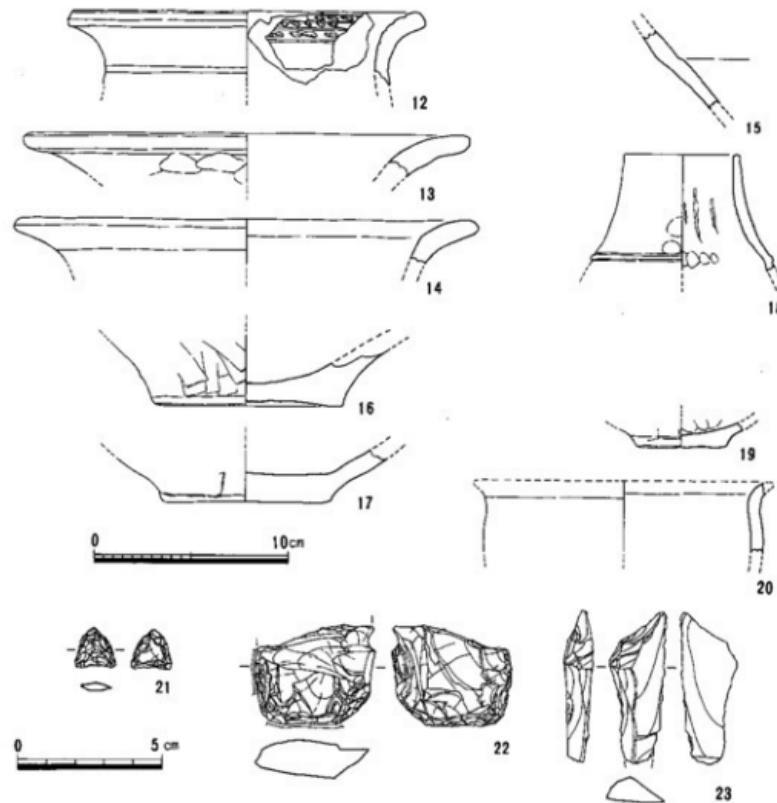
12～17は弥生土器の壺である。12は口縁部が緩やかに外反するものである。頸部上端には一条のヘラ彫沈線が、口縁部内面には4条のヘラ彫沈線の各間に刺突文が施されている。15は壺の肩



第11図 SD22杭列平面図

部である。削り出しによる段を持つ。18・19は壺である。18は体部と頸部の境に削り出しによる突帯が施されており、口縁部は内傾しながら立ち上がる。器壁はかなり薄く作られている。19は底部と体部の境にやや段を持つ底部である。この両者はおそらく一個体になるものと思われるもので、胎土が精良に作られており、器壁もかなり薄く口縁部が内傾するように作られている点などから一般的な弥生時代の壺でないことが判る。20は甕である。口縁部は如意状に外反するもので、体部はやや膨らむ。

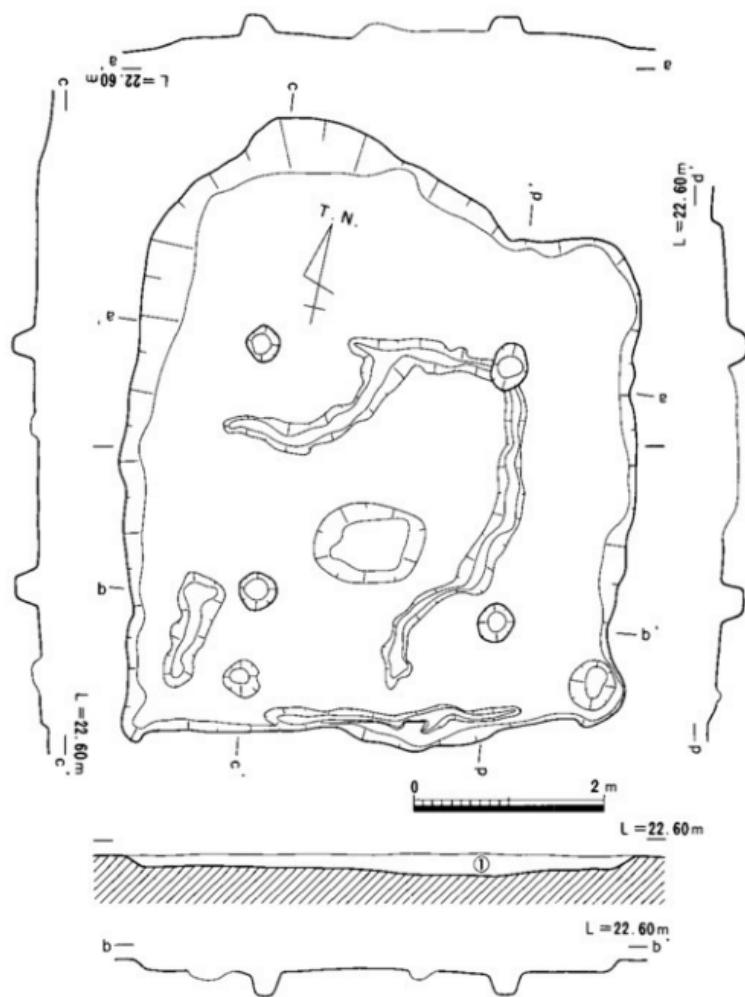
21～23は石製品である。21はサヌカイト製の石鎌である。22はサヌカイト製の打製石斧である。刃部先端部と左側辺には敲打による摩滅が認められる。基部は欠損している。23はサヌカイト製(白色風化サヌカイト)のナイフ形石器である。



第12図 SD22出土遺物実測図

4 弥生時代後期

弥生時代後期の遺構は竪穴住居跡を中心として溝が数条検出された。これらの遺構が検出されたところはやや微高地状になっており、この竪穴住居群を取り囲むように環濠らしき溝SD08・



①暗黒褐色粘質土（5～10cm大の河原石を多量に含む）

第13図 SH01平・断面図

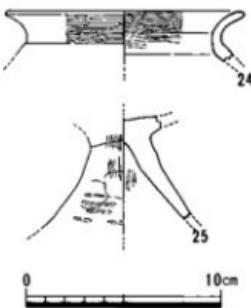
09が確認されている。

SH01 (第13・14図、図版5-①)

SH01は調査区東部で検出された。検出平面形はやや歪んでいるがほぼ隅丸方形を呈しており、東西約5.35m、南北約6.00m、残存深約0.16mを計る。この竪穴住居跡の主軸は真北より7°西偏している。床面には主柱穴が4個検出されており、南壁沿いには壁溝も一部検出されている。また、中央には炉跡が検出されており、その炉を取り囲むように溝が検出されている(第13図)。

遺物は弥生土器が出土している(第14図)。

24は甕である。頸部が「く」の字に外方に屈曲し、口縁部は外反しながら延びるものである。口縁部内外面に横方向の刷毛目が施されている。



第14図 SH01出土遺物実測図

25は高環の脚部である。脚はスカート状に開くもので、脚部外面に叩きの後、縦方向の刷毛目が施されている。

SH02 (第15~18図、図版5-② 6-①・②)

SH02は調査区東部で検出された。検出平面形は東西に長い隅丸長方形を呈しており、東西約5.48m、南北約4.38m、残存深約0.26mを計る。この竪穴住居跡の主軸は真北より34°西偏している。主柱穴は検出されなかった。西壁沿いには壁溝が一部検出されている(第15図)。

遺物は弥生土器が多量に出土している(第16・17・18図)。

26~27は甕である。26は口縁部が朝顔状に開き、口縁端部が上方に小さく延びる。頸部外面に縦方向の刷毛目が施されている。

28~39は甕である。口縁部の特徴で2形態に分かれる。ひとつは「く」の字に屈曲した頸部から外上方にはぼ真直ぐ延びるもの(28・29・30)、ひとつは真直ぐ延びた口縁端部を上方に小さく摘み上げるもの(31・32・33)である。28は小型の甕である。底部はわずかに平底を残し、口縁部は「く」の字に外反する。体部最大径はほぼ中位にある。体部外面には叩きの後刷毛目が、内面には体部中位までヘラ削りが、上半から頸部にかけて横方向の刷毛目が施されている。32は体部外面を叩きのみで終わらせる。

この竪穴住居跡出土の甕をみると底部にはわずかに平底を残しており、体部最大径はほぼ体部中位にある。調整は体部外面が叩きの後刷毛目を施すものがおおく、内面は体部下半を縦方向のヘラ削り、上半が横方向の刷毛目か指頭痕によるものが多い。また、35・36のように底部内面に指頭痕が施されているものも観られる。

40は皿である。器高が浅く、体部外面に指頭痕が顕著に施されている。

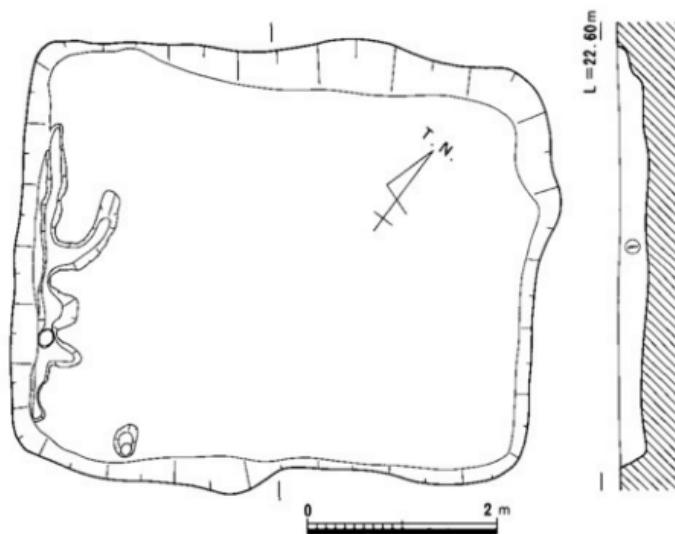
41～59は鉢である。

41・42は器高の浅い鉢である。底部は丸底で、体部はやや内彎気味に外上方に延びる。体部内面には刷毛目が施されている。43は41を深くした形態である。44～50は底部がやや尖底気味で、体部はやや内彎気味に外上方に延びる小型の鉢である。底部外面はヘラ削りが施されているもの(49)もみられる。体部外面には叩き目あるいは刷毛目が施され、内面には刷毛目が施されている。51・52は前述した小型の鉢の底部が丸底気味の平底を呈するものである。53・54は底部に小さい平底を残す、大型の鉢である。体部外面には叩きの後刷毛目が、内面には刷毛目が施されている。55・56の鉢はしっかりした平底を残し、体部は直線的に外上方に延びるものである。57は甕の底部かもしれない。58は大きめの鉢である。底部には平底を残し、底部と体部の境には明瞭な稜を持たない。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁部は内方に緩やかに屈曲する。体部外面には刷毛目が、内面見込み部には指ナデが施されている。59は鉢の底部である。突出した底部を持ち、体部は外上方に直線的に延びる。体部外面には叩きが、内面には刷毛目が施されている。

60はミニチュアの鉢である。

61は製塩土器の脚である。脚部外面は叩きの後指頭痕が施されている。

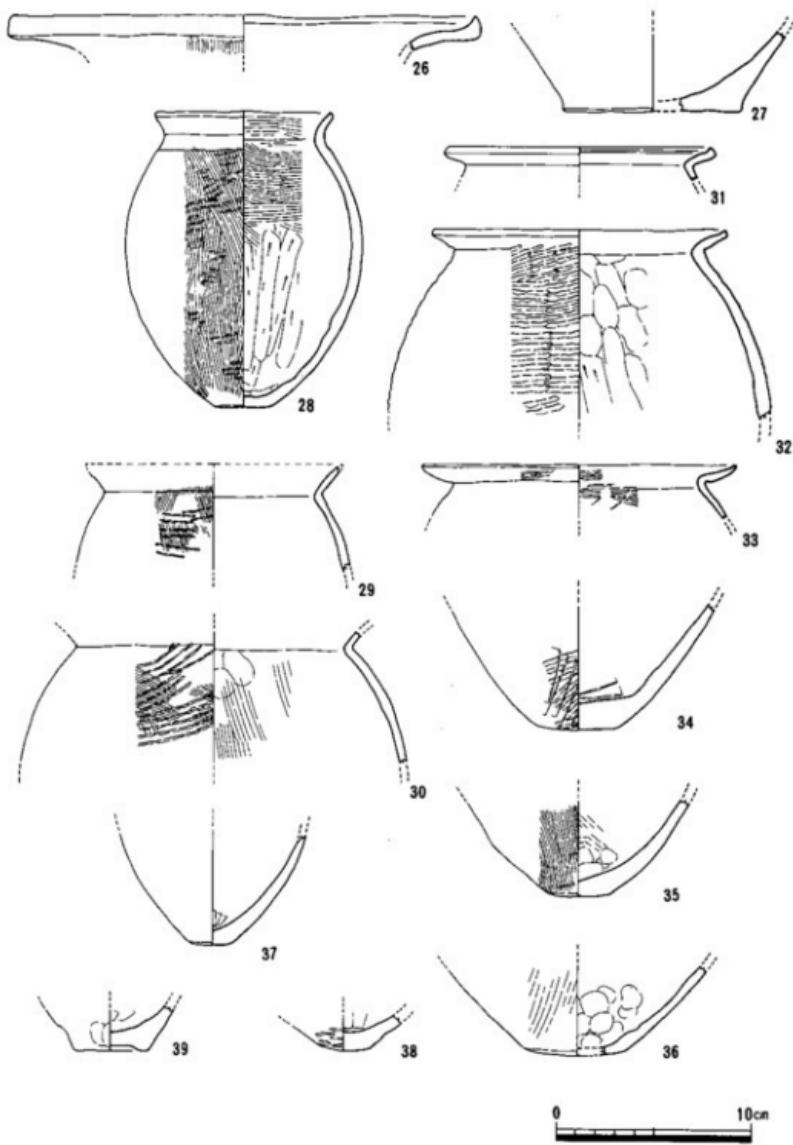
62は円筒形の支脚である。脚部は下方にやや開き、上面は平らにする。体部外面には指頭痕の



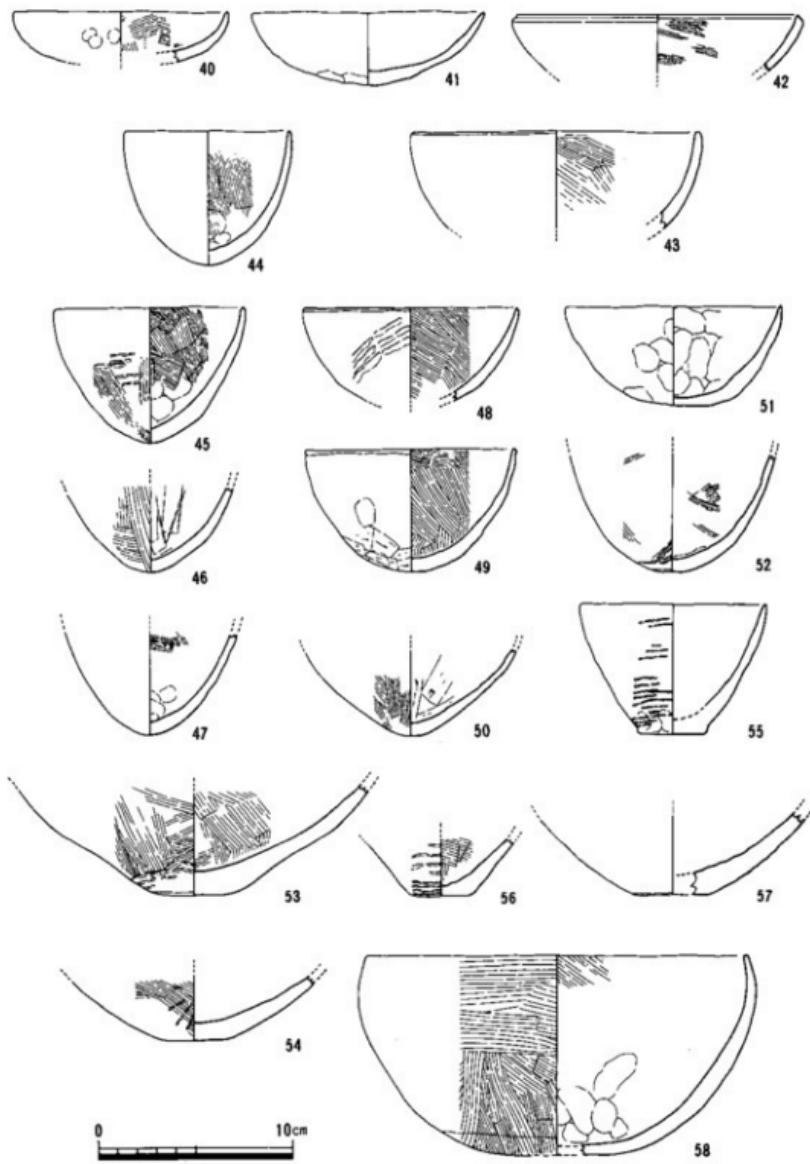
①暗黒褐色粘質土（5～10cm大の河原石を多量に含む）

第15図 SH02平・断面図

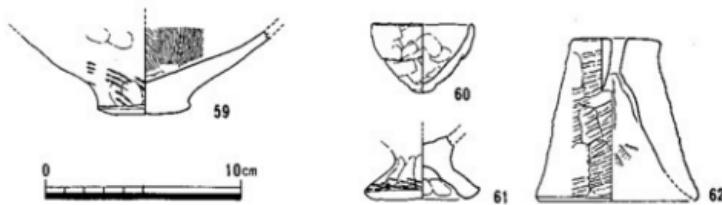
後叩きが施されている。上面中央には穿孔がみられる。



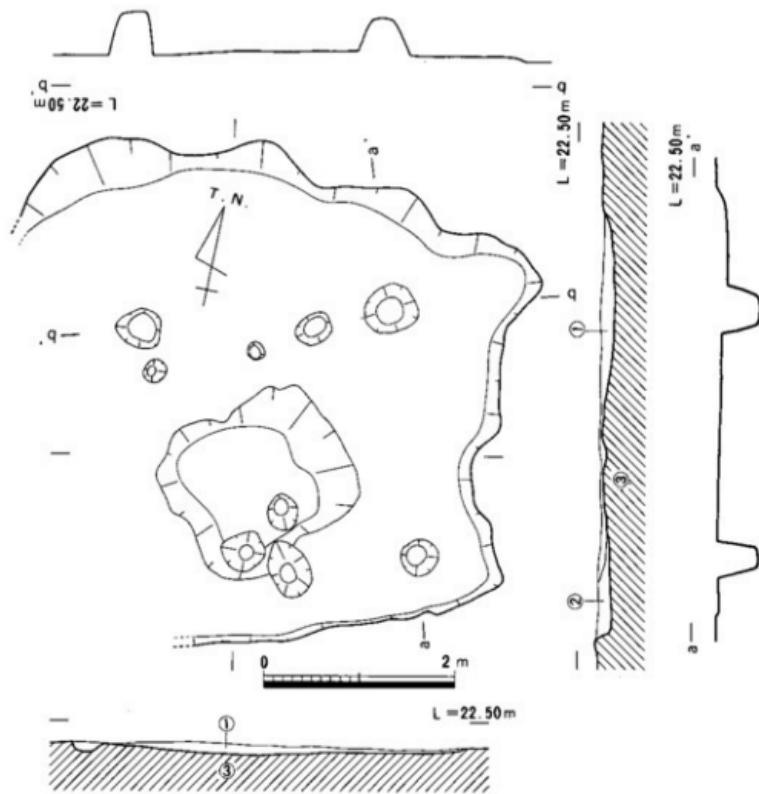
第16図 SH02出土遺物実測図①



第17図 SH02出土遺物実測図②



第18図 SH02出土遺物実測図③

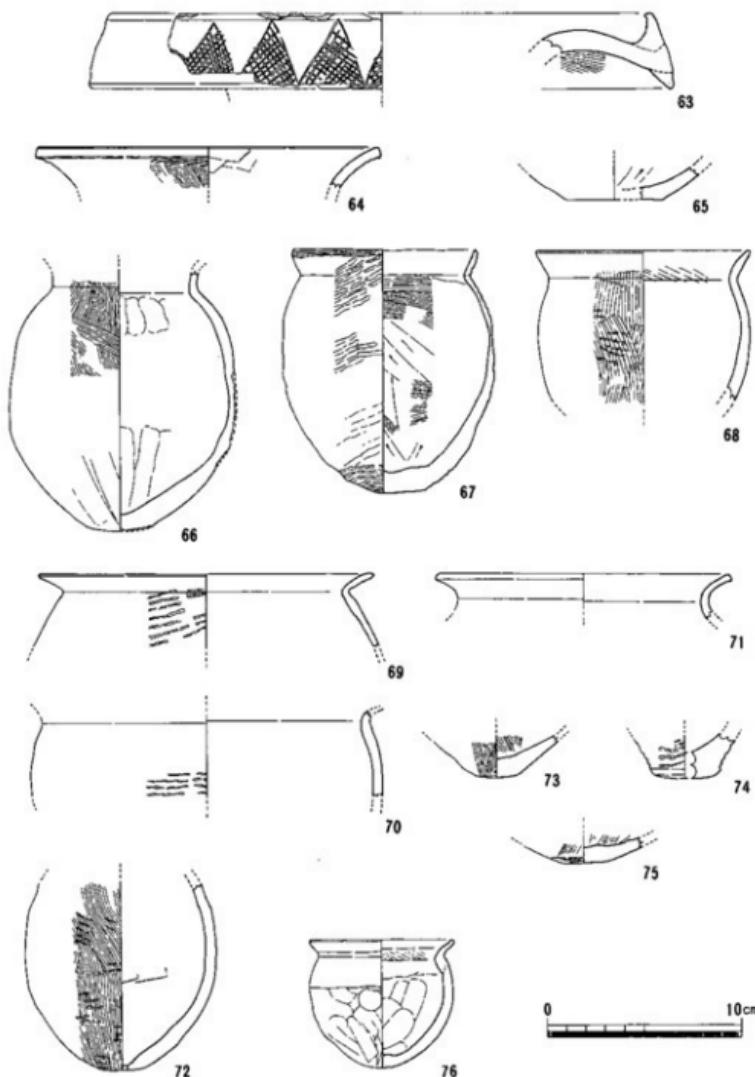


- ①黒灰色粘質土（砂粒を含む。1～5 cm程度の風化礫がかなり混入している。）
- ②灰色砂礫
- ③赤褐色砂礫（鉄分を多く含み赤い。）（地山）

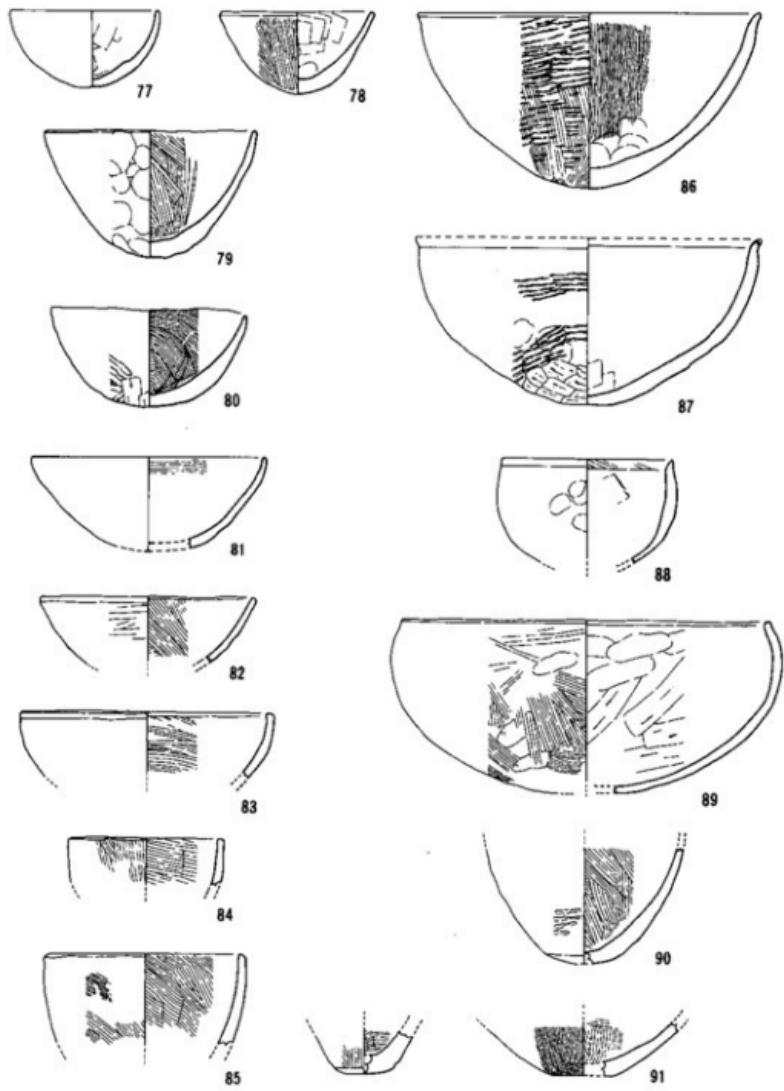
第19図 SH03平・断面図

SH03 (第19~22図、図版 5-② 7-①・②)

SH03は調査区東部で検出された。南西部が検出されていないが平面形はほぼ隅丸方形状を呈しており、東西約(4.14m)、南北約5.12m、残存深約0.12mを計る。この堅穴住居跡の主軸は



第20図 SH03出土遺物実測図①



第21図 SH03出土遺物実測図②

真北より11°西偏している。床面には主柱穴が検出されている(第19図)。

遺物は弥生土器が多量に出土している(第20・21・22図)。

63～65は壺である。63は頸部が朝顔状に開き、口縁端部を上下に拡張する。拡張部外面には斜格子のヘラ描沈線が施された鋸歯文が観られる。64は口縁部が朝顔状に開く。頸部外面には縱方向の刷毛目が施されている。

66～76は壺である。66はここでは壺としたが壺の可能性も考えられる。底部にわずかに平底を残し、頸部はやや立ち上がり外方に緩やかに屈曲する。体部外面上半には刷毛目が、内面は指などが施されている。67は「く」の字に屈曲する頸部から口縁部が真直ぐに外上方に延びるもので、底部は丸底気味の平底を残す。体部外面には叩きが、内面にはヘラ削りの後刷毛目が施されている。76は小型の壺である。

SH03の壺をみると底部にわずかに平底を残すもの(66・72～75)と丸底気味の平底を持つもの(65)の2形態に分かれる。体部最大径はほぼ体部中位にある。調整は体部外面が叩きの後刷毛目を、内面はヘラ削りの後刷毛目が施されているものが多い。これらの特徴からSH02とは若干時期差が考えられる。

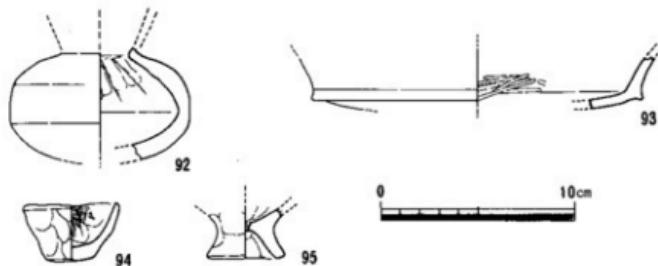
77～92は鉢である。体部の形態で7つに分けられる。口径が約7.5cmのもの(77・78・84)と、約11cmのもの(79～84・88)、約18cmのもの(86・87・89)の3種類に分けられ、また口縁形態で体部が直線的に延びるもの(77～82)、内脣するもの(83～85・89)、内脣しながら延び外方に短く屈曲するもの(86～88)の3種類に分かれる。底部はほとんどが丸底であるが平底もみられる。

93は長頸壺の体部である。胎土に角閃石も金雲母も含まない。

94は高杯の杯部である。

95はミニチュアの鉢である。体部内面には刷毛目が施されている。

96は製塩土器の脚部である。体部内外面に指頭痕が施されている。

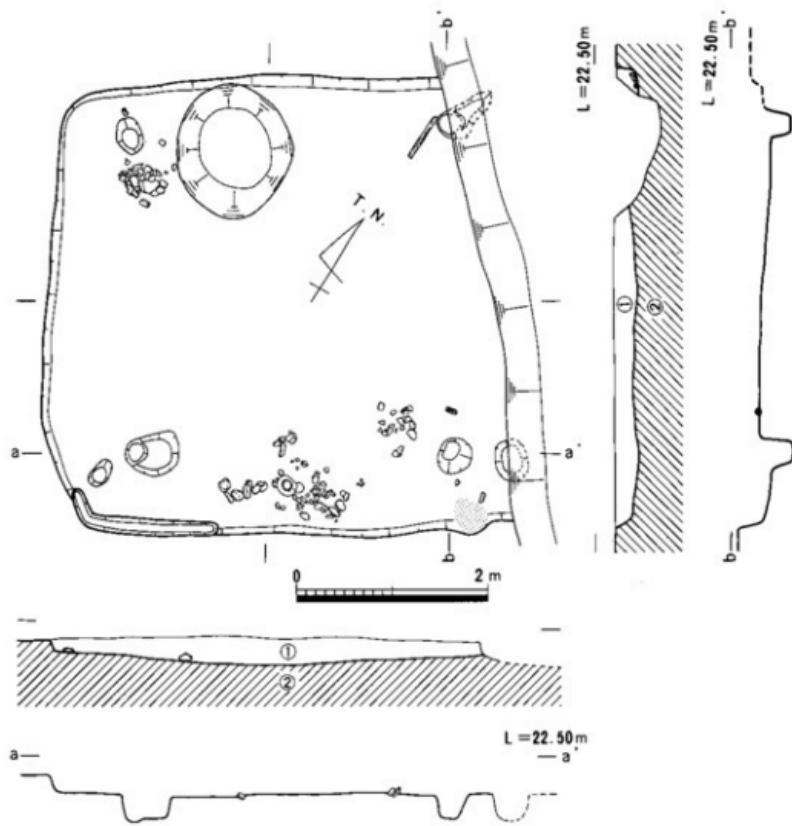


第22図 SH03出土遺物実測図③

SH04 (第23~25図、図版 8 -①・② 9 -①・② 10-①・②)

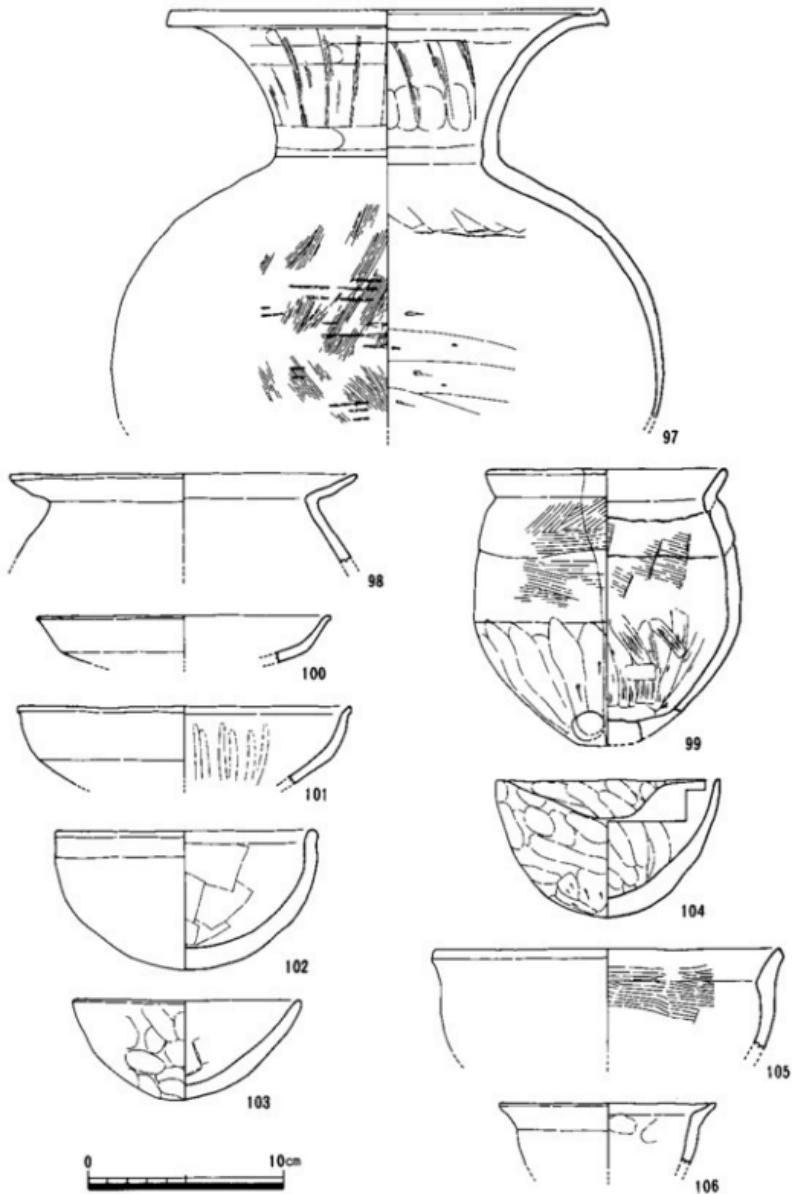
SH04は調査区東部で検出された。東辺が検出されていないが平面形はほぼ隅丸方形を呈しており、東西約(4.50m)、南北約4.80m、残存深約0.2mを計る。この竪穴住居跡の主軸は真北より32°西偏している。床面には主柱穴が4個検出されており、南壁沿いには壁溝も一部検出されている。また、多量の土器が南壁際と北西隅でかたまって出土している。前者は壺・甕・鉢などで後者は甕一個体分であった。焼土は南東隅で一部検出されている(第23図)。

遺物は弥生土器が多量に出土している(第24・25図)。

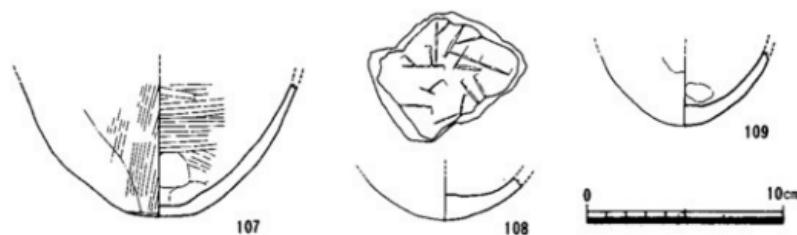


①灰黒色粘質土 (2~10cm程度の礫を多量に含む) ②茶色砂質土

第23図 SH04平・断面図



第24図 SH04出土遺物実測図①



第25図 SH04出土遺物実測図②

97は壺である。頸部が朝顔状に開き、口縁端部を小さく上下に摘み出す。体部最大径はほぼ体部中位にある。体部外面には叩きの後それをなで消し、刷毛目を施している。また、内面は横方向のヘラ削りが施されている。頸部外面には板なで状に細かい刷毛目が施されている。

98・99は壺である。99は底部に小さい平底を残し、頸部は「く」の字に外方に屈曲するものである。体部外面下半には縦方向のヘラ削りが、上半には刷毛目が施され、内面は下半が縦方向のヘラ削り、上半には刷毛目が施されている。やや粗雑に作られており体部上半には粘土紐の接合痕が認められる。また、底部際には穿孔が認められる。

100～106は鉢である。器高がやや浅く口縁部端部が外方に小さく屈曲するもの(100・101)や器高がやや深く口縁部端部が外方に小さく屈曲するもの(102)としないもの(103)がある。また、内彎する体部から口縁部が「く」の字に外方に屈曲するもの(105・106)もみられる。101は体部内面に縦方向のヘラ磨きが施されている。104は底部は丸底で、体部は内彎しながら外上方に延びる鉢である。底部はヘラ削りされ、体部は指ナデが顕著に施されている。

107～109は底部である。107は体部外面に刷毛目が施されている。108は底部内面に螺旋状の板なでが施されている。

SH04出土の底部をみると丸底気味の平底を残すものが少量で、ほとんどが丸底になる。

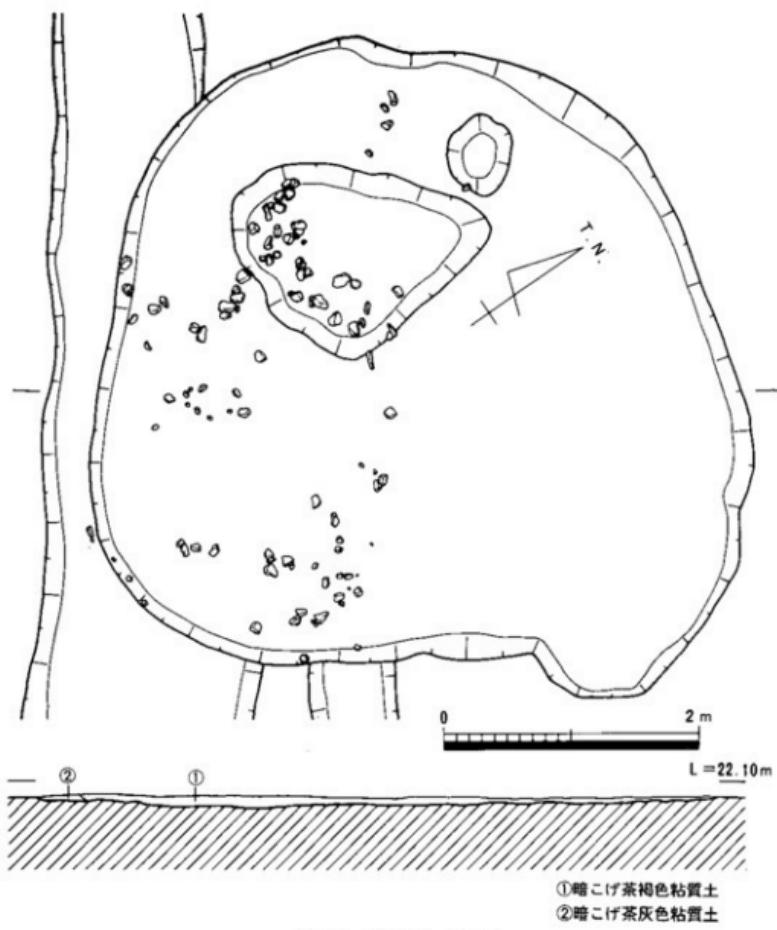
SK01 (第26・27図、図版1-②)

SK01は調査区東部で検出された。弥生時代後期の環濠かと思われる溝を切っている。規模は長幅5.72m、短幅5.12mを計り、平面形態はほぼ円形を呈している。かなり削平を受けており、検出面より0.09mしか検出されなかった(第26図)。

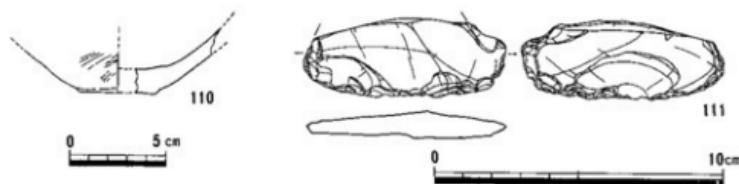
土坑内より少量の土器と5cm程度の小砾が出土している(第27図)。

110は弥生土器の底部である。底部は平底を呈しており、体部外面には微かに刷毛目が確認される。

111はスクレイバーか。刃部及び側辺に細かい調整が施されている。石材はサスカイト(白色風化サスカイト)である。



第26図 SK01平・断面図



第27図 SK01出土遺物実測図

SK02 (第28・29図、図版11-1)

SK02は調査区東部、堅穴住居跡が密集する南部で検出された。北半分は削られており平面形態は不明である。規模は長幅約(1.08m) 短幅約1.16mを計るものである(第28図)。

遺物は弥生土器が多量に出土している。(第29図)

112~116は底部である。115は底部に穿孔がみられることから、瓶と思われる。

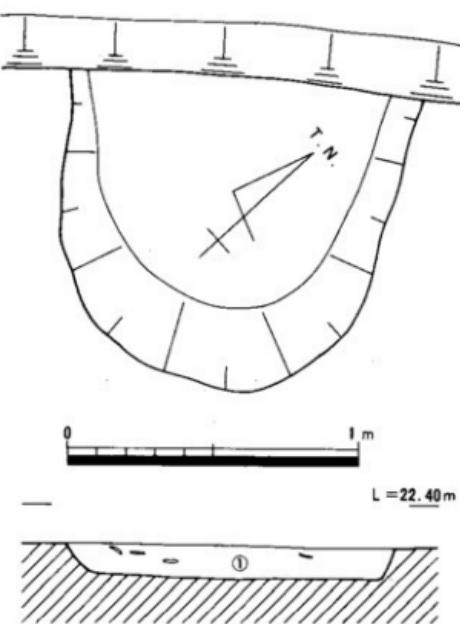
117~119は鉢である。小型のものと大型のものがある。117は体部がほぼ直線的に外上方に延び、口縁部が外方に緩やかに屈曲する。118は小型の鉢で内凹する体部から口縁端部を短く外方に屈曲させる。119は118と同形態で大型のものである。体部外面に叩きが認められる。

120・121は甕である。120は頭部が「く」の字に外反し、直線的に外方に延びる。体部外面には叩きが、内面には横方向の刷毛目が施されている。121は小型の甕であろうか。底部はしっかりととした平底を持つ。

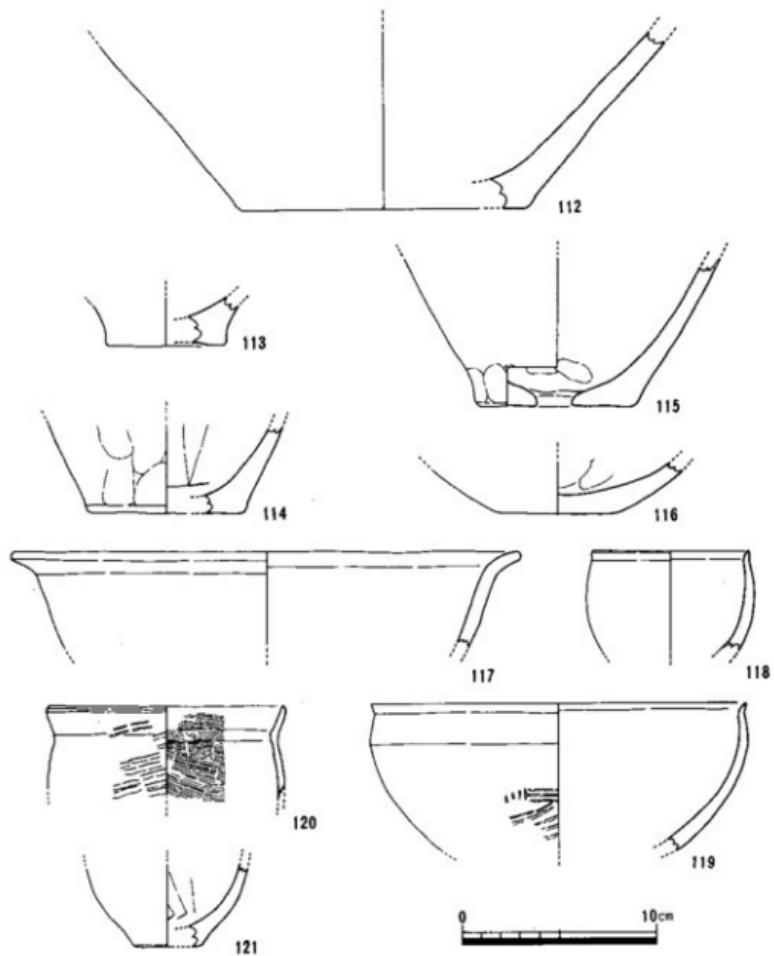
SK03 (第30・31図)

SK03は調査区西部で検出された。平面形態は隅丸の長方形を呈しており、長幅約1.55m、短幅約0.56m、深さ0.17mを計る(第30図)。

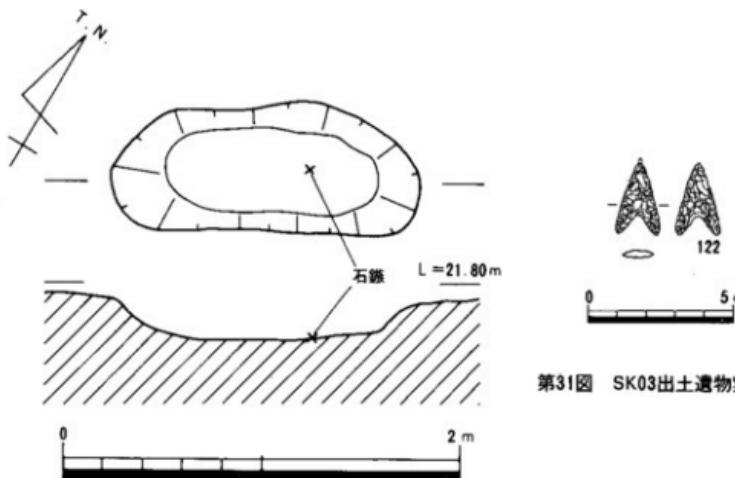
この土坑内よりサヌカイト製の石鏃が一点出土している(第31図)。基部の抉りが深いもので側辺は真直ぐに作られている。



第28図 SK02平・断面図



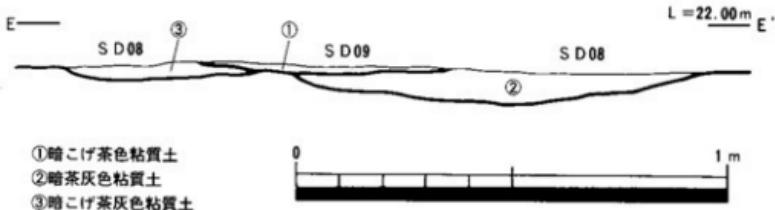
第29図 SK02出土遺物実測図



第30図 SK03平・断面図

SD08・09（第32図、図版11-②）

SD08・09は調査区東部で検出された溝である。規模はSD08が天幅約0.98m、深さ約0.06mを計り、SD09が天幅約0.93m、深さ約0.07mを計る。溝より出土した遺物は少量であったが、溝内に堆積した埋土等が同じことから弥生時代の溝と考えられる。この溝はちょうど弥生時代の堅穴住居跡の東側を西に弯曲するように流路を取るものである。堅穴住居跡群を画する溝で、環濠の可能性も考えられる。



第32図 SD08・09土層断面図

SD12 (第33・34図、図版12-①・② 13-①・②)

SD12は調査区西部で検出された南東から北西に流路を取る溝である。規模は天幅0.81m、深さ0.53mを計る。この溝は堅穴住居跡群の西を区画する溝と思われ、天幅の割にやや深く、しっかりしている(第33図)。

遺物は弥生土器が出土している(第34図)。

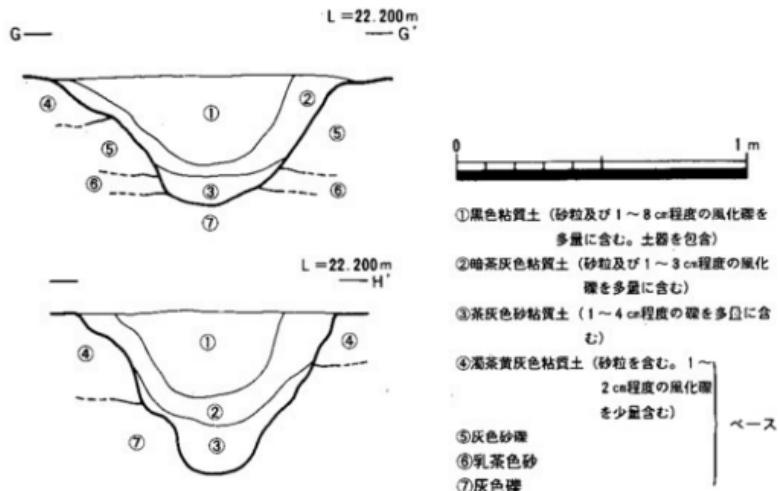
123は長頸壺である。頸部がやや外傾するがほぼ直ぐに延び、口縁部は外方に緩やかに広がる。頸部外面には縦方向の刷毛目が、内面には指なでが施されている。

124~128は甕である。体部は球形のもの(125)もみられる。頸部は「く」の字に外方に屈曲する。底部は平底を残すもの(127・128)と丸底を呈するもの(125)がみられる。126の体部外面には縦方向の細かい刷毛目が施されている。頸部内面はシャープな稜を持っている。

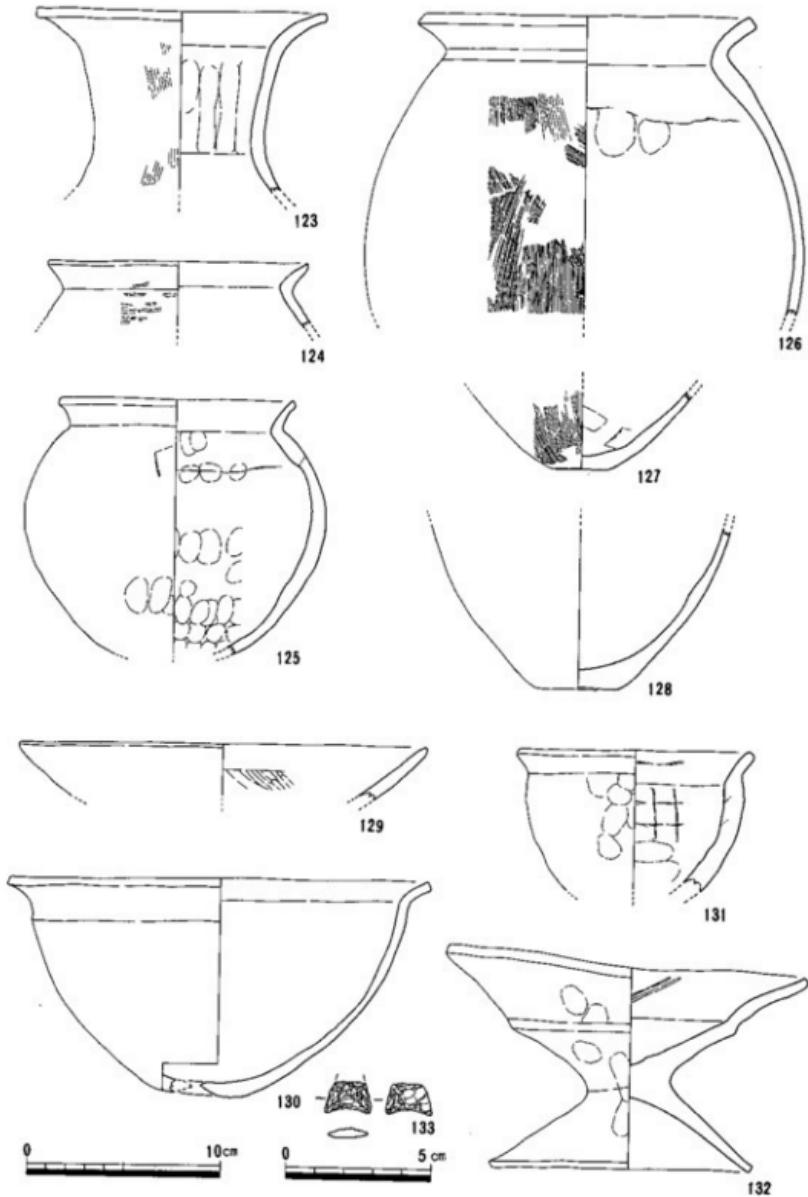
129~131は鉢である。口径が大きく、体部が直線的に外上方に延びるもの(129)と体部が内凹し、頸部が「く」の字に外方に屈曲するもの(130)がある。130は底部に平底を持ち、焼成後の穿孔が認められる。また、口径が小さく、体部が内凹し、頸部が「く」の字に外反するもの(131)もみられる。

132は高杯である。脚部は短く「ハ」の字に開き、杯部はほぼ中央に稜を持ち、外上方に延びる。杯部内面にはわずかにヘラ磨きが認められる。

133はサヌカイト製の石鎌である。



第33図 SD12土層断面図

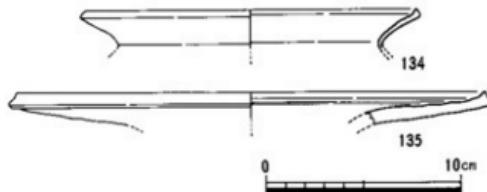


第34図 SD12出土遺物実測図

SD15（第35図）

SD15はSD17から派生する細い溝である（付図2）。規模は天幅約0.85m、深さ約0.18mを計る。この溝より少量ではあるが遺物が出土している（第35図）。

134は甕である。頸部が「く」の字に屈曲し、口縁端部を上方に小さく摘み上げる。135は壺である。頸部は朝顔状に開くもので口縁部をほぼ水平にし、口縁端部を小さく摘み上げている。



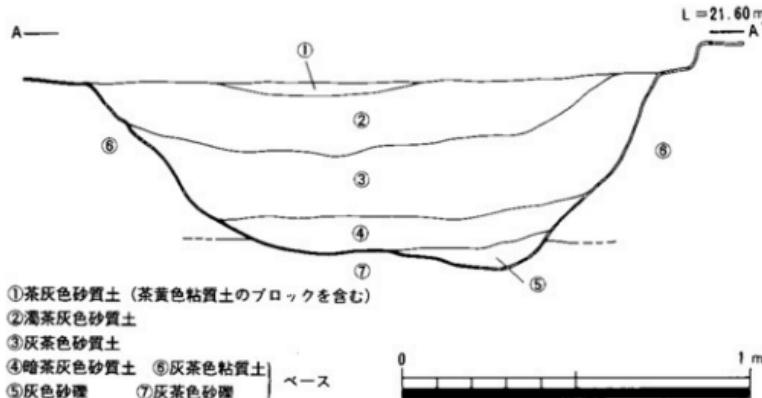
第35図 SD15出土遺物実測図

5. 古代～中世

古代から中世の遺構としては主として溝が検出されている。これらの溝は現在の丸亀平野の地割りに合致する。出土遺物から古代の条里制に伴う溝を踏襲するものや新たに作られたものがあることが確認された。これら溝以外の遺構は希薄で掘立柱建物跡が2棟検出されているだけである。古代より当調査区が水田として使われていたことが判る。

SD01（第36～39図、図版14-①）

SD01は調査区東部で検出された溝である（第36図）。ほぼ東西に流路をとるものでSD02・03



第36図 SD01土層断面図

・04・05と切り合ひが認められる。規模は天幅約1.98m、深さ約0.46mを計り、溝の断面形状は半円形を呈している。

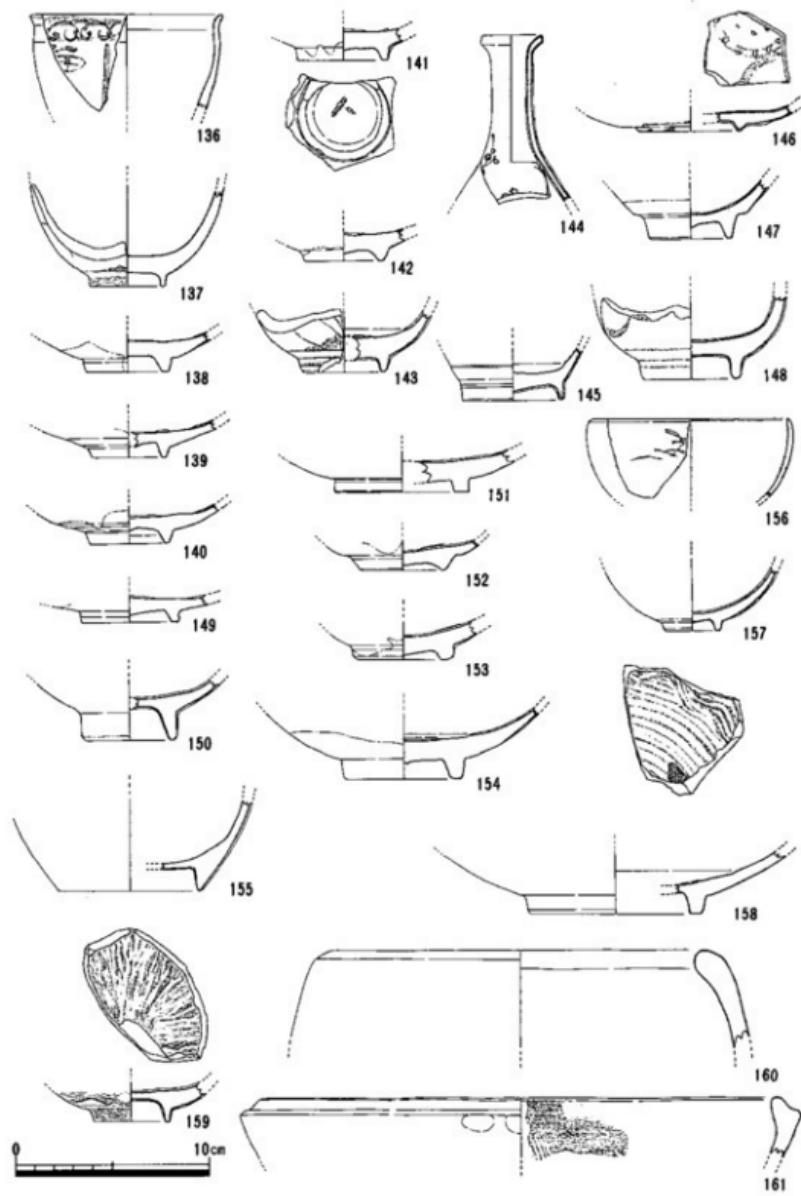
SD01からは多数の遺物が出土している(第37・38・39図)。

136～138は肥前系の磁器である。136は碗と思われ、口縁部が外反し、体部外面に縱方向の沈線が施されている。釉は青味を帯びた透明釉が全面に施され、呉須は藍色を呈している。137は体部が内彎しながら延びるいわゆる「くらわんか手」と呼ばれる碗である。高台及び高台脇に圓線が一本ずつはしる。体部外面には梅樹文が描かれている。釉は高台疊付け以外に青味を帯びた透明釉が施される。呉須の発色は悪い。高台疊付け部には砂粒が付着している。18世紀頃。138は皿と思われる。釉は内面および体部下半までかけられており、内面見込み部は輪状に釉が掻き取られている。17世紀後半から18世紀前半頃。139・140は唐津系青綠釉皿である。内面見込み部は蛇の目釉刺ぎされており、その部分に砂粒が付着している。貫入が著しい。17世紀後半から18世紀前半頃。141～146は肥前系の磁器である。141は碗で、緑味を帯びた釉が内面および体部下半までかけられている。内面見込み部は蛇の目釉刺ぎされている。高台内面に判読不明の墨書がみられる。142は灰色を帯びた透明釉が内面および体部下半までかけられている。内面見込み部は蛇の目釉刺ぎされている。143は青味を帯びた透明釉が高台疊付け以外全面にかけられている。高台外面に二重の圓線が描かれている。内面見込み部は蛇の目釉刺ぎされている。144・145は伊万里染付瓶である。釉は144が全面に、145が内面と高台疊付け以外に施されている。呉須の発色は悪く、薄い茶黒色を呈する。高台外面には赤色の圓線が認められる。146は皿である。釉は青味を帯びた透明釉が全面にかけられている。呉須の発色は悪い。高台疊付け部に砂粒の痕跡が認められる。

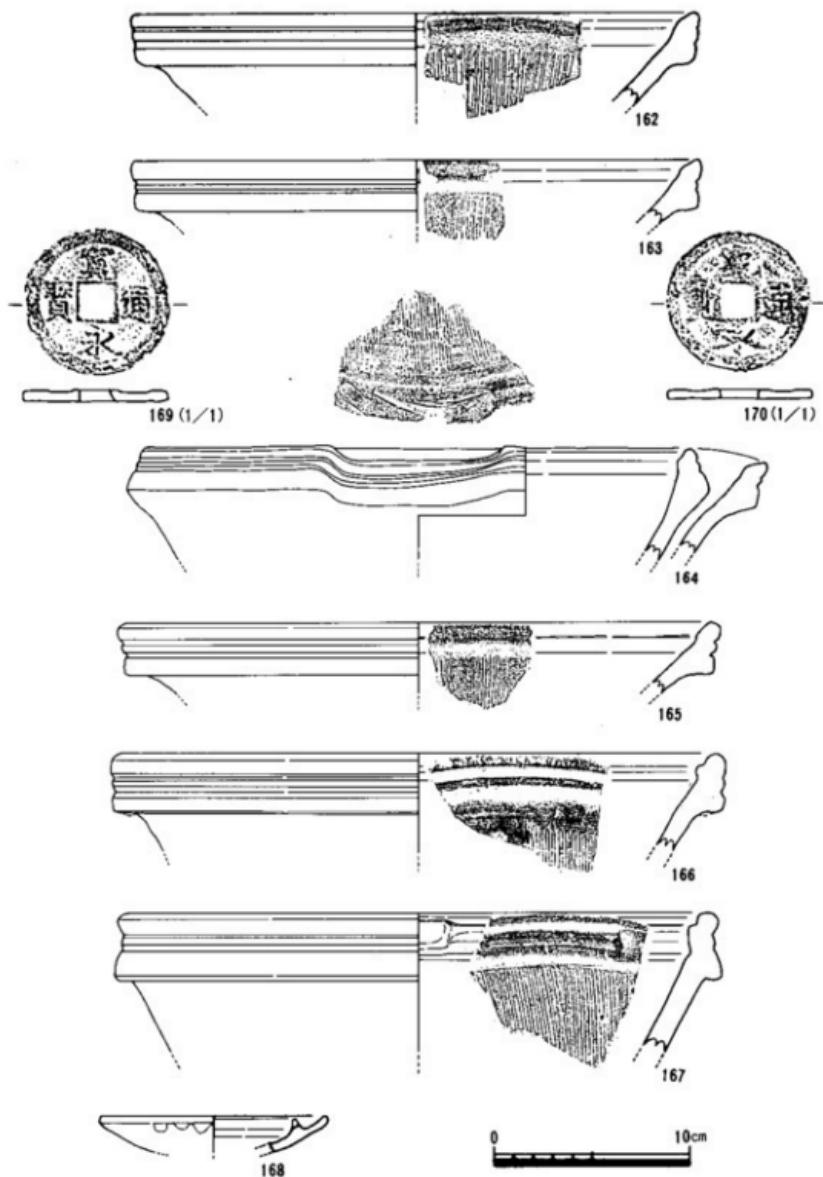
147は天目碗である。体部外面と内面に茶黒色を呈した鉄釉がかけられている。高台脇が削り込まれている。

148は肥前系の陶胎染付である。高台疊付け部以外に緑味を帯びた透明釉が施され、全面に貫入が著しい。呉須の発色は悪く、淡青色を呈している。高台外面に2本、高台脇に圓線が描かれている。

149～159は陶器である。149は唐津系青綠釉皿である。内面に青色を呈した釉がかけられており、見込み部は蛇の目釉刺ぎされている。150は唐津系京焼風陶器の碗である。茶色味を帯びた透明釉が高台疊付け部以外にかけられており、全面に貫入が著しい。17世紀後半から18世紀前半頃。151は皿である。胎土目積の痕跡が認められる。152・153は溝縁皿である。砂目積の痕跡が認められる。154は大型の青綠釉皿である。体部内外面に緑味を帯びた透明釉がかけられ、内面見込み部は蛇の目釉刺ぎされている。155は瓶の底部である。外面に刷毛目文様の灰白色釉がかけられている。156・157は京焼風陶器碗(灰釉鉄絵染付)である。やや薄手のもので、高台以外全面に灰釉がかけられている。全面に貫入が著しい。呉須は黒茶色を呈している。18世紀頃。158は



第37図 SD01出土遺物実測図①



第38図 SD01出土遺物実測図②

唐津系刷毛目皿である。釉は白濁色を呈している。159は唐津系の刷毛目碗である。高台盤付け以外に緑茶色釉と乳白色釉がかけられている。18世紀前半から中葉頃。

160・161は土師質土器である。

160は鍋である。口縁部が内彎し、端部は丸くおさめている。

161は擂鉢である。口縁端部は内方に摘み出し、丸くおさめる。内面に条溝がみられる。

162～168は備前焼である。

162～167は備前焼の擂鉢である。口縁部の形状でおおよそ4種類に分けられる。162～164は口縁端部上端を上方に摘み出したように尖らし、端部外面には沈線が2条施されている。次に165は口縁端部上端を四角く終わらせ、端部外面の沈線もややきつくなり、口縁端部下端もややシャープになる。166は口縁端部内面に突帯状のものが見え、外面の沈線も凹線状になる。167は口縁部がやや拡張される。すべて内面には金具の櫛による条溝が密に施されている。

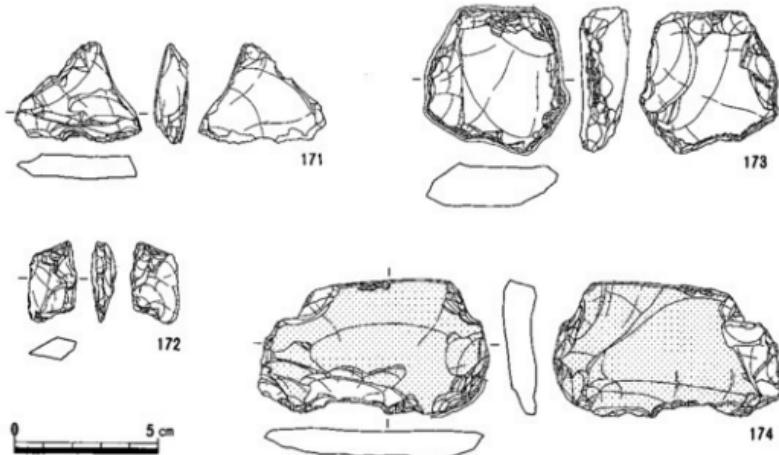
備前焼の擂鉢は以上の4種に分けられる。おそらく162～164→165→166→167の順に新しくなるものと思われる。

時期は18世紀後半から19世紀頃のものと思われる。

168は備前焼の灯明皿である。内面に突帶を持ち、灯芒受けの凹みが認められる。169・170は銅鏡である。両者とも「寛永通寶」である。

171～174は石製品である。

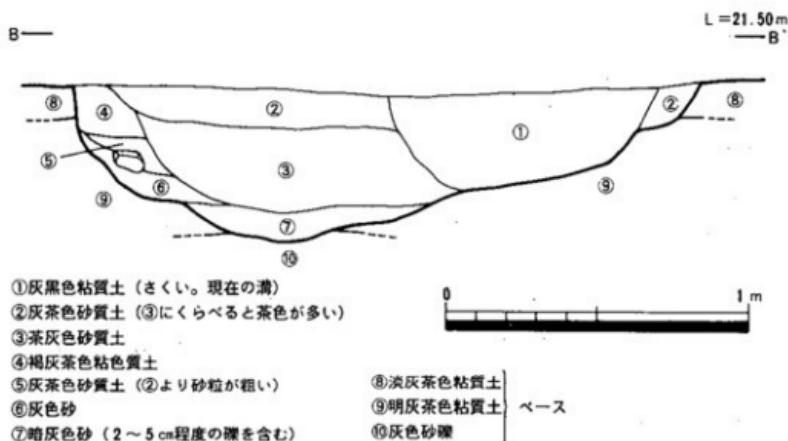
171～173はサヌカイト製の楔形石器である。174はサヌカイト製の打製石庖丁である。



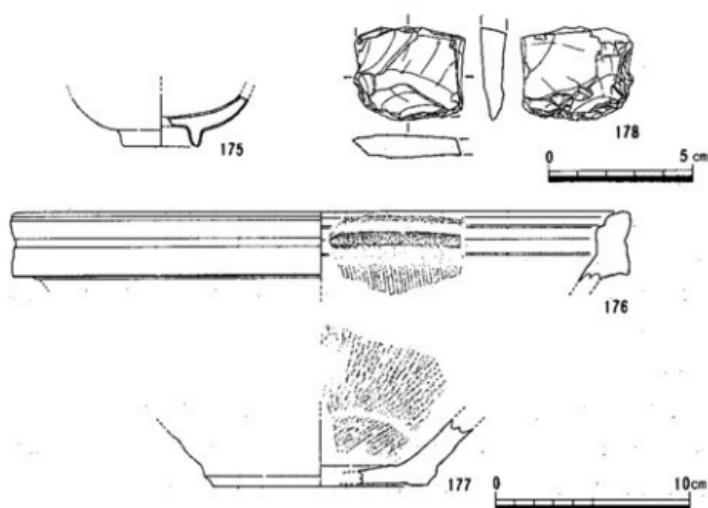
第39図 SD01出土遺物実測図③

SD02 (第40・41図、図版14-②)

SD02は調査区東部で検出された溝で、流路をほぼ南北にとる。SD01と切り合いが認められるがほぼ同時期に機能していたものと思われる。規模は天幅約2.07m、深さ約0.4mを計る(第40図)。



第40図 SD02土層断面図



第41図 SD02出土遺物実測図

SD02から多数の遺物が出土している(第41図)。

175は肥前系の陶胎染付である。端部が丸く短い高台が付き、体部は内彎しながら上方に延びる。高台疊付け以外に青味を帯びた白色釉が施されている。貫入が著しい。

176・177は備前焼の擂鉢である。口縁部はかなり肥厚しており、外面の凹線も退化している。口縁部外面下端はシャープに作られている。底部は低い高台状になっている。内面には金具の櫛による条溝が密に施されている。

178はサスカイト製のスクレイバーである。

このSD02の時期は19世紀頃と思われる。

SD04 (第43・46図)

SD04は調査区東部で検出された溝で、流路をほぼ南北にとる(第43図)。規模は天幅約0.99m、深さ約0.3mを計る。

この溝からは須恵器の杯が出土しただけでほとんど遺物が出土していない(第46図)。

179は須恵器の杯である。底部はヘラ切りされており、体部は直線的に外上方に延びるものである。焼成が悪い。

時期は平安時代頃と思われる。

SD05 (第44・46図)

SD05は調査区東部で検出された溝で、流路をほぼ南北にとる。SD04と並走するものである(第44図)。規模は天幅約1.57m、深さ約0.53mを計る。

この溝からは須恵器が出土している(第46図)。

180は須恵器の杯蓋である。天井部と体部の間はなだらかに丸くなっている。口縁端部内面にわずかな段を持っている。181～183は須恵器の杯である。体部が直線的に延びるもの(181)とやや内彎するもの(182)がある。183はやや深い杯であろうか。

時期は平安時代頃と思われる。

SD11 (第42・45・46図、図版15-①・② 16-①・②)

SD11は調査区東半で検出された溝で、流路をほぼ南北にとる。この溝は5～15cm程の礫を敷いた状態で検出された。礫の範囲は南には延びない様である(第42・45図)。規模は天幅約3.08m、深さ約0.24mを計る。

この溝より多数の遺物が出土している(第46図)。

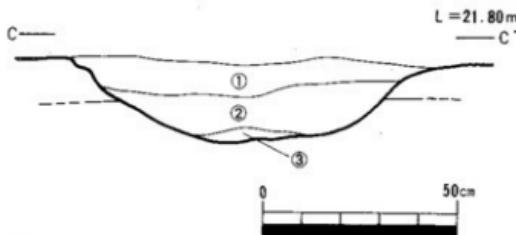
184は畿内産の瓦器碗である。かなり摩滅しており、調整は不明である。

185・186は須恵器の壺である。口縁部はやや外反しながら外上方に延び、口縁端部はやや下方に屈曲させる。底部は平底を呈し、体部はやや内彎しながら外上方に延びる。体部下端にはヘラ削りが施されている。

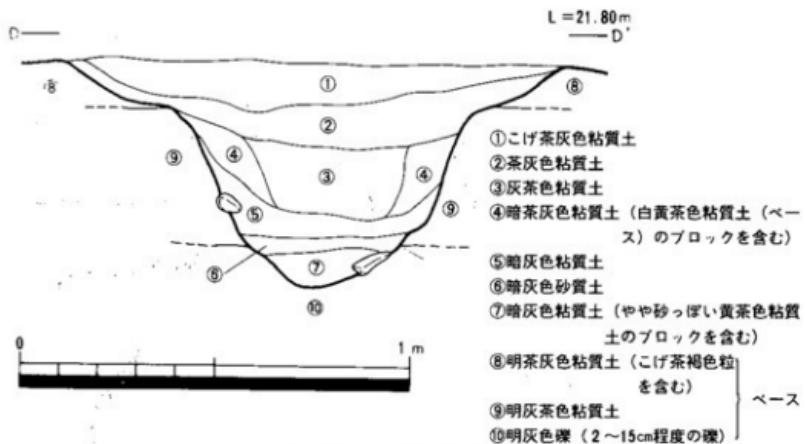
187～190は石器である。



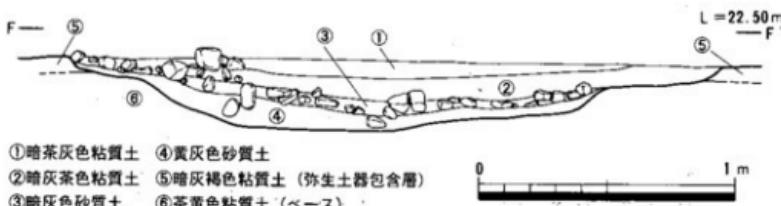
第42図 SD11平面図



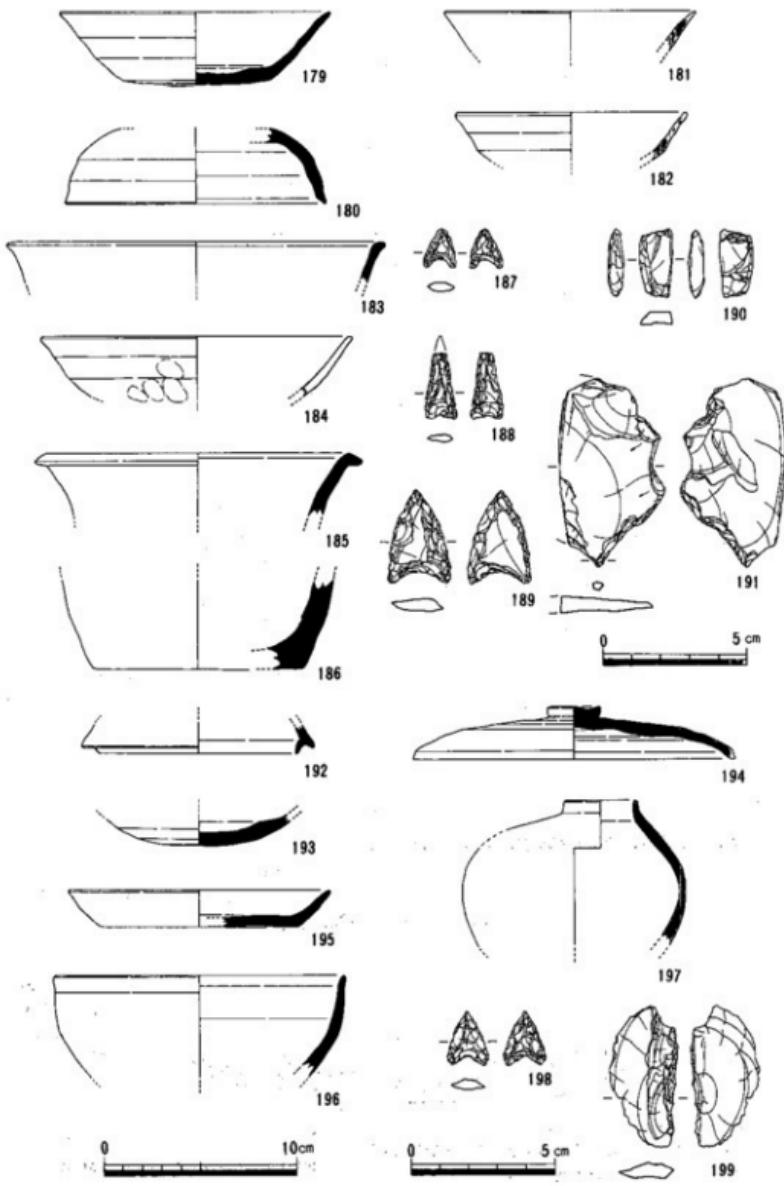
第43図 SD04土層断面図



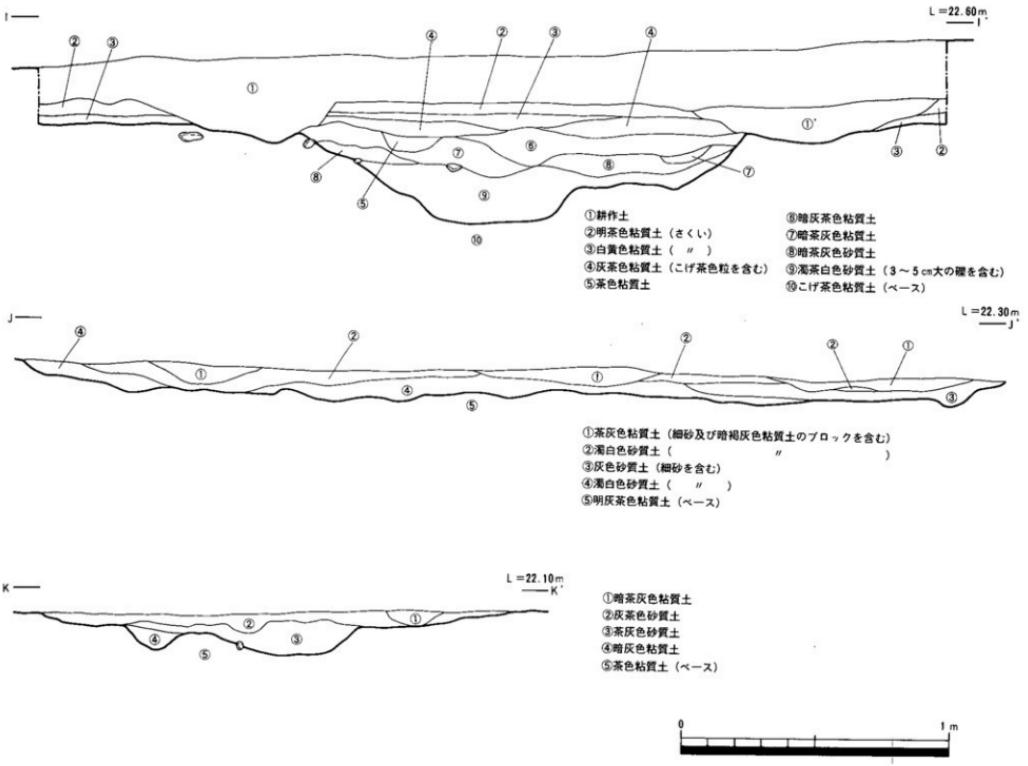
第44図 SD05土層断面図



第45図 SD11土層断面図



第46図 SD04・05・11・14出土遺物実測図



第47図 SD14土層断面図

187～189はサスカイト製の石鎌である。大型のものと小型のものがみられ、細く長いものも認められる。基部は凹基式のものである。

190はサスカイト製の楔状石器である。

191は切り出し状のスクレイバーであろうか。石材はサスカイトである。

SD14 (第46・47図、図版17-①・② 18-①・②)

SD14は調査区ほぼ中央部で検出された溝で、流路をほぼ南北にとる。この溝のほぼ中央部で西に溝が伸びている。SD14の北部でもSD11と同様に5～10cm程度の礫を敷いている(第47図)。規模は天幅約4.21m、深さ約0.24mを計る。

この溝より多数の遺物が出土している(第46図)。

192は須恵器の杯蓋である。口縁部内面に小さいかえりが付くものである。194は須恵器の蓋である。天井部にやや扁平のつまみが付き、口縁端部はやや下方に屈曲させるだけである。焼成はやや悪い。195は須恵器の皿である。底部はへら切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。196は須恵器の椀であろうか。内側する体部から口縁部は小さく外反させる。197は左右が対称に作られていない短頸壺である。

198・199は石器である。

198はサスカイト製の石鎌である。ハート型を呈している。

199は横長剣片である。石材はサスカイトである。

SD17 (第48図)

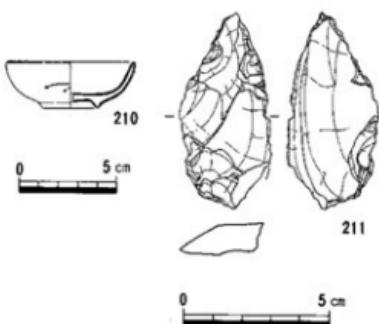
SD17は調査区ほぼ中央部で検出された溝である。南東から北西に流路を取る。規模は天幅5m、深さ0.3mを計るもので、天幅の割りには浅いものである。

時期は出土遺物より弥生時代から古墳時代(6世紀後半頃)まで機能していた溝と思われる。

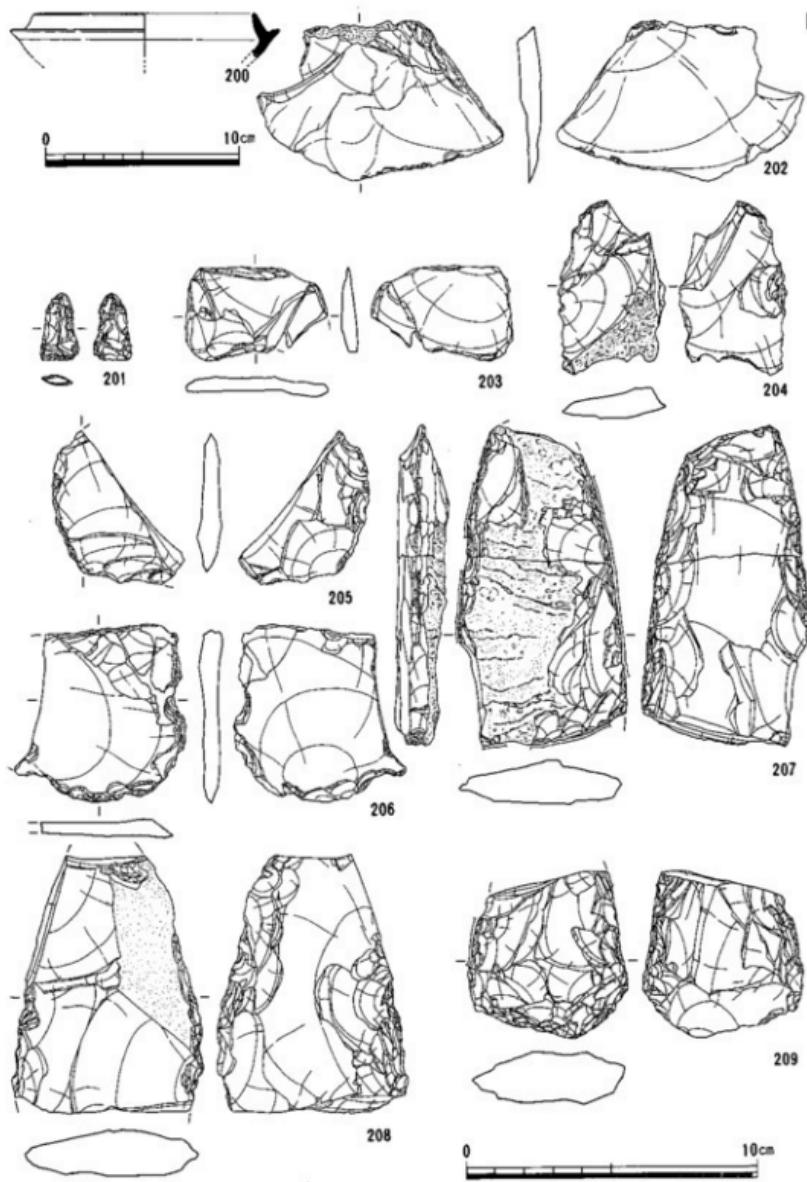
この溝より多数の遺物が出土している(第48図)。

200は須恵器の杯身である。受け部がしっかりとしており、立ち上がりもやや内傾しながら延びる。時期は6世紀の末頃である。

201はサスカイト製の石鎌である。202～204は細かい調整がみられる剣片である。スクレイバーか。205・206はサスカイト製の石庖丁である。206は側辺に抉りが認められる。207～209はサスカイト製の打製石斧である。207・208は刃部と基部を欠損している。209は基部を欠損し、刃部は細かい調整が施されており、側縁部にはつぶれ痕がみられる。



第49図 SD18出土遺物実測図



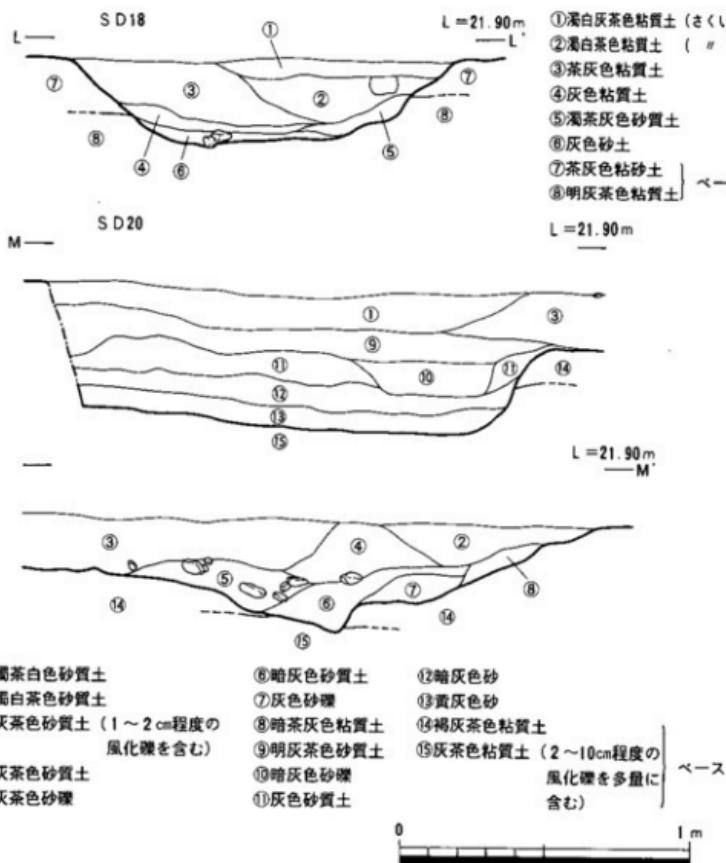
第48図 SD17出土遺物実測図

SD18 (第49・50図)

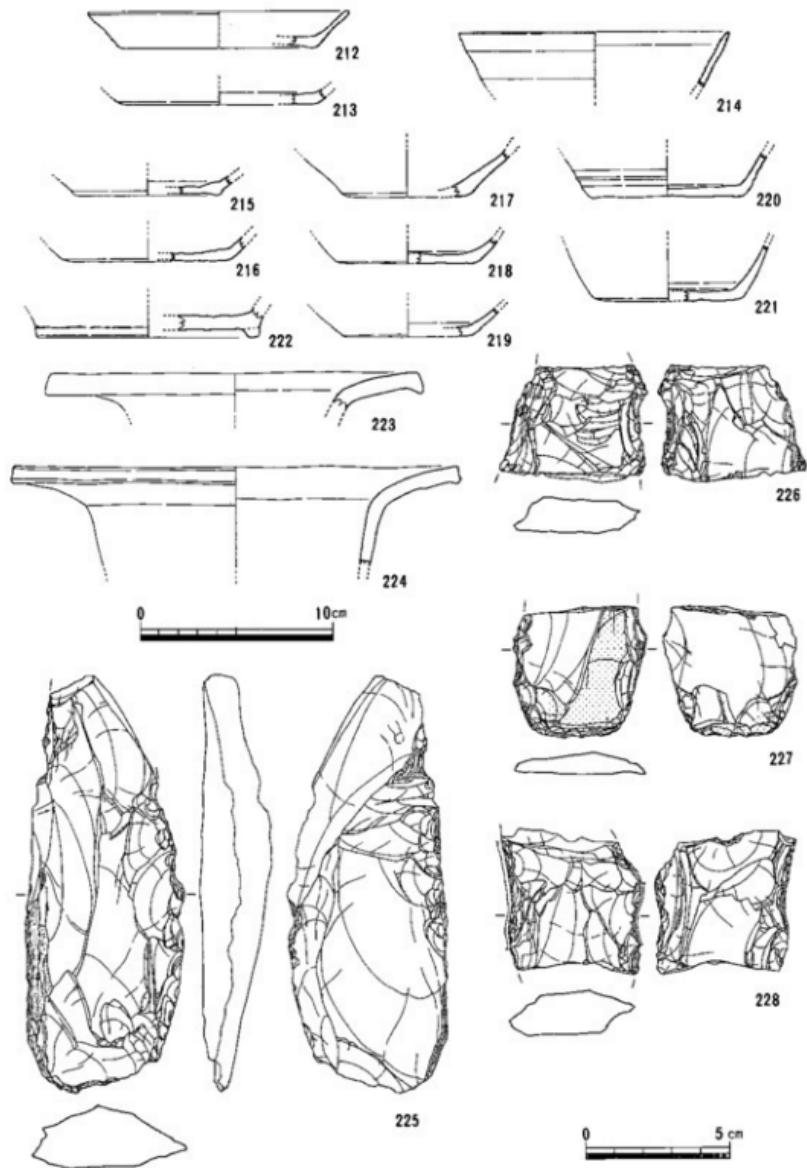
SD18は調査区ほぼ中央部で検出された溝である。SD19より派生する溝で、ほぼ並走する。規模は天幅約1.1m、深さ約0.31mを計る(第50図)。

210は肥前系の染付小坏である。釉は高台疊付け以外に、やや緑味を帯びた透明釉がかけられており、全面に貫入が著しい。異須は青色を呈している。

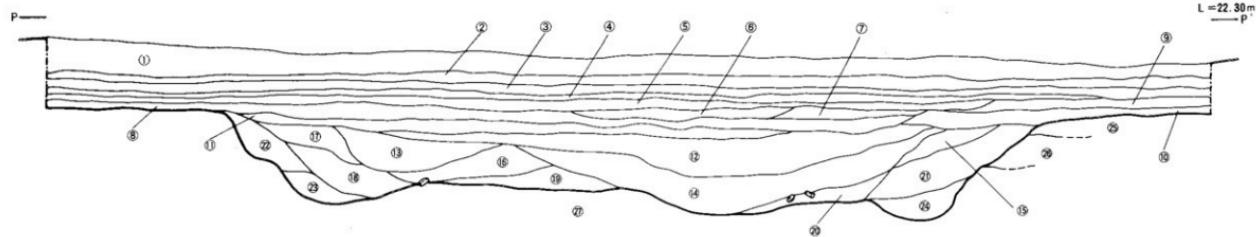
211はサヌカイト製のスクレイパーである。



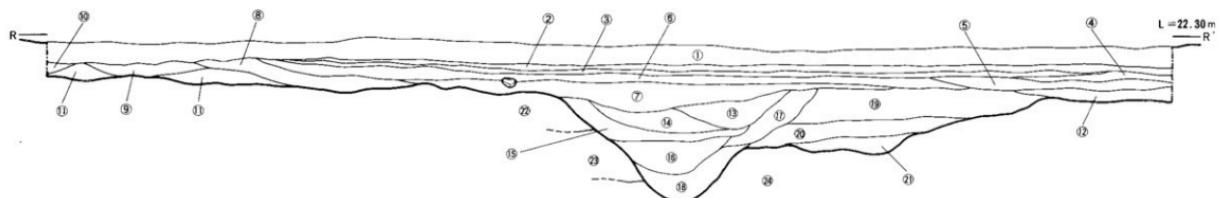
第50図 SD18・20土層断面図



第51図 SD27出土遺物実測図①

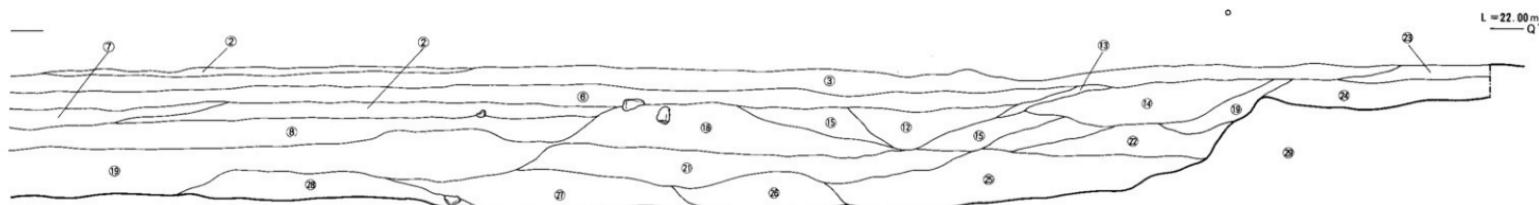
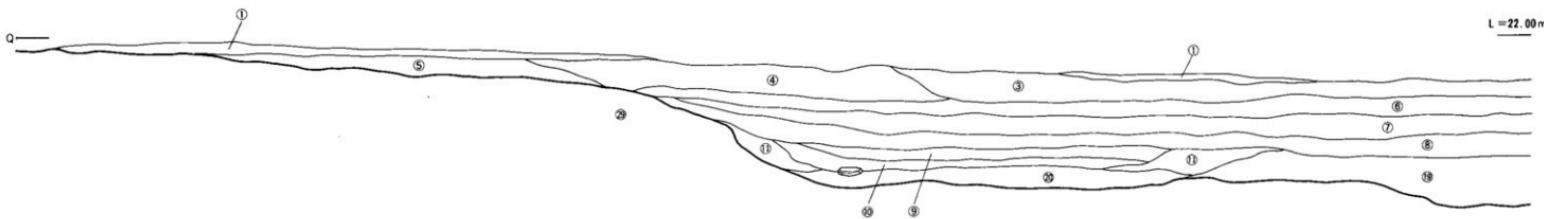


- | | |
|---------------|--------------------------|
| ①耕作土 | ⑩暗茶灰色粘質土 |
| ②濁茶白色粘質土（さくい） | ⑪黃色粘質土 |
| ③濁白茶色粘質土（〃） | ⑫茶灰色砂質土 |
| ④暗茶灰色粘質土 | ⑬明灰茶色粘質土 |
| ⑤淡灰茶色粘質土 | ⑭暗こげ茶色粘質土（こげ茶褐色粒を含む） |
| ⑥黃こげ茶色粘質土 | ⑮明灰こげ茶色粘質土（1cm前後の風化礫を含む） |
| ⑦濁灰茶色粘質土 | ⑯暗灰こげ茶褐色粘質土 |



- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| ①耕作土 | ⑨暗灰色砂礫（1cm以下の砂礫） |
| ②濁茶白色粘質土（さくい） | ⑩濁白色砂質土（3～5cm程度の礫を含む） |
| ③濁白茶色粘質土（〃） | ⑪暗灰色砂 |
| ④淡灰茶色粘質土 | ⑫暗茶色粘質土（微砂粒を含む） |
| ⑤茶灰色粘質土 | ⑬暗褐色砂質土（0.5～5cm程度の礫を含む） |
| ⑥暗灰こげ茶色粘質土 | ⑭灰褐色砂質土（0.5～5cm程度の礫を含む） |
| ⑦暗灰褐色粘質土（0.5～5cm程度の礫を含む） | ⑮灰茶色砂質土 |
| ⑧暗灰色砂礫（0.5～5cm程度の砂礫） | ⑯暗茶灰色砂質土（0.5～5cm程度の礫を含む） |

第52図 SD27土層断面図①



- | | | |
|-------------------------|--------------------------|----------------|
| ①茶黒色砂礫（2～3cm程度の礫） | ⑦暗褐色茶灰色粘質土 | ⑬明灰茶粘質土 |
| ②黄灰色粘質土 | ⑧茶褐色粘質土 | ⑭褐茶灰色粘質土 |
| ③灰黄色粘質土 | ⑨黄褐色粘質土（1～2cm程度の礫を多量に含む） | ⑮灰褐色粘砂土 |
| ④暗灰茶色砂礫（1～2cm程度の礫を少量含む） | ⑩灰褐色粘砂土 | ⑯灰褐色シルト |
| ⑤暗茶灰色粘質土（2～3cmの礫を含む） | ⑪黄褐色粘土 | ⑰褐白色シルト |
| ⑥茶黒色粘質土 | ⑫暗褐色茶灰色粘砂土 | ⑱灰色砂礫（1cm前後の礫） |
| ⑦茶灰色粘質土 | ⑬褐茶色粘質土 | ⑲明茶灰色粘質土（ベース） |
| ⑧暗茶灰色粘質土 | ⑭暗暗茶色砂礫（1～3cm程度の礫） | |
| ⑨茶黒色粘質土 | ⑮明褐色粘砂土 | |
| ⑩暗褐灰色粘質土（1cm前後の礫を少量含む） | ⑯褐茶色粘土 | |
| ⑪褐茶色粘質土 | | |



第533図 SD27土層断面図②

SD20 (第50図、図版18-②)

SD20は調査区ほぼ中央で検出された溝である。この溝の主流は現在の用水路として使われている。この溝よりSD18・19が派生している。規模は天幅約(6.75m), 深さ約0.38mを計る。

SD27 (第51~54図)

SD27は調査区西部で検出された溝で、流路をほぼ南北にとるものやや蛇行している。南端部ではおそらく東西の溝と合流する様で流路の天幅は広がっている(第52・53図)。規模は天幅約2.0m, 深さ約0.5mを計る。

この溝より多数の遺物が出土している(第51・54図)。

212・213は須恵器の皿である。底部はヘラ切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。

214~221は須恵器の杯である。底部はヘラ切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。

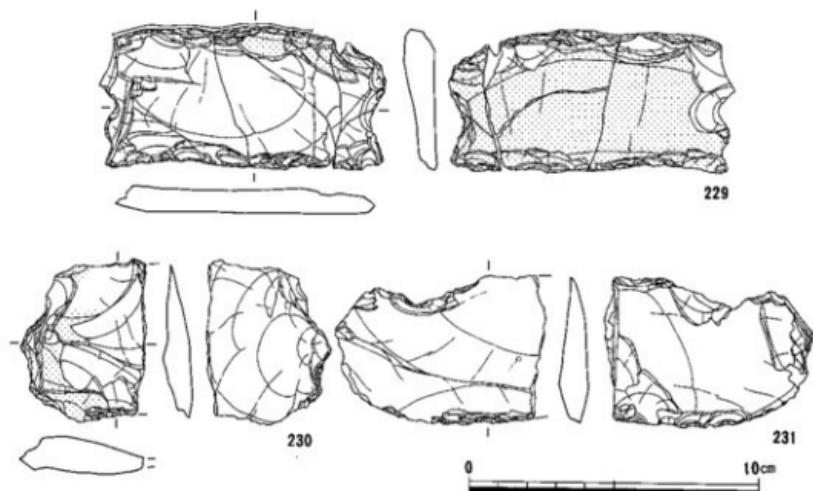
222は底部に高台の付く須恵器の杯である。高台は底部と体部の境に付く。

223・224は弥生土器の壺である。頸部は朝顔形に開くが、途中で「く」の字に屈曲する。

225~228は石器である。

225~227はサヌカイト製の打製石斧である。

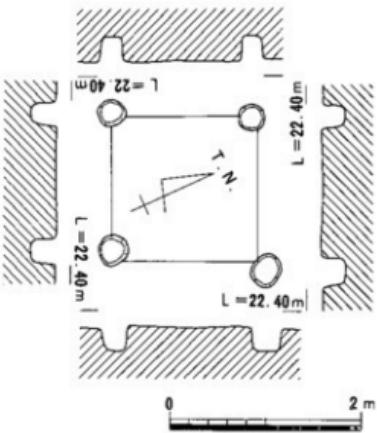
228~231はサヌカイト製の石庖丁である。229は側刃に抉りが認められ、刃部及び背面には細かい調整が施されている。



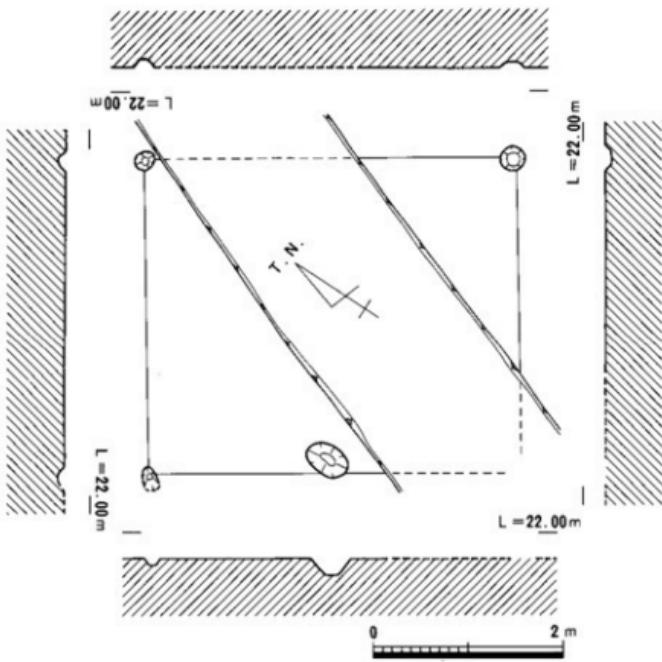
第54図 SD27出土遺物実測図②

SB01 (第55図)

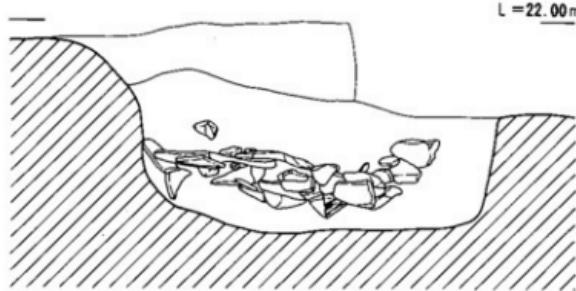
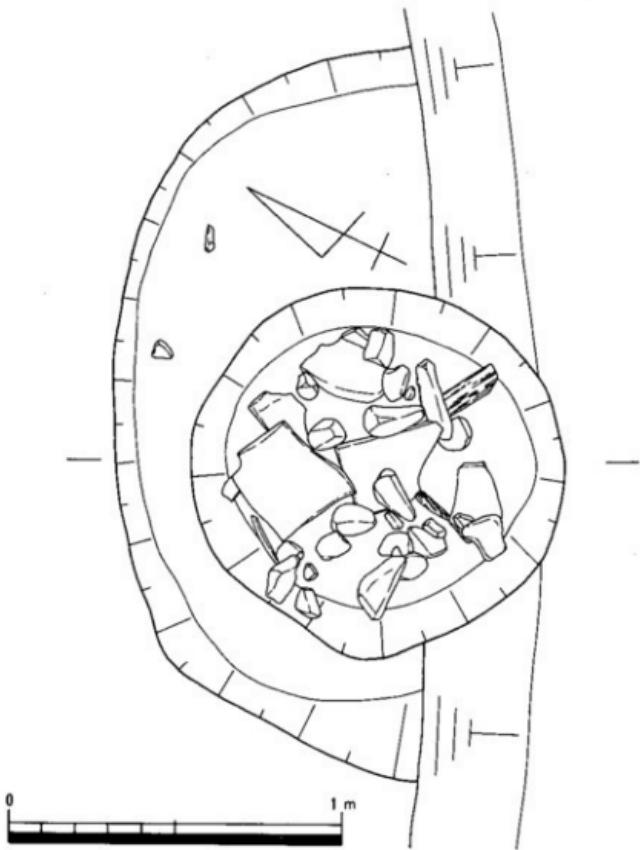
SB01は調査区東部で検出された梁間1間×桁行1間(1.5×1.51m)の掘立柱建物跡である(第55図)。規模は小さいものである。時期は不明。



第55図 SB01平・断面図



第56図 SB02平・断面図



第57図 SE01平・断面図

SE01 (第57図、図版20-①・②)

SE01は調査区西部で検出された井戸である。検出平面形はほぼ円形で、井戸内には5×20cm

程度の川原石と瓦が投げ込まれた状態で検出された。規模は天幅約1.12m、深さ約0.55mを計る。

包含層出土遺物 (第58~64図)

232・233は弥生時代前期の壺である。232は内傾しながら延びる頸部から、口縁部は外方に緩やかに外反する。頸部内面には横方向の板ナデが施されている。233は頸部上部に二条のヘラ描沈線を持つ。

234・235は弥生時代前期の壺である。234は口縁部が外方に逆L字状に屈曲するもので、やや内彎する体部外面には三条のヘラ描沈線を持つ。235は直線的に延びる体部から口縁部が逆L字状に屈曲する。

236は鉗錘車である。

237・238は底部である。体部内外面に板ナデが施されている。

239は弥生時代後期の壺である。口縁部は水平に開き、端部を上下に拡張させる。拡張部外面には鋸歯文が施されている。鋸歯文は左下がりの線を書き、次に右下がりの線を描いているのが判る。口縁部下面には刷毛目が施されている。

240~244は弥生時代後期の鉢である。240は皿状のものである。体部内面に刷毛目が認められる。241~243は底部が丸底で口縁部がほぼ上方に延びるやや深い小型の鉢である。底部外面にはヘラ削りが、内面には指ナデが施されている。また、体部外面には叩きが、内面には横方向の刷毛目が施されている。

245・246は底部である。246は底部に平底を持ち、体部は直線的に外上方に延びる。

247~249は弥生時代後期の高杯である。247は「ハ」の字状に広がる脚部を持つもので、おそらく4個の穿孔を持つ。248は高杯の杯部で杯部中央に屈曲を持ち、外面を突堤状にしている。杯部内面にはヘラ磨きが施されている。249は高杯の脚部である。

250は弥生時代後期の支脚である。脚部は横断面円形状のものでスカート状に広がる。脚上部で屈曲する。

251は弥生時代後期の壺である。ほぼ円形の体部を持ち、口縁部は内彎しながら外上方に延びる。体部外面および頸部内外面には刷毛目が施されている。

252~259は須恵器である。

252は6世紀末頃の杯身である。底部外面にヘラ記号が認められる。

253~256は皿である。底部はヘラ切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。口径は11.0cmのものと15.0cmのものがある。器高はほぼ1.7cmである。

257は高杯の脚である。

258・259は杯である。底部はヘラ切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。258は口

径14.8cm、器高5.9cm、底径4.1cmを計る。

260～284は石鎌である。石材は全てサスカイトである。260～269は平基無茎鎌で基部に抉れが殆どないものである。270～279は凹基無茎鎌である。279はハリ質安山岩製である。280・281・283は基部を欠損しているが、凸基有茎鎌であると思われる。

285は小型切り出し状ナイフ形石器である。

286は縦長剝片石核である。石材はともに白色風化の著しいサスカイトである。

287はサスカイト製の尖頭器と思われる。先端部は欠損しているが、舌状の基部を残している。

288は緑色を呈した黒曜石製の細石刃である。

289は薄い茶灰色を呈した黒曜石製の細石刃核調整剝片と思われる。

290はサスカイト製の石庖丁である。両側辺の中程に1ヶ所ずつ抉れをもち、いずれもつぶれ痕がみられる。

291・292はサスカイト製の二次加工のある剝片である。291は縁辺部につぶれ痕がみられる。

292は全体の2/3位欠損しており、周縁部に使用による摩滅がみられるので石庖丁の可能性がある。

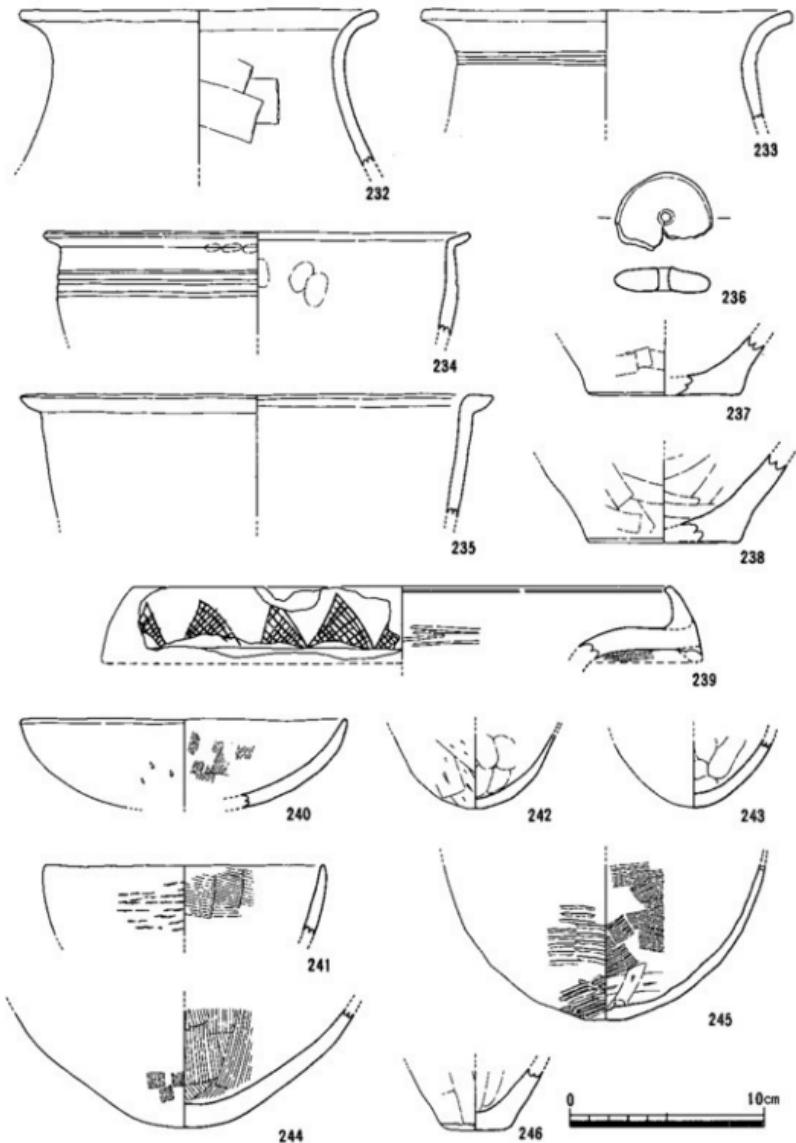
293～296はサスカイト製の楔状石器である。293・295は縁辺につぶれ痕がみられる。294は横長剝片石核を転用したものと思われる。

297～300はサスカイト製のスクレイバーである。297は自然面を残す半円形の剝片を素材とし、周縁部を丁寧に調整して刃部を作り上げている。298は刃部側辺につぶれ痕がみられる。

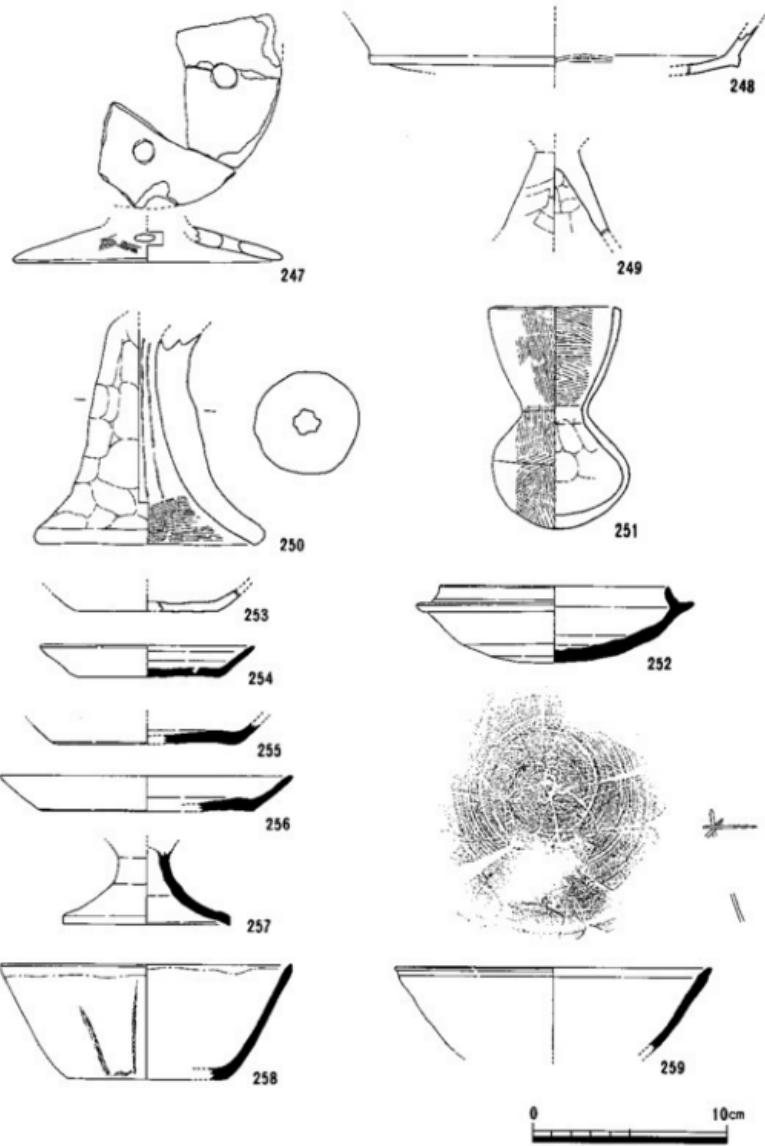
301～303はサスカイト製の打製石庖丁である。いずれも側辺に抉れをもつ。303は抉れ部につぶれがみられる。

304はサスカイト製の石鎌である。薄く鋭い刃部をもつ。

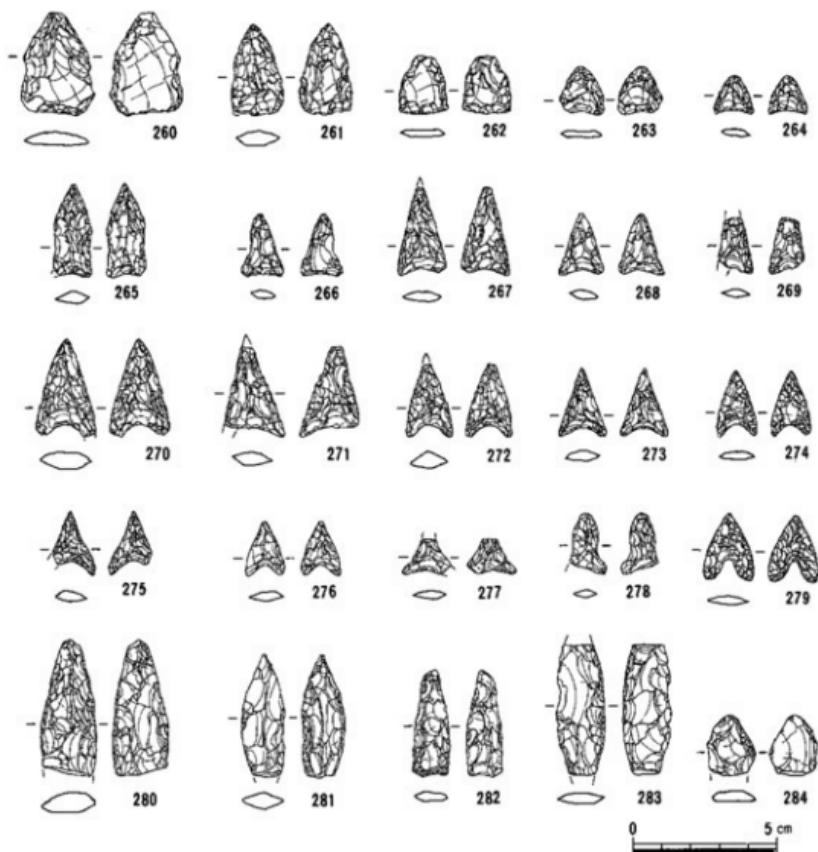
305～312はサスカイト製の打製石斧である。305は基部につぶれ痕がみられる。306は2つに割れており、切断後楔状石器として使用された可能性がある。307・308は基部・刃部を、309は刃部を欠損しており、309は側辺につぶれ痕がみられるので、楔状石器として使用された可能性がある。310～312はいずれも基部が欠損しているものである。310は刃部周縁につぶれ痕及び使用による摩滅が、313は器面の刃部先端に使用による摩滅がみられる。



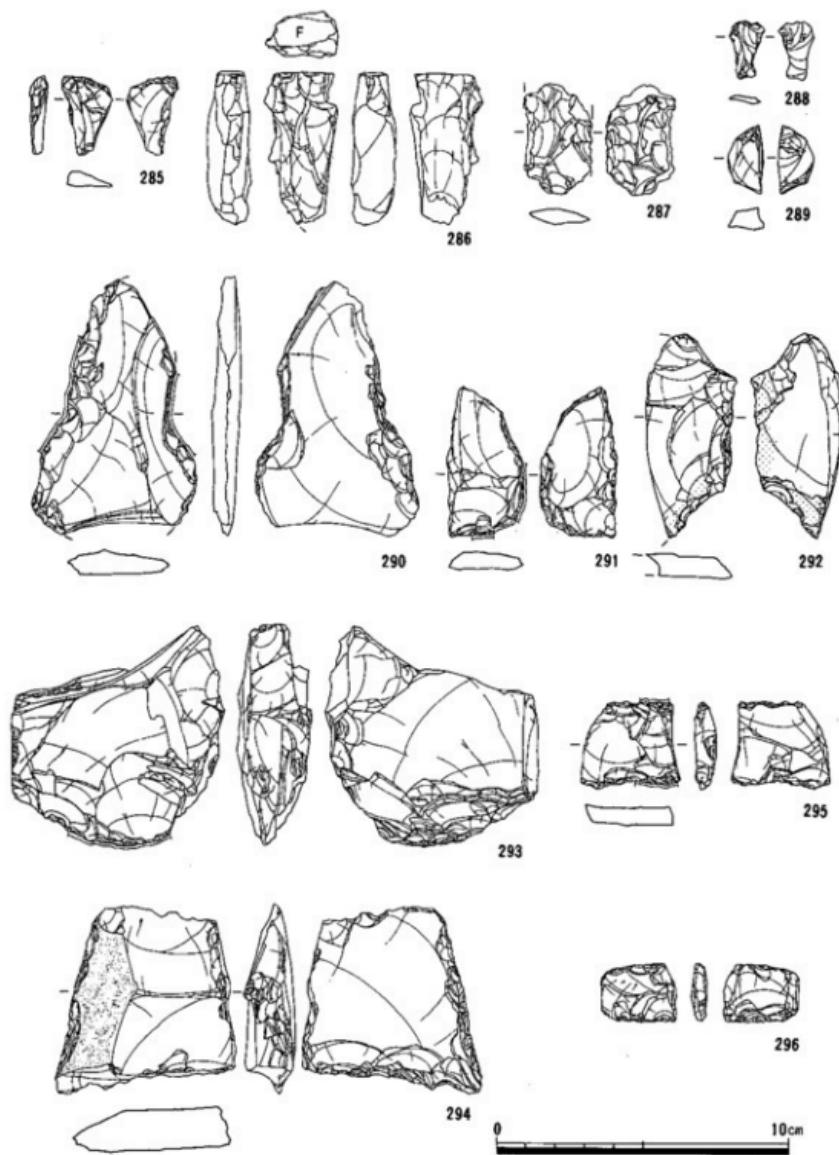
第58図 包含層出土遺物実測図①



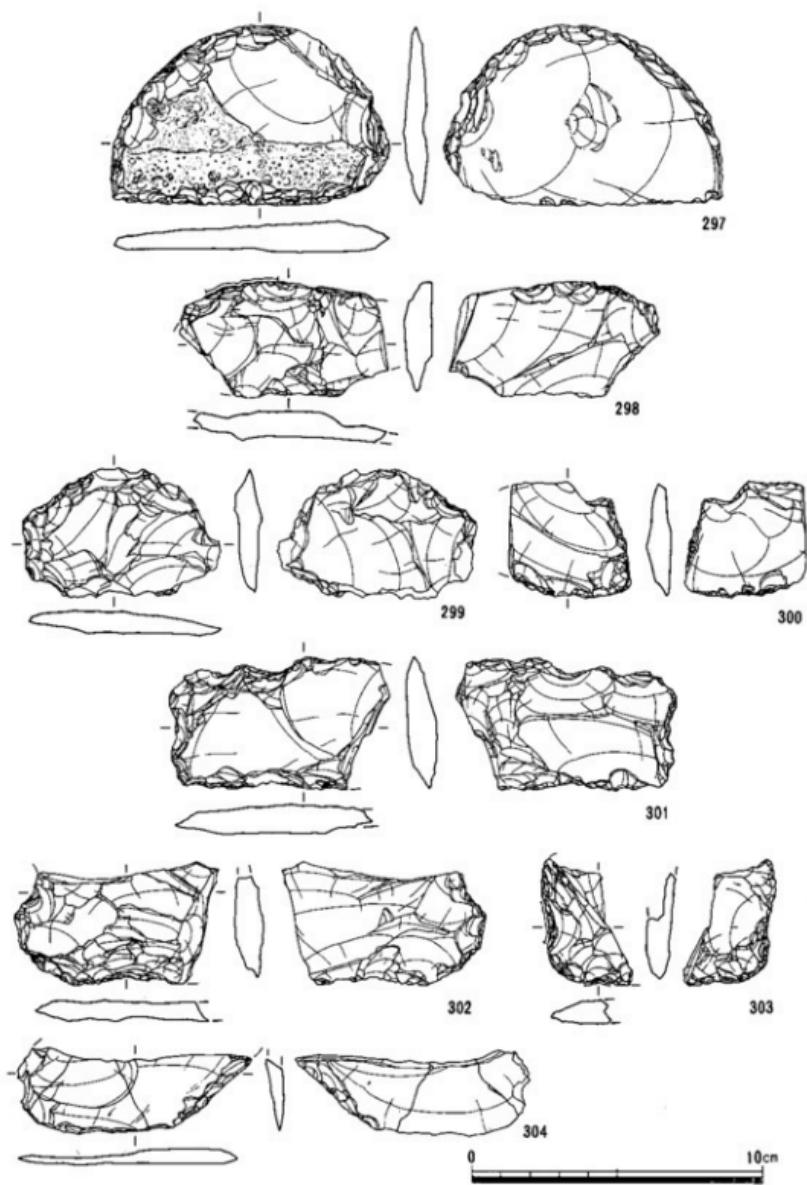
第59図 包含層出土遺物実測図②



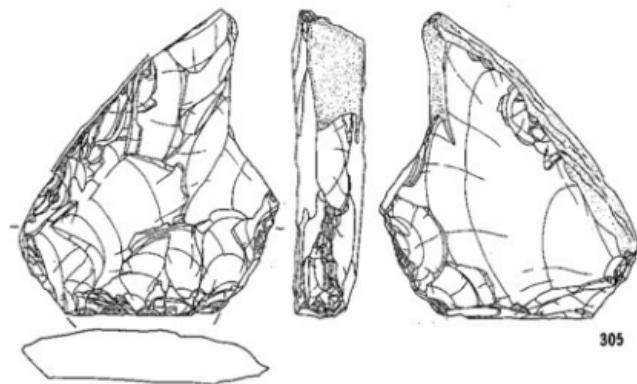
第60図 包含層出土遺物実測図③



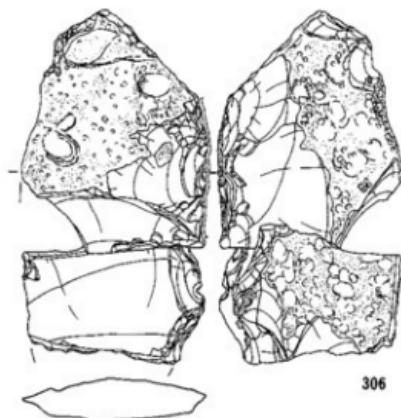
第61図 包含層出土遺物実測図④



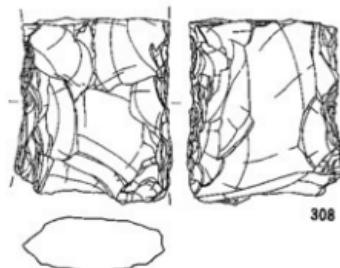
第62図 包含層出土遺物実測図⑤



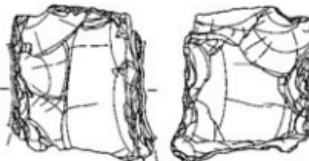
305



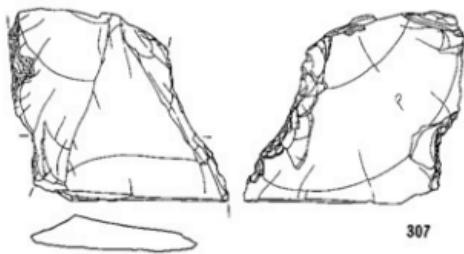
306



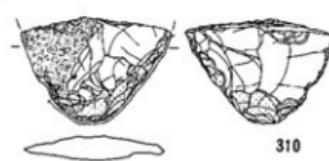
308



309



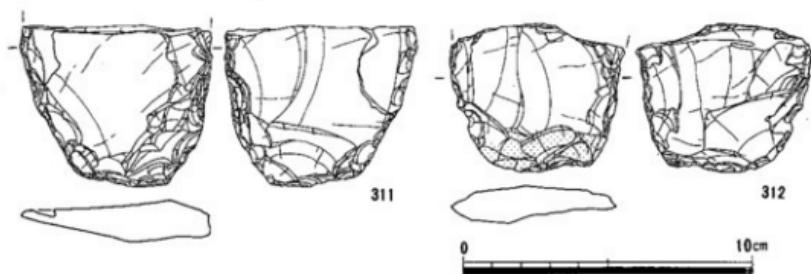
307



310



第63図 包含層出土遺物実測図⑥



第64図 包含層出土遺物実測図⑦

6.まとめ

三条番ノ原遺跡を調査した結果、以上述べてきた遺構・遺物を検出している。ここではこれらの遺構を時期ごとに並べ、丸亀平野のほぼ中心部における遺構の変遷を観ていきたい。

旧石器時代

丸亀平野において旧石器時代の遺構は、近接する三条黒島遺跡で石器の製作技法が判る接合資料が出土しており、この当時丸亀平野を旧石器時代人が往来し、時にはキャンプ地としていたことが判る。そのことは当遺跡において包含層よりナイフ形石器などの旧石器が出土していることからも判る。

三条番ノ原遺跡から検出された旧石器時代の遺構は土坑状の落ち込みが1基確認されている。この遺構は検出面積の割りには深さがなく、掘り方もしっかりしていない状況から、産みに遺物が溜まった可能性が高いものである。

縄文時代

当遺跡で検出された縄文時代の遺構は石器の製作地が検出されている。遺構はほぼ3m程の範囲に2点の石錐と未製品およびサヌカイトの剝片の広がるもので前時代と同様におそらく縄文時代のキャンプ地の可能性が高いものと思われる。

弥生時代前期

当遺跡で検出された弥生時代前期の遺構は溝が1条である。当遺跡においては弥生時代前期までの遺構がほとんど検出されていないことから、狭義の丸亀平野は集落の立地に適さない所であったものと考えられる。

弥生時代後期

弥生時代後期になると前時代までとは様相が変わる。前時代まで丸亀平野中央部に生活の痕跡が無かったものが弥生時代後期になると郡家原遺跡の様に集落が営まれるようになる。当遺跡においても環濠かと思われる溝に区画された堅穴住居跡4棟が検出されており、若干時期が違うものの丸亀平野中央部におけるひとつの集落の在り方として資料的価値は高い。

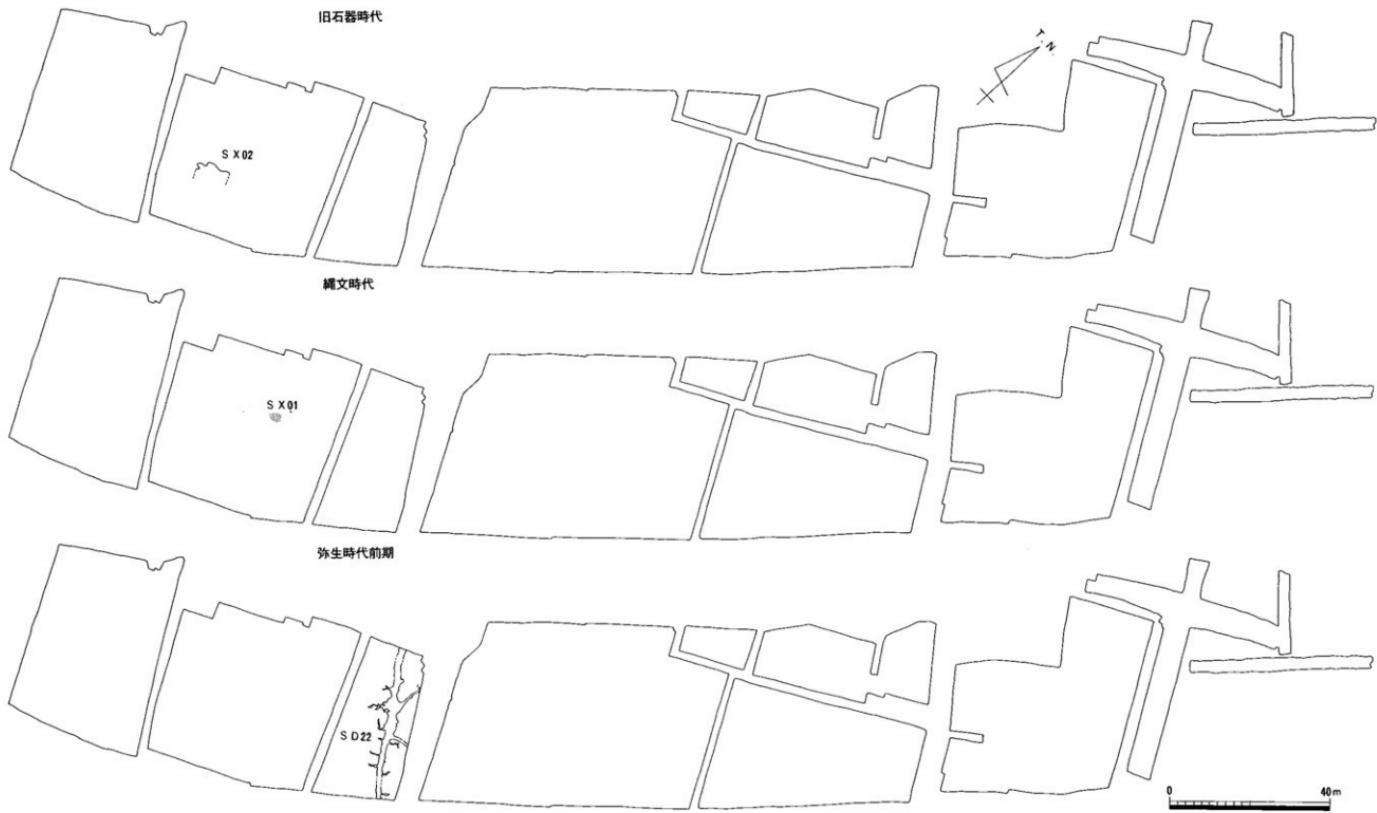
しかし、なぜ弥生時代後期になって丸亀平野中央部に集落が営まれるのであろうか。おそらく弥生時代後期になって人口の増加と鉄器の普及、それにともなう灌漑技術の進歩によるものと推測される。前時代までは灌漑技術が未成熟のため水田耕作の場所が規制を受け、湿地あるいは容易に水を引き込み易い場所が選ばれたものと思われる。灌漑技術の進歩および使用される道具の普及により水の便の悪い場所にも水田耕作が営まれた結果によるものと思われる。

古代～中世

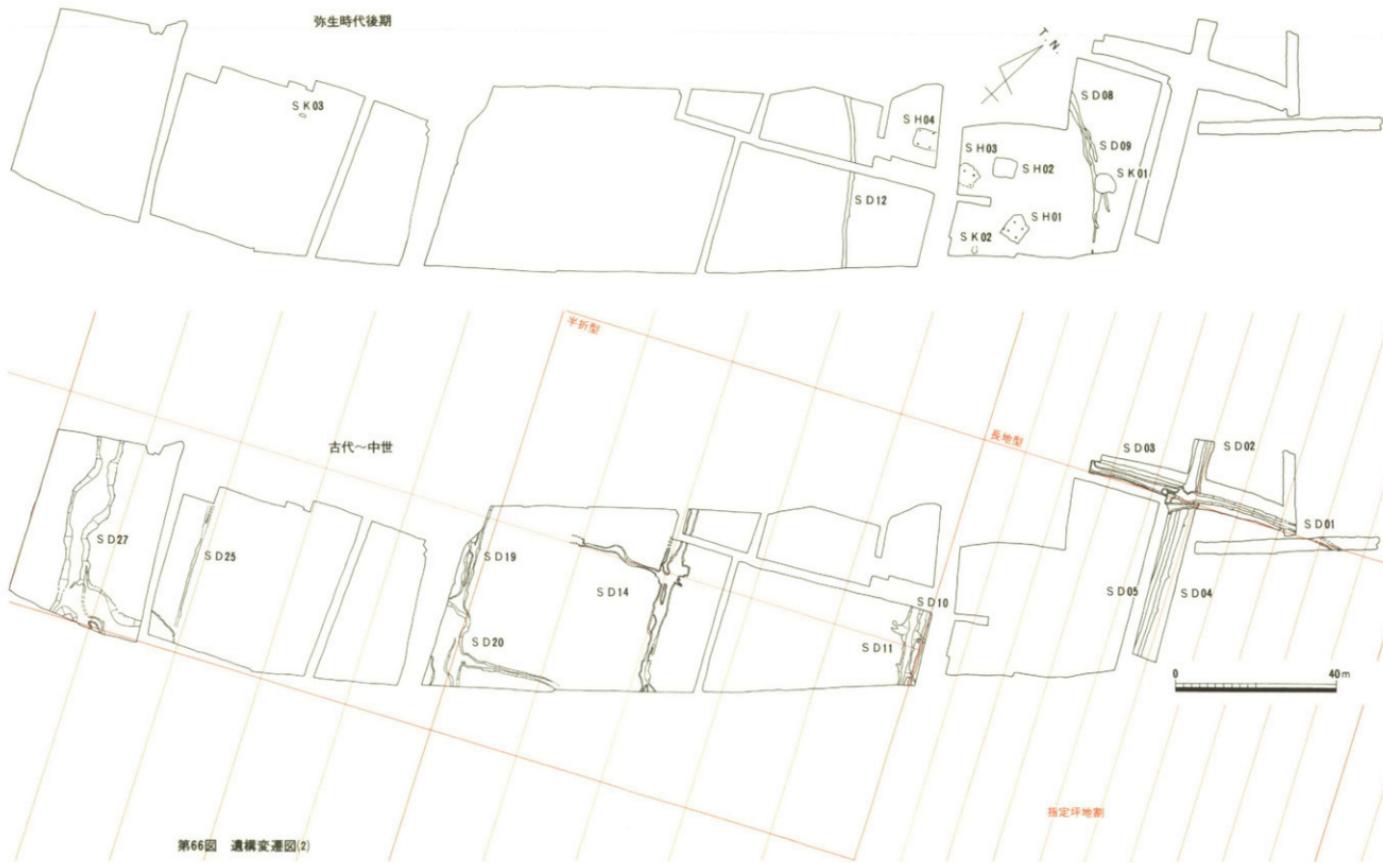
この時期の遺構は方格地割にともなう溝(SD01～05・10・11・14・19・20・25・27)が12条検出されている。これらの溝は丸亀平野の現在の地割り、N-30°-Wに方位を取っている。また、調査区最西端が旧那珂郡の三条と四条の境に推定されている。そして、これまでの研究から

一坪の間隔が100～110mということが判っており、SD20・11が坪境に位置する溝であることが確認された。南北に流路を取る溝の間隔を計ると三条と四条の境にあるSD27の東側とSD25の間隔は23m、SD25とSD20の東側の間隔は65.5m、SD20の東側とSD14西側の間隔は44.5m、SD14の西側とSD11東側の間隔は64.5m、SD11の東側とSD04・05の東側の間隔は54.0mである。また、東西に流路を取る溝を観るとSD01・03とSD14の間隔は54.0mを計る。この検出された溝より当時の一坪の一辺の推定長が復元でき、またその一坪のなかを東西南北に流れる流路が確認できる。一坪の長さは一辺約109mを計ることができ、一坪のなかは南北ではほぼ半分に区切られており、東西は109mを五等分するように区切られていることがわかる。このことから一坪のなかはいわゆる半折型に区切られて一段があったことが窺える(第66図)。しかし、調査区東で検出されたSD04・05とSD11の間隔が一坪109mのはほぼ半分であることからSD11を境として西は半折型を呈し、東は長地型を呈していたことが推定される。これらの溝からは奈良時代から鎌倉時代の遺物を出土しており、古代に掘削され、かなりの期間この溝が使用されていたことが窺える。しかし、奈良時代の遺物が一坪のなかで検出された溝から出土したことは奈良時代に施工された条里制が当初は一坪を半折型に区切っていたことが窺える一資料になるものと考えられる。

以上のように丸亀平野中央部では弥生時代後期になって集落が営まれていたようである。当遺跡の成果としては今まで香川県における条里制の施行の時期および坪地割りといったものがわずかではあるが見えてきたことである。



第65図 遺構変遷図(1)



觀 察 表

第4表 遺物観察表

SX02

種別	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
7	24	石 織	サスカイト	1.6	1.5	0.6	1.4	側刃が丸味を帯びる。
7	24	横長剣片	"	4.9	2.5	0.7	8.8	左側刃と上下側刃に二次加工あり。
7	24	縦長剣片	白色風化サスカイト	10.5	2.7	1.1	28.3	風化が著しい。
7	24	縦長剣片石核	サスカイト	5.2 作業面 5.0	5.6 1.2	3.4	85.3	
7	24	スクレイパー	"	4.1	4.7	1.2	22.0	
7	24	敲き石	砂 岩	20.1	5.7	7.5	1049.0	
7	24	"	"	18.6	7.4	5.4	907.0	周縁部使用による摩滅あり。

SX01

種別	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
8	24	石 織	サスカイト	1.9	1.5	0.3	0.9	未製品か?
8	"	"	"	2.2	1.8	0.3	1.3	"
8	24	"	"	2.0	1.5	0.2	0.5	
8	24	"	"	2.1	2.5	0.3	0.9	先端部欠損。 "

SD22

種別	図版番号	器種	法量(cm)	胎 土	焼成	色 調	備 考
			口径				
12	-	弥生壺	17.2	-	-	粗い5mm程の長石・石英を含む。	良 淡黄褐色 口縁部 内面: ヘラ指挽痕、刻文 外面: ヘラ指挽痕
12	-	"	21.4	-	-	3mm以下の長石・石英等を多く含む。	タ 淡黄褐色 口縁部 内面: 横ナデ 外面: 指押さえ
12	-	"	24.0	-	-	0.2~3mm大的長石・石英等を含む。	タ 淡茶褐色 口縁部 内面: 横ナデ 外面: "
12	-	"	-	-	-	1.5mm以下の長石・石英を含む。	タ 淡褐色
12	-	"	-	-	9.7	5mm以下の長石・石英等を多く含む。	タ 淡褐色 底部 外面: 板ナデ
12	-	"	-	-	8.8	2~3mmの粗い長石・石英を含む。	タ 暗橙褐色
12	25	"	6.0	-	-	小粒の長石・石英を含む。	タ 淡褐色 頸部 内面: 指押さえ 外面: 突唇
12	25	"	-	-	4.6	1mm以下の長石・石英等を含む。	タ 白褐色 底部 内面: 指押さえ 外面: 板ナデ
12	-	弥生壺	-	-	-	1mm以下の長石・石英を含む。	タ 淡褐色

種別	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
12	-	石 織	サスカイト	1.4	1.4	0.3	0.7	
12	25	打製石斧	"	3.5	4.1	1.5	25.7	刃部先端及び左侧縁部につぶれあり。基部欠損。
12	25	ナイフ形石器	白色風化サスカイト	5.2	1.9	0.9	7.3	基部欠損。

SH01

博団(図版番号)	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径				
14	弥生 壺	12.0	—	—	微細、金雲母含む。	良 好	淡褐色	口縁部 内面:ハケ 外面:タ
24								
14	弥生 高坏	—	—	—	2mm以下の長石・石英、微細な金雲母 角閃石を含む。	〃	淡茶褐色	脚部 外面:叩き、ハケ
25								

SH02

博団(図版番号)	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径				
16	弥生 壺	24.0	—	—	1mm以下の長石・ 石英、金雲母・ 角閃石を含む。	良 好	暗茶褐色	口縁部 外面:ハケ
26								
16		—	—	9.0	1mm以下の長石・ 石英等を多く 含む。	やや悪	棕赤褐色	
27								
16	弥生 壺	8.9	15.0	2.9	2mm以下の長石・ 石英、金雲母・ 角閃石を含む。	良 好	暗茶褐色	口縁部 内面:ハケ 外側:叩き、ハケ 底部 内面:ヘラ削り 外面:叩き、ハケ
28								
16		—	—	—	堅敏、微細長石・ 石英、金雲母等を含む。	〃	暗橙褐色	体部 外面:叩き、ハケ
29								
16		—	—	—	堅敏、微細砂粒に 2mmの長石の 混入。	〃	褐色	体部 内面:指押さえ、ハケ 外側:
30								
16		—	—	—	堅敏、微細砂粒及 び金雲母・角 閃石を含む。	良	明褐色	
31								
16		15.0	—	—	0.2~2mmの長石・ 石英及び金 雲母を含む。	〃	〃	体部 内面:指押さえ、ヘラ削り 外側:叩き
32								
16		15.8	—	—	微細砂粒に2~ 3mmの粗砂粒、 金雲母を含む。	〃	褐色	口縁部 内面:ハケ 外面:ハケ 底部 内面:ハケ、サナデ
33								
16		—	—	4.0	0.2~1mmの長石・ 石英、金雲母等を含む。	〃	〃	底部 内面:板ナデ 外側:叩き、サナデ
34								
16		—	—	3.2	2mm以下の長石・ 石英、微細な金雲 母・角閃石を含む。	〃	黒褐色~暗茶 褐色	底部 内面:指押さえ、ハケ 外側:ハケ
35								
16		—	—	5.2	0.2~1mm程度の長 石・石英、金雲母等 の砂粒を含む。	〃	〃	底部 内面:指押さえ 外側:ハケ
36								
16		—	—	2.2	0.5mm以下の長石・ 石英等を含む。	〃	内:灰白褐色 外:白褐色	底部 内面:板ナデ
37								
16		—	—	2.7	微細な長石・石英 等の砂粒を含む。	〃	棕褐色	底部 内面:板ナデ 外側:叩き
38								
16		—	—	3.8	1.5mm以下の長石・ 石英、金雲母等を含む。	〃	内:茶褐色 外:黒茶褐色	底部 内面:板ナデ
39								
16	弥生 盆	11.0	—	—	1mm以下の長石・ 石英、金雲母等を含む。	〃	茶褐色	体部 内面:ハケ 外側:指押さえ
40								
16	弥生 鉢	11.9	3.7	—	1mm以下の長石・ 石英に4~5mmの もじり砂を含む。 小粒の砂粒(約 3mm)の砂を含む。	〃	橙褐色	体部 内面:ハケ 外側:指押さえ
41								
16		—	—	14.4	—	—	茶褐色	体部 内面:ハケ
42								
16		—	—	14.4	—	—	—	体部 内面:ハケ
43								
16		—	—	8.5	—	—	黑褐色~暗褐色	口縁部 内面:サナデ 体部 内面:ハケ 底部 内面:指押さえ
44								
17	26	—	—	9.7	6.8	—	暗褐色~黒褐色	口縁部 内面:ハケ 体部 内面:サナデ 底部 内面:ハケ
45								
17		—	—	—	3mm以下の長石・ 石英、微細な金雲 母等を含む。	〃	内:暗褐色 外:暗褐色	底部 内面:板ナデ 外側:ハケ
46								
17		—	—	—	1mm以下の長石・ 石英、金雲母等を含む。	〃	暗褐色	底部 内面:ハケ、指 押さえ
47								
17		—	—	10.8	—	—	褐色	口縁部 体部 内面:ハケ 体部 外面:叩き
48								
17		—	—	10.7	6.5	—	茶褐色	口縁部 内面:ハケ 体部 外面:ハケ
49								
17		—	—	—	3~4mmの粗い 砂粒、金雲母等を含 む。	〃	暗褐色	底部 内面:ヘラ削り 外側:ハケ
50								
17		—	—	11.0	5.0	—	—	口縁部 体部 内面:ハケ 外側:タ
51								
17		—	—	—	2.2	2mm以下の長石・ 石英及び金雲母等を含む。	〃	茶褐色
52								体部 内面:ハケ 外側:ハケ

種類	図版番号	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	備考
			口径	器高	底径				
17	-	弥生鉢	-	-	4.6	7mm以下の長石・石英、金雲母を含む。	良	暗橙褐色	体部 内面：ハケ 外面：ハケ 底部 内面：ハケ 外面：叩き
53									
17	-	タ	-	-	4.0	微細砂粒及び金雲母を含む。	"	内：灰黒色 外：淡茶褐色	底部 外面：ハケ
54									
17	-	タ	9.2	6.6	3.4	微細	やや悪	灰褐色	体部 内面：叩き 外面：叩き、指押さえ
55									
17	-	タ	-	-	3.1	1mm以下の長石・石英、微細な金雲母・角閃石を含む。	良	黑色～茶褐色	底部 内面：ハケ 外面：叩き
56									
17	-	タ	-	-	4.3	6mm以下の長石・石英、金雲母を含む。	やや悪	青褐色～暗灰褐色	
57									
17	-	タ	19.7	10.2	-	2mm以下の長石・石英、金雲母・角閃石を含む。	良	濁褐色	口縁部 内面：ハケ 体部 内面：ハケ 底部 内面：指押さえ 外面：ハケ
58									
18	26	微細砂粒	-	-	4.8	金雲母・角閃石を含む。	"	暗褐色	底部 内面：ハケ。指押さえ 外面：指押さえ、叩き
59									
18	-	弥生 いニチ エ鉢	5.1	3.5	1.2	2mm以下の長石等、金雲母を含む。	"	暗茶褐色～暗灰茶褐色	体部・底部 内面：指押さえ 体部・底部 外面："
60									
18	-	製塙土器	-	-	4.4	2mm以下の長石・石英等を含む。	やや悪	淡赤褐色	脚部 内面：指押さえ 外面：指押さえ
61									
18	26	支脚	8.0	8.1	4.5	3~4mmの粗い長石・石英を含む。	"	黄灰褐色	内面：ハケ、しばり 外面：指押さえ、叩き
62									

SH03

種類	図版番号	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	備考
			口径	器高	底径				
20	27	弥生壺	27.2	-	-	1mm以下の長石・石英、金雲母・角閃石を含む。	良	茶褐色	口縁部 外面：鏡文 頸部 外面：ハケ
63									
20	-	タ	17.3	-	-	1.5mm以下の長石・石英母を含む。	"	濁褐色	口縁部 内面：板ナデ 外面：ハケ
64									
20	-	タ	-	-	3.0	微細長石・石英、 金雲母・角閃石を含む。	"	暗褐色	底部 内面：ヘラ削り
65									
20	-	弥生壺	-	-	-	微細長石・石英、 金雲母を含む。	"	茶褐色	腹、頸部 内面：指押さえ 外面：ハケ 底部 内面：指押さえ、垂テ
66									
20	27	タ	9.3	12.3	2.7	1mm程の長石・ 石英母を含む。	"	タ	口縁部 内面：叩き 基部 内面： ヘラ削り 基部 外面：指押さえ、垂テ
67									
20	-	タ	11.0	-	-	2mm以下の長石・ 石英、金雲母を含む。	"	暗褐色	口縁部 内面：ハケ 外面：ハケ 体部 外面：叩き、ハケ
68									
20	-	タ	17.3	-	-	1mm以下の長石・ 金雲母を含む。	"	茶褐色	体部 外面：叩き
69									
20	-	タ	-	-	-	0.5mm以下の長石・ 石英、金雲母を含む。	"	淡茶褐色	体部 外面：叩き
70									
20	-	タ	25.0	-	-	0.2~1mmの長石・ 石英、金雲母を含む。	"	茶褐色	
71									
20	-	タ	-	-	2.2	堅緻、微細金雲 母を含む。	良 好	"	体部 内面：板ナデ 体部・底部 外面：叩き、ハケ 底部穿孔あり。
72									
20	-	タ	-	-	2.1	1.5mm以下の長石・ 石英、金雲母を含む。	良	暗褐色	底部 内面：ハケ
73									
20	-	タ	-	-	3.3	1mm以下の長石・ 石英、金雲母を含む。	"	淡橙褐色～灰 褐色	底部 外面：叩き
74									
20	-	タ	-	-	3.6	1mm以下の長石・ 石英、微細な金雲 母・角閃石を含む。	"	茶褐色	底部 内面：ハケ 外面：ハケ
75									
20	27	弥生 小型壺	7.4	6.6	-	1mm以下の長石・ 金雲母を含む。	"	暗茶褐色	腹部 内面：ハケ 体部・底部 内面：指押さえ、垂ナ 底部 内面：指押さえ、垂ナ
76									
21	27	弥生鉢	7.3	3.8	-	微細な砂粒を含 む。	"	タ	体部 内面：板ナデ
77									
21	27	タ	7.6	4.1	-	1mm以下の長石・ 石英、微細な金雲 母・角閃石を含む。	"	濁褐色	口縁部・体部 内面：板ナデ 底部 内面：指押さえ 口縁部・体部・底部 内面：ハケ
78									
21	27	タ	10.7	6.4	-	0.5mm～微細な 砂粒・金雲母・ 角閃石を含む。	"	タ	口縁部・体部・底部 内面：ハケ 外面：指押さえ
79									
21	-	タ	10.0	5.0	-	1~2mm程度の 長石・石英、金雲 母を含む。	"	茶褐色	口縁部・体部・底部 内面：ハケ 外面：叩き
80									
21	-	タ	12.0	4.9	-	1.5mm以下の長石 石英、金雲母・角 閃石を含む。	"	暗茶褐色	口縁部 内面：ハケ
81									
21	-	タ	10.8	-	-	1.5mm以下の長石 等を含む。	"	暗褐色	口縁部・体部 内面：ハケ 外面：ハケ
82									

擇園	図版 番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
			口径	器高	底径				
21	-	赤生 鉢	12.4	-	-	1mm以下の長石・石英、金雲母を含む。	良	暗茶褐色	口縁部・体部内面: ハケ
83									外側: ハケ
21	-	〃	8.0	-	-	2mm以下の長石・石英を含む。	〃	暗褐色	口縁部・体部内面: ハケ
84									外側: ハケ
21	-	〃	9.7	-	-	0.7mm以下の長石・石英、金雲母を含む。	〃	〃	
85									
21	-	〃	17.4	8.8	-	2mm以下の長石・石英、0.7mm以下の金雲母・角閃石を含む。	〃	〃	口縁部・体部内面: ハケ 暗茶褐色等、表面: ハケ
86									底部: 指押さえ
21	-	〃	17.4	8.4	-	1~2mmの長石・石英、金雲母を含む。	〃	茶褐色	体部外面: 叩き。底部: 指押さえ
87									外側: ハラ削り
21	-	〃	8.7	-	-	0.5mm以下の長石・角閃石を含む。	〃	〃	口縁部 内面: ハケ
88									体部 内面: 板ナデ
21	-	〃	18.3	-	-	3mm以下の長石・石英、金雲母・角閃石を含む。	〃	暗茶褐色	口縁部 内面: ハケ
89									体部 内面: 板ナゲ
21	-	〃	-	-	-	1mm以下の長石・石英、微細な金雲母・角閃石を含む。	〃	〃	外側: 指押さえ
90									ハケ
21	-	〃	-	-	-	微細な長石・石英、金雲母・角閃石を含む。	〃	淡橙褐色	底部 内面: ハケ
91									外側: ハケ
22	-	〃	-	-	4.0	1mm以下の長石・石英、金雲母を含む。	〃	黒褐色~褐茶褐色	底部 内面: ハケ
92									外側: ハケ
22	27	赤生 長頸壺	-	-	-	微細な長石を含む。	やや悪	白檀褐色	肩部 内面: 指押さえ、しほり
93									
22	-	赤生 高坏	-	-	-	微細な長石・石英、金雲母・角閃石を含む。	良	赤茶褐色	体部 内面: ハラ削き
94									
22	27	赤生 ミニチュア鉢	4.7	2.9	2.4	0.7mm以下の長石・石英、微細な金雲母・角閃石を含む。	〃	黑褐褐色	内面: ハケ、指押さえ
95									外側: 指押さえ
22	-	製塙土器	-	-	4.0	1mm以下の長石・石英、金雲母を含む。	〃	暗赤褐色~黒褐色	体部・脚部 内面: 指押さえ
96									脚部 外面: 指押さえ

SH04

擇園	図版 番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
			口径	器高	底径				
24	28	赤生 壺	22.0	-	-	1.5mm以下の長石・石英を含む。	良	淡褐色	胎土内面: ハラ削り。外側: ハケ
97									外側: 指押さえ、指壓
24	-	赤生 壺	17.7	-	-	1.5mm以下の長石・石英を含む。	〃	〃	胎土内面: ハラ削り。外側: ハケ
98									外側: 指押さえ、指壓
24	28	〃	12.0	14.2	-	7mm以下の長石・石英、金雲母を含む。	〃	灰白褐色	体部 内面: ハケ 外面: ハラ削り
99									底部 内面: ハラ削り 外面: ハラ削り
24	-	赤生 鉢	15.0	-	-	1~2mmの長石・石英を含む。	〃	淡褐色	胎土内面: ハラ削り
100									外側: 指押さえ、指壓
24	-	〃	15.0	-	-	1~2mmの長石・石英を含む。	〃	〃	
101									
24	-	〃	13.4	7.2	-	5mm以下の長石・石英等の砂粒を含む。	〃	白褐色	体部 内面: 板ナデ
102									外側: 指押さえ、指壓
24	-	〃	11.8	5.5	-	1.5mm以下の長石・石英を含む。	〃	淡褐色	体部 内面: 板ナデ 外面: 指押さえ
103									外側: 指押さえ、指壓
24	-	〃	11.3	-	7.1	細砂粒を含む。	〃	淡漠茶黄色	口縁部・体部 内面: 指ナデ 外面: 指ナデ
104									底部 内面: ハラ削り
24	-	〃	17.6	-	-	1mm以下の微細な長石・石英を含む。	〃	白褐色	口縁部・体部 内面: ハケ
105									
25	-	〃	11.0	-	-	3mm以下の長石・石英、金雲母を含む。	〃	暗橙褐色	
106									
25	-	赤生 底部	-	-	3.4	2mm以下の長石・石英、微細な金雲母・角閃石を含む。	〃	暗褐色~黒色	内面: ハケ、指押さえ
107									外側: ハケ
25	28	〃	-	-	-	1.5mm以下の長石・石英を含む。	〃	淡褐色	内面: 板ナデ
108									
25	-	〃	-	-	-	1mm以下の細かい長石・石英を含む。	〃	淡褐色	
109									

SK01

擇園	図版 番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
			口径	器高	底径				
27	-	赤生 底部	-	-	4.0	2mm以下の長石・石英を含む。	良	黒褐色~茶褐色	外面: ハケ
110									

種別	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
27	29	スクレイパー	白色風化サヌカイト	2.7	7.0	0.9	20.7
111							

SK02

種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径				
29	-	弥生	底部	-	14.6	粗い長石・石英を含む。	良	橙褐色
112								
29	-		"	-	6.2	3mm大の長石・石英を含む。	"	茶褐色
113								
29	-		"	-	8.0	2mm以下の長石・石英を含む。	"	淡茶褐色
114								内面：板ナデ 外面：指押さえ
29	29		"	-	8.1	3mm程度の長石・石英を含む。	"	赤茶褐色
115								底部穿孔あり。瓶
29	-		"	-	6.4	3mm以下の長石・石英を含む。	"	黒褐色
116								
29	-	弥生	鉢	25.6	-	1~2mmの長石・石英を含む。	"	渦黄褐色
117								
29	-		"	8.0	-	2mm以下の長石・石英・金綿母を含む。	"	淡茶褐色
118								
29	-		"	19.3	-	0.5mm以下の長石・石英・金綿母を含む。	"	暗褐色
119								体部 外面：叩き
29	-	弥生	甕	12.0	-	堅硬な長石・石英・金綿母を含む。	"	茶褐色
120								口縁部・体部 内面：ハケ 外面：叩き
29	-		"	-	4.3	0.5~1.5mmの長石・石英・金綿母を含む。	"	"
121								内面：板ナデ

SK03

種別	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
31	-	石	鐵	サヌカイト		2.4	1.6
122						0.3	0.6

SD12

種別	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径				
34	29	弥生	長頸甕	14.8	-	2mm大の長石・石英を含む。	良	淡橙褐色
123								頸部 内面：指ナデ 外面：ハケ
34	-	弥生	甕	13.4	-	1mm以下の長石・石英・金綿母を含む。	"	暗褐色
124								体部 外面：叩き
34	-		"	12.0	-	2mm以下の長石・石英を含む。	"	茶褐色
125								体部 内面：指押さえ 外面：板ナデ、指押さえ
34	29		"	17.2	-	2.5mm以下の長石・石英・金綿母・藤細角閃石を含む。	"	暗褐色
126								体部 外面：ハケ
34	-		"	-	3.0	2.5mm以下の砂粒・金綿母を含む。	"	暗茶褐色
127								底部 内面：板ナデ 外面：ハケ
34	-		"	-	4.4	4mm以下の長石・石英・金綿母・角閃石を含む。	やや悪	黒褐色～暗赤褐色
128								
34	-	弥生	鉢	21.0	-	堅硬な長石・石英・金綿母・角閃石を含む。	良	茶褐色
129								体部 内面：ヘラ磨き
34	-		"	21.4	11.1	5.2	"	渦橙褐色
130								底部穿孔あり。
34	-		"	13.6	-	-	"	淡褐色
131								体部 内面：板ナデ、指ナデ 外面：指押さえ
34	30	弥生	高坏	18.4	10.4	13.2	1~2mmの長石・石英・金綿母を含む。	橙褐色
132								

種別	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
34	-	石	鐵	サヌカイト		1.1	1.6
133						0.3	0.6

SD15

擇図 国版 番号	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径				
35	弥生 鋼	17.0	-	-	2mm以下の長石 ・石英を含む。	良	淡黄白褐色	
134								
35	弥生 壺	24.0	-	-	1mm以下の長石 ・石英を含む。 2~5mmの長石・石英 ・金雲母・角閃石を含む。	〃	茶褐色	
135								

SD01

擇図 国版 番号	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径				
37	磁器 豪	9.7	-	-	精良	良好	胎土：灰白色 釉：青白色 火須：蓝色	肥前系
136								
37	磁器 盆	-	-	高台径 3.4	〃	〃	胎土：灰白色 釉：薄灰色	肥前系 貝須の発色は悪い。
137								
37	磁器 皿	-	-	高台径 3.6	〃	〃	胎土：灰白色 釉：薄青灰色	肥前系
138								
37	磁器 皿	-	-	高台径 3.9	〃	〃	胎土：灰白色 釉：透明青灰色	唐津系 砂目積
139								
37	磁器 皿	-	-	高台径 3.6	〃	〃	胎土：薄灰色 釉：純灰色 質入	唐津系
140								
37	磁器 碗	-	-	高台径 3.8	〃	〃	胎土：灰白色 釉：綠灰色	肥前系 底部外面墨書あり。
141								
37	伊万里染付瓶	3.0	-	-	〃	〃	胎土：灰白色 釉：青灰色	肥前系 貝須の発色は悪い。
144								
37	磁器 皿	-	-	高台径 4.8	〃	〃	胎土：灰白色 釉：薄綠灰色	肥前系
145								
37	天日 碗	-	-	高台径 4.1	〃	〃	胎土：灰白色 釉：淡綠色	肥前系
143								
37	陶器 染付碗	-	-	高台径 5.0	微細な砂粒を含む。	〃	胎土：灰白色 釉：薄綠灰色	肥前系 貝須の発色は悪い。
148								
37	陶器 青綠釉皿	-	-	高台径 4.9	精良	〃	胎土：淡灰色 釉：青綠灰色	唐津系
149								
37	京焼風陶器碗	-	-	高台径 4.6	〃	〃	胎土：淡白褐色 釉：薄綠色	唐津系
150								
37	陶器 皿	-	-	高台径 5.6	微細な砂粒を含む。	〃	胎土：淡白褐色 釉：薄綠色	胎土目積
151								
37	陶器 満翠皿	-	-	高台径 4.0	精良	〃	胎土：灰白色 釉：翠綠色 質入	砂目積
152								
37	陶器 染付碗	-	-	高台径 4.6	〃	〃	胎土：淡茶褐色 釉：薄綠灰色	砂目積
153								
37	陶器 青綠釉皿	-	-	高台径 6.1	〃	〃	胎土：淡白褐色 釉：翠綠色	
154								
37	陶器 瓶	-	-	高台径 7.4	精良	良好	胎土：茶褐色 釉：灰白色	
155								
37	京焼風陶器碗	10.2	-	-	〃	〃	胎土：白灰色 釉：薄綠灰色 質入	灰釉铁絵染付
156								
37	刷毛目皿	-	-	高台径 3.0	〃	〃	胎土：淡灰色 釉：薄綠灰色 質入	
157								
37	刷毛目碗	-	-	高台径 8.9	〃	〃	胎土：赤茶褐色 釉：白色	唐津系
158								
37	土師質 土鍋	18.5	-	-	1mm以下の長石 ・石英を含む。	良	淡褐色	
160								
37	土師質 插鉢	26.4	-	-	1mm以下の長石 ・石英を含む。	〃	〃	
161								
37	備前 插鉢	30.0	-	-	2mm以下の長石 ・石英を含む。	〃	胎土：薄青灰色・灰 色 釉：淡青色・暗青 色	
162								

掲図	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
			口径	器高	底径				
37	—	備前 插鉢	29.0	—	—	3mm以下の長石等の砂粒を含む。	良	赤茶褐色～灰色	
163									
37	31	〃	28.0	—	—	1mm以下の砂粒を含む。	〃	胎土：灰色 表面：赤茶色	
164									
37	—	〃	30.0	—	—	2mm以下の長石・石英を含む。	〃	胎土：赤褐色 表面：赤茶灰褐色	
165									
37	31	〃	30.6	—	—	1mm以下の細かい砂粒を含む。	〃	胎土：灰色 表面：薄茶褐色	
166									
37	31	〃	30.0	—	—	2mm以下の長石・石英を含む。	〃	胎土：赤茶褐色 表面：暗赤褐色	
167									
37	—	備前 灯明皿	11.6	—	—	微細な長石・石英を含む。	〃	胎土：乳白色 表面：淡茶褐色	
168									

掲図	図版番号	器種	材質		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
			口径	器高					
38	30	銅鏡			直径 2.4	—	0.2	—	寛永通寶
169									
38	30	〃			直径 2.5	—	0.2	—	寛永通寶
170									
39	—	楔形石器	サスカイト		4.4	3.4	1.0	13.9	
171									
39	—	〃	白色風化サスカイト		2.8	1.7	0.8	3.9	
172									
39	31	〃	サスカイト		4.9	4.8	1.5	49.3	周縁部つぶれあり。
173									
39	31	打製石庖丁		"	8.0	4.6	1.2	56.4	ほぼ全面に使用による摩滅あり。
174									

SD02

掲図	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
			口径	器高	底径				
41	—	陶胎染付碗	—	—	3.9	精良	良好	胎土：墨灰色 釉：乳白色質入	
175									
41	31	備前 插鉢	31.0	—	—	細かい砂粒を含む。	〃	胎土：灰色 表面：赤褐色 裏面：赤黃褐色	
176									
41	31	〃	—	—	11.0	精良	〃	胎土：赤茶褐色 表面：*	
177									

掲図	図版番号	器種	材質		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
			口径	器高					
41	—	スクレイパー	サスカイト		3.9	3.1	1.3	16.8	
178									

SD04

掲図	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
			口径	器高	底径				
46	—	須恵器 壺身	13.3	4.4	8.1	1mm以下の砂粒を多く含む。	やや悪	淡灰白色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ 底部：ハラ切り
179									

SD05

掲図	図版番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
			口径	器高	底径				
46	—	須恵器 壺蓋	14.0	—	—	1mm以下の長石・石英等を含む。	良	淡灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ
180									
46	—	須恵器 壺身	12.9	—	—	精緻	〃	淡灰色～黒灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ
181									
46	—	〃	12.0	—	—	0.5mm以下の砂粒を含む。	〃	淡明灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ
182									
46	—	〃	18.9	—	—	精緻	〃	薄灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ
183									

SD11

擇國 国版 番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径				
46 - 184	瓦器 梶	15.2	-	-	細かい砂粒を含む。	良	黒灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、指押さえ
46 - 185	須恵器 壺	18.2	-	-	微細な砂粒を含む。	〃	灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ
46 - 186	〃	-	-	11.0	精緻	〃	〃	内面： 外面：回転ナデ、ヘラ削り

擇國 国版 番号	器種	材質		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
		口徑	器高					
46 - 187	石 繰	サスカイト		1.3	1.1	0.3	0.4	
46 - 188	〃	〃		2.3	1.1	3.5	0.8	先端部欠損
46 - 189	〃	〃		3.1	2.2	0.5	3.3	
46 - 190	楔状石器	〃		2.3	1.2	0.5	2.0	
46 - 191	スクレイパー	〃		6.4	3.6	0.6	16.0	

SD14

擇國 国版 番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径				
46 - 192	須恵器 坏蓋	10.2	-	-	0.8mm以下の長石・石英を含む。	やや悪	明灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ
46 - 193	須恵器 坏身	-	-	-	細かい砂粒を含む。	良	灰色	内面：回転ナデ 外面：ヘラ削り
46 - 194	須恵器 蓋	17.5	2.0	-	1mm以下の砂粒を多量に含む。	〃	〃	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、ヘラ削り
46 - 195	須恵器 盆	13.2	2.0	10.1	2mm以下の長石・石英等を含む。	〃	明灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ、底削り、ヘラ削り
46 - 196	須恵器 梶	15.4	-	-	細かい砂粒を多量に含む。	〃	灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ
46 - 197	須恵器 短頸壺	3.8	-	-	1mm以下の砂粒を含む。	〃	〃	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ

擇國 国版 番号	器種	材質		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
		口徑	器高					
46 - 198	石 繰	サスカイト		1.8	1.4	0.4	0.7	
46 - 199	横長剣片	〃		4.8	2.3	0.6	5.5	

SD17

擇國 国版 番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径				
48 - 200	須恵器 坏身	11.2	-	-	精良	良	灰色	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ

擇國 国版 番号	器種	材質		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
		口徑	器高					
48 - 201	石 繰	白色風化サスカイト		2.3	1.3	0.3	1.0	
48 - 202	スクレイパー	〃		8.5	5.4	0.8	30.6	
48 - 203	〃	〃		4.9	3.2	0.6	10.6	
48 - 204	〃	良質サスカイト		5.9	3.7	1.0	20.2	

掲図	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
48	一	打製 石庖丁	サスカイト	5.2	4.5	0.9	19.0	
205								
48	32	〃	白色風化サスカイト	5.9	6.1	0.8	32.2	
206								
48	32	打製 石斧	サスカイト	11.0	5.8	1.8	133.6	2つに折れている。切断後楔として使った可能性あり。縁辺につぶれあり。
207								
48	32	〃	白色風化サスカイト	9.0	6.6	1.6	115.9	刃部・基部欠損。
208								
48	32	〃	〃	5.8	5.6	1.8	67.7	側縁につぶれあり。基部欠損。
209								

SD18

掲図	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径	胎土	焼成	色調	備考
49	一	染付 小环	6.4 2.4 2.2	精良	良好	胎土: 褐灰・白 内面: 黄褐色 外表面: 黄褐色 底面: 黑褐色	
210							

掲図	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
49	一	スクリーパー	サスカイト					
211				6.8	3.2	1.2	25.7	

SD27

掲図	図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径	胎土	焼成	色調	備考
51	一	須恵器 盆	13.5 1.9 10.2	精緻	良	黒灰色	内面: 回転ナデ 外表面: ハラ切り 底面: ハラ切り
212		〃	— — 10.3	微細な砂粒を含む。	〃	灰色	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り
51	—	須恵器 杯	13.9 — —	微細な砂粒を含む。	〃	内面: 茶灰色 外面: 茶色	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ
213		〃	— — 7.7	精緻	良好	灰色	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り
51	—	須恵器 杯	— — 8.8	〃	〃	〃	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り
214		〃	— — 6.8	〃	〃	〃	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り
51	—	〃	— — 7.2	精緻	良好	灰色	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り
215		〃	— — 6.8	〃	〃	〃	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り
51	—	〃	— — 6.8	〃	〃	〃	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り
216		〃	— — 7.8	1mm以下の砂粒を含む。	〃	灰色	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り
51	—	須恵器 高台付杯	— — 10.5	2mm以下の砂粒を含む。	〃	〃	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り
220		〃	— — 7.7	微細な砂粒を含む。	〃	〃	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り
51	—	須恵器 高台付杯	— — 7.7	3mm以下の基石・石英、1mm以下の金雲母・角閃石を含む。	〃	〃	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り
221		〃	— — 22.8	2~3mm以下の粗い、長石・石英、金雲母・角閃石を含む。	〃	暗褐色	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り
51	—	弥生 壺	19.0 — —	3mm以下の基石・石英、1mm以下の金雲母・角閃石を含む。	〃	〃	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り
222		〃	— — 22.8	2~3mm以下の粗い、長石・石英、金雲母・角閃石を含む。	〃	褐色	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り
51	—	〃	— — 22.8	2~3mm以下の粗い、長石・石英、金雲母・角閃石を含む。	〃	〃	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底面: ハラ切り

掲図	図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	
51	32	打製 石斧	サスカイト	14.3	5.5	2.1	179.2		
225		〃	〃	4.0	5.1	1.5	34.8	基部・刃部欠損。	
51	—	226	〃	〃	4.5	4.6	0.7	24.2	基部欠損。使用による摩滅あり。
51	32	227	〃	5.1	4.8	1.6	44.7	基部・刃部欠損。	
51	—	228	〃						

拝図版番号	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
51 32 229	打製 石庖丁	サヌカイト	9.8	4.9	1.0	59.2	表面使用による摩滅、刃部につぶれあり。
51 32 230	〃	〃	4.3	5.6	1.3	28.6	表面に使用による欠損あり。 1/2~1/3欠損
51 32 231	打製 石鎌	〃	7.2	5.1	1.0	44.4	先端部欠損

包含層

拝図版番号	器種	法量(cm)		胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高				
58 - 232	弥生前期 壺	18.0	-	-	良	淡橙褐色~灰褐色	頸部 内面: 板ナデ
58 - 233	〃	18.8	-	-	〃	淡黄褐色	頸部 外面: ヘラ描沈線
58 - 234	弥生前期 壺	21.8	-	-	〃	黄褐色	体部 外面: ヘラ描沈線
58 - 235	〃	21.7	-	-	やや悪	暗褐色	
58 33 236	紡錘車	直徑 5.0	厚さ 1.2	-	〃	黄茶褐色	
58 - 237	弥生 底部	-	-	8.0	〃	茶褐色	外面: 板ナデ
58 - 238	〃	-	-	7.8	良	茶褐色	内面: 板ナデ 外面: 板ナデ
58 33 239	弥生 壺	27.7	-	-	1~3mmの長石・石英、金雲母を含む。	明茶褐色	口縁部 外面: 線文 頸部 内面: ヘラ磨き 外面: ハケ
58 - 240	弥生 鉢	16.6	-	-	1~2mm以下の長石・石英、金雲母を含む。	黒褐色	体部 内面: ハケ
58 - 241	〃	14.3	-	-	2mm以下の長石・石英、微細な金雲母を含む。	暗褐色	体部 内面: ハケ 外表面: ナデ
58 - 242	〃	-	-	-	1~2mmの長石・石英、金雲母・角閃石を含む。	〃	体部 内面: 指押さえ 外表面: ヘラ削り
58 - 243	〃	-	-	-	1.5mm以下其長石・石英、金雲母を含む。	黒色~暗褐色	
58 - 244	〃	-	-	4.7	〃	黒色~棕褐色	体部 内面: ハケ 外表面: ハケ
58 - 245	弥生 底部	-	-	2.4	1~2mmの長石・石英を含む。	褐色	体部 内面: ハケ 外面: 司 底部 内面: ヘラ削り 外面: 司
58 - 246	〃	-	-	2.8	微細な砂粒を含む。	淡褐色	内面: 指ナデ 外表面: 板ナデ
59 33 247	弥生 高坏	-	-	13.6	3mm以下の長石・石英、金雲母を含む。	淡黄灰褐色	脚部 外面: ハケ
59 - 248	〃	-	-	-	微細な長石・石英、金雲母を含む。	茶褐色	坏部 内面: ヘラ磨き
59 - 249	〃	-	-	-	3mm以内の長石・石英を含む。	〃	脚部 内面: 板ナデ 外表面: 板ナデ
59 33 250	支 脚	-	-	11.1	3mm以下の長石・石英を含む。	白褐色	内面: しぶり。ハケ 外表面: 指押さえ
59 33 251	弥生 壺	6.1	10.4	-	1mm以下の長石・石英、微細な金雲母・角閃石を含む。	黒褐色~暗褐色	略等: 強削 内面: ハケ 外面: ハケ 体部 内面: 指押さえ 外面: ハケ
59 33 252	須恵器 坏身	11.6	3.9	-	精緻	薄紫灰色	内面: 回転ナデ 外面: 回転ナデ 底部へラ削り ヘリ記号あり。
59 - 253	須恵器 盤	-	-	7.4	砂粒をほとんど含まない。	やや悪 白褐色	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底部: ヘラ切り
59 - 254	〃	11.0	1.6	7.2	精緻	〃 白灰色	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底部: ヘラ切り
59 - 255	〃	-	-	9.8	2mm以下の長石等の砂粒を含む。	良 青灰白色	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底部: ヘラ切り
59 - 256	〃	15.0	1.9	11.1	微細な砂粒を含む。	〃 淡灰色	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底部: ヘラ切り
59 - 257	須恵器 高坏	-	-	8.6	3mm以下の長石・石英を含む。	灰褐色	脚部 内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ
59 - 258	須恵器 坯	14.8	5.9	4.1	精緻、殆ど砂粒を含まない。	〃 薄灰色	内面: 回転ナデ 外表面: 回転ナデ 底部: ヘラ切り。

種類 番号	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
		口径	器高	底径				
59 -	須恵器 壺	16.0	-	-	微細な砂粒を含む。	良	灰色	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ
259								

種類 番号	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
60 34	石 鐵	サスカイト	3.5	2.5	0.5	4.6	
260							
60 34	〃	〃	3.1	1.8	0.5	2.7	
261							
60 34	〃	〃	2.0	1.7	0.3	1.0	
262							
60 34	〃	〃	1.6	1.5	0.2	0.6	
263							
60 34	〃	白色風化サスカイト	1.3	1.4	0.3	0.4	
264							
60 34	〃	サスカイト	3.2	1.3	0.4	1.7	
265							
60 34	〃	〃	2.1	1.4	0.3	0.7	
266							
60 34	〃	〃	3.0	1.7	0.4	1.3	
267							
60 34	〃	白色風化サスカイト	2.1	1.6	0.4	0.7	
268							
60 34	〃	〃	2.0	1.2	0.3	0.6	
269							
60 34	〃	サスカイト	3.3	2.1	0.6	2.7	
270							
60 34	〃	〃	3.1	2.1	0.5	2.2	
271							
60 34	〃	〃	2.5	1.6	0.6	1.3	
272							
60 34	〃	白色風化サスカイト	2.3	1.6	0.4	0.7	
273							
60 34	〃	サスカイト	2.2	1.8	0.3	0.6	
274							
60 34	〃	〃	2.2	2.0	0.4	0.6	
275							
60 34	〃	白色風化サスカイト	1.8	1.9	0.4	0.5	
276							
60 34	〃	サスカイト	1.2	1.7	0.3	0.4	先端、基部欠損。
277							
60 34	〃	〃	2.1	1.3	0.3	0.6	基部欠損。
278							
60 -	〃	ハリ寶安山岩	2.3	1.8	3.0	0.8	
279							
60 34	〃	粗サスカイト	4.7	1.9	0.7	6.2	基部欠損。
280							
60 34	〃	白色風化サスカイト	4.2	1.5	0.6	4.8	基部欠損。
281							
60 34	〃	サスカイト	3.6	1.3	0.4	2.1	
282							
60 34	〃	粗サスカイト	4.5	1.7	0.5	5.4	先端、基部欠損。
283							
60 34	〃	サスカイト	2.0	1.7	0.3	1.4	基部欠損。
284							
61 -	小型切り出し状 ナイフ形石器	白色風化サスカイト	2.7	1.7	0.5	2.4	
285							
61 -	縦長剣片石核	〃	5.2	2.5	2.0	23.6	
286							
61 -	尖頭器	サスカイト	3.7	2.4	0.6	6.7	
287							
61 34	細石刃	黒曜石	1.9	1.2	0.3	0.5	
288							

種別	器種	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)	備考
61 34 289	調整剝片	黒曜石	2.3	1.5	0.7	1.8	
61 34 290	抉入石器	白色風化サスカイト	8.7	5.7	0.9	40.6	
61 - 291	二次加工ある剝片	〃	5.2	2.7	0.6	10.9	
61 - 292	〃	〃	7.0	3.1	0.9	18.4	
61 - 293	楔状石器	サスカイト	7.5	7.3	2.5	145.0	刃部つぶれあり。
61 - 294	〃	白色風化サスカイト	6.4	6.2	1.8	79.4	石核転用。
61 - 295	〃	〃	3.4	3.0	0.7	9.8	刃部つぶれ。
61 - 296	〃	サスカイト	2.6	2.0	0.6	4.1	
62 34 297	スクレイバー	白色風化サスカイト	9.6	6.1	1.0	63.5	表面に自然面を残す。
62 - 298	〃	サスカイト	7.3	3.9	1.0	31.1	刃部つぶれあり。
62 - 299	〃	白色風化サスカイト	6.8	4.4	0.9	30.4	
62 - 300	〃	サスカイト	4.2	4.0	0.9	17.3	
62 34 301	打製石庖丁	〃	7.6	4.5	1.1	43.9	
62 - 302	〃	白色風化サスカイト	7.1	4.3	1.1	36.5	1/2程度欠損。
62 - 303	〃	サスカイト	3.1	4.3	0.8	11.4	2/3程度欠損。
62 34 304	打製石鎌	〃	8.1	2.6	0.6	12.1	
63 - 305	打製石斧	サスカイト	10.4	8.9	2.6	228.2	先端部欠損、基部つぶれあり。 表面に自然面が残る。2つに切断されている。切断後復元石壁とした可能性あり。
63 34 306	〃	〃	12.1	6.3	1.5	131.1	
63 - 307	〃	〃	6.5	7.6	1.3	70.1	基部、刃部欠損。
63 - 308	〃	白色風化サスカイト	5.4	5.4	1.8	94.1	基部、刃部欠損。
63 - 309	〃	サスカイト	5.4	5.0	1.2	42.7	刃部欠損、基部つぶれあり。 表面に自然面が残る。
63 - 310	〃	良質サスカイト	3.5	5.1	0.9	15.0	基部欠損、刃部凹凸つぶれ、使用による摩滅あり。
64 34 311	〃	白色風化サスカイト	5.4	6.6	1.4	59.5	基部欠損。
64 - 312	〃	サスカイト	5.0	6.1	1.3	43.8	刃部先端使用による磨滅あり。

第5表 遺 溝 一 覧

SD(溝)

SD	グリッド	規 模 (m) 天幅 深さ	出 土 遺 物	時 期	備 考
01	K-1, L-0,	198	46 土師器(土釜), 須恵器, 瓦, 織物すり鉢, 陶磁器, サヌカ イト片	近世	那珂郡三条十六里二十一 ノ坪と十六ノ坪の間の溝
02	K-0	207	40 土師器(土釜), 須恵器, 瓦, 陶磁器	〃	那珂郡三条十六里二十 ノ坪の中間の溝
03	K-1	95	43 土師器, 須恵器	古代	那珂郡三条十六里二十一 ノ坪と十六ノ坪の間の溝
04	L-1・2	110	30 弥生土器, 土師器, 須恵器, サヌカイト片	〃	那珂郡三条十六里十六 ノ坪の中間の溝
05	K-1, L-1 -2	107	53 土師器, 須恵器	〃	〃
06	K-1・2, L-2	55	6 弥生土器	弥生時代	
07	K-1・2	47	6		
08	K-2, L-3	98	6 弥生土器	弥生時代後期	環濠の一部か?
09	K-2	93	7 弥生土器	〃	〃 ?
10	J-4, K-4 -3	82	17		
11	J-4, K-5	260	24 土師器(坏), 須恵器, 瓦器椀	平安時代~13世 紀末頃	那珂郡三条十六里十七ノ 坪と十六ノ坪の間の溝
12	I-4, J-5	95	53 弥生土器	弥生時代後期後半	
13	I-4・5・6 -7	120	29 弥生土器	弥生時代後期後半	
14	G-5, H-6 -7	375	26 土師器, 須恵器, 黒色土器	奈良~平安時代	那珂郡三条十六里十七 ノ坪の中間の溝
15	G-6・7	85	18 弥生土器, サヌカイト片	弥生土器?	SD17から派生した溝
16	G-6・7	49	11 弥生土器	〃 ?	SD17から派生した溝
17	F-7, G-7, H-7・8	500	30 弥生土器, 須恵器, 打製品(打 製石斧), サヌカイト片	弥生~古墳時代	
18	F-7	120	31 土師器(土釜), 須恵器, 瓦, 陶磁器	近世	SD20から派生した溝
19	F-7・8	(350)	41 土師器, 須恵器, 瓦, 陶磁器	〃	SD20から派生した溝
20	F-8, G-9	(675)	(38) 錫前すり鉢, 唐津伊万里碗	〃	那珂郡三条十六里十八ノ 坪と十七ノ坪の間の溝
21	F-8・9	45	6		
22	E-8, F-9	162	52 壺, 壺, 石鏡, サヌカイト片	弥生時代前期	
23	E-9	37	9		
24	E-9・10	50	8		建物を画する溝か?
25	C-10, D-10・11	68	10 土師器, 須恵器	古代	那珂郡三条十六里十八 ノ坪の中間の溝
26	C-10・11	200	50		
27	B-10・11, C-10・12	817	84 弥生土器, 土師器(土釜), 須 恵器, サヌカイト片	古代	那珂郡の三条と四条の 間の溝

SH (竪穴住居)

SK	グリッド	形状	方 位	規 模 (cm)			出 土 遺 物	時 期	備 考
				東西	南北	深さ			
01	K-3・4	隅丸 方形	N-7°-W	535	600	16	壺, 高坏,	弥生時代 後期後半	胎土に角閃石・金雲母を含む土器が多い。
02	J-3, K-3	隅丸 長方形	N-34°-W	548	438	26	壺, 壺, 鉢, 製塩土器, 支脚	弥生時代 後期後半	胎土に角閃石・金雲母を含む土器が多い。
03	J-3・4	隅丸 方形	N-11°-W	(414)	512	12	壺, 壺, 鉢, 高坏, 製塩土器	弥生時代 後期後半	胎土に角閃石・金雲母を含む土器が多い。 鉢が多い。
04	J-3・4	隅丸 方形	N-32°-W	(450)	480	20	壺, 壺, 鉢, サスカイト片	弥生時代 後期後半	胎土に角閃石・金雲母を含む土器が少ない。

SB (掘立柱建物)

SK	グリッド	規 模			出 土 遺 物	時 期	備 考
		桁行 (m)	梁間 (m)	面積 (d)			
01	I-8	1.54	1.5	2.31			
02	F-11	3.9	3.3	14.69			

SK (土坑)

SK	グリッド	形 状	規 模 (cm)			出 土 遺 物	時 期	備 考
			天 幅	幅	深さ			
01	K-2, L-2	ほぼ円形	長 短	572 512	9	弥生土器, 小礫	弥生時代 後期後半?	
02	K-4	(椭円形)	長 短	(108) 116	11	弥生土器	弥生時代 後期後半	竪穴住居と同時期
03	D-9	隅丸長方形	長 短	155 56	22	石鏃	弥生時代?	土壤墓の可能性あり

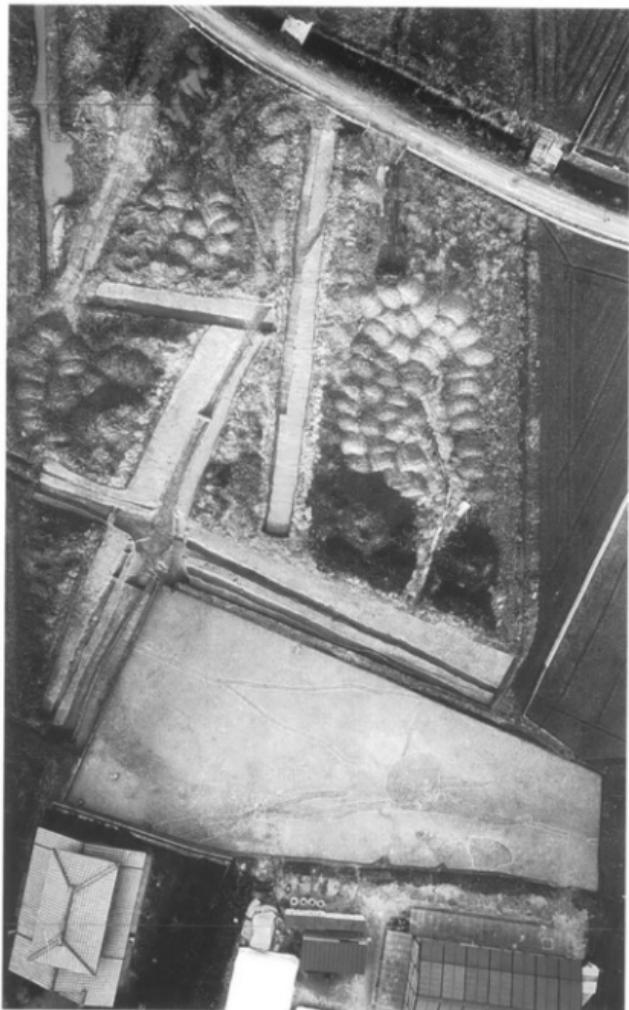
SE (井戸)

SK	グリッド	形 状	規 模 (cm)			出 土 遺 物	時 期	備 考
			天 幅	幅	深さ			
01	D-11	円 形		112	55	瓦	近世	水だめか?

SX (不明遺構)

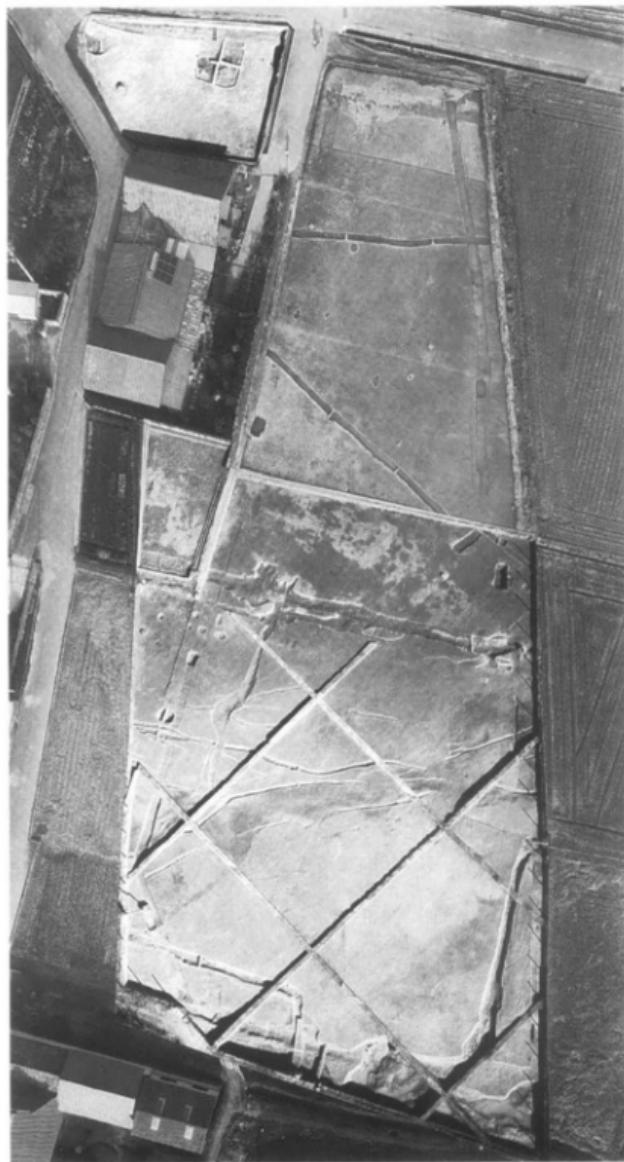
SK	グリッド	形 状	規 模 (cm)			出 土 遺 物	時 期	備 考
			天 幅	幅	深さ			
01		—	—	—	—	石鏃, サヌカイト片, 焼石	縄文時代?	石器製作地か?
02	D-10	不 定 形	長 短	804 (300)	12	縦長剥片石核, 縦長剥片, 敲き石, 石鏃	旧石器時代	瘤み状の落ち込み

図 版

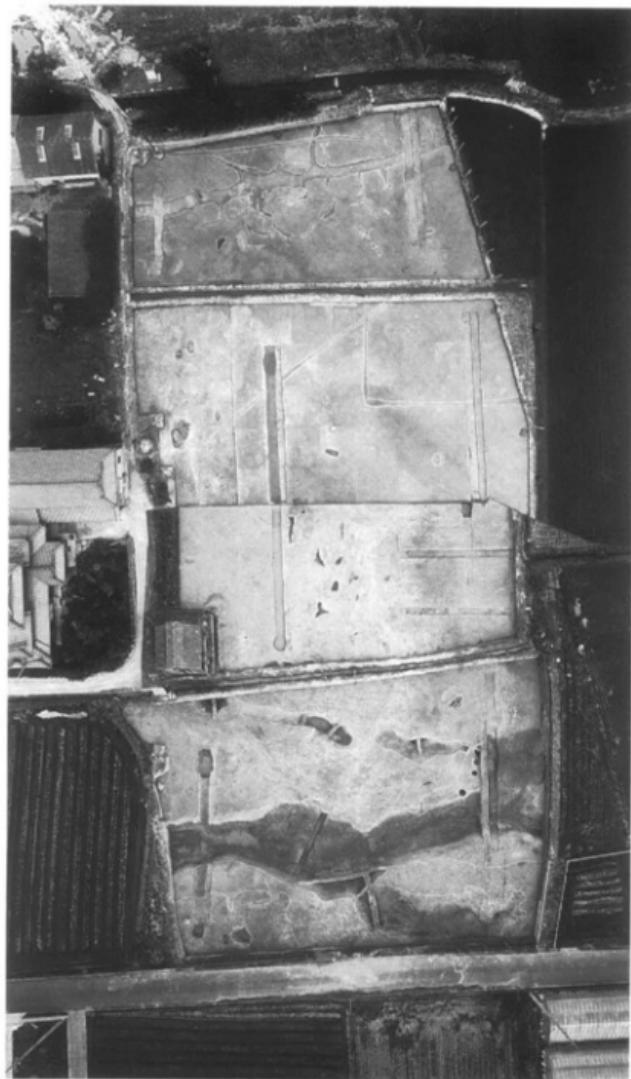


遺構検出状況(1)

図版 2



遺構検出状況(2)



遺構検出状況(3)

図版 4



①発掘前風景



②発掘前風景



① SX01サヌカイト片出土状況

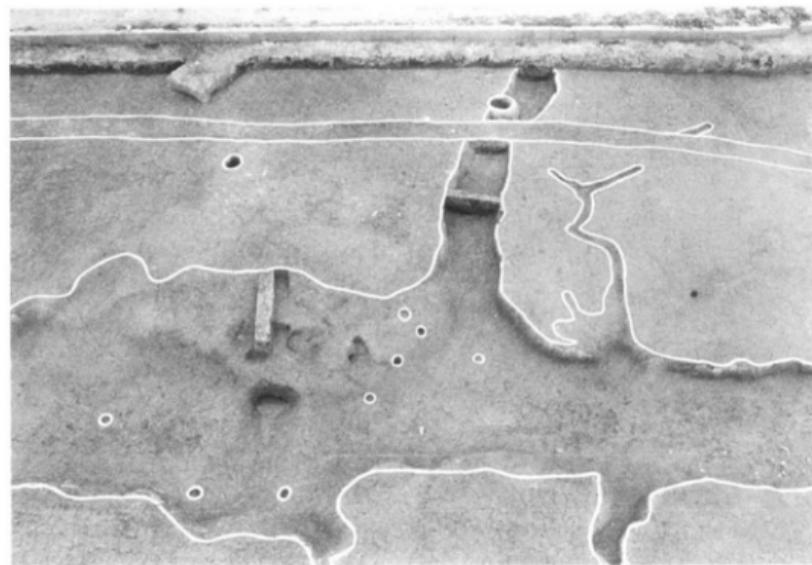


② SX01サヌカイト片出土状況

図版 6



①SD22検出状況（南より）



②SD22杭列検出状況（西より）



① SD22 土層断面 (N - N')

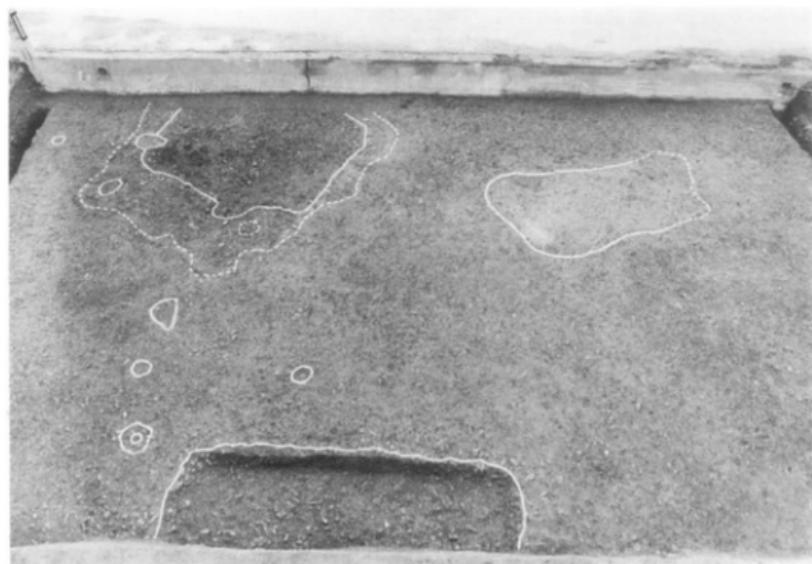


② SD22 土層断面 (O - O')

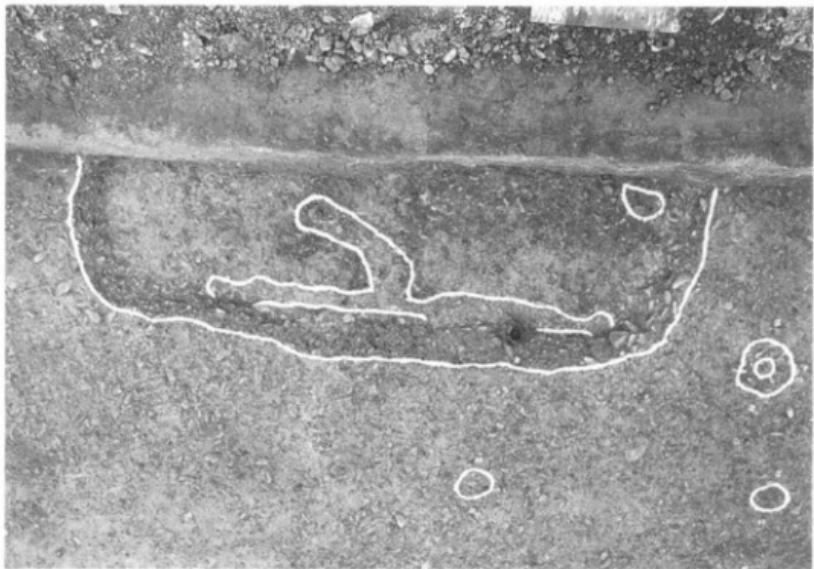
図版 8



①SH01検出状況（南より）



②SH02・03検出状況（東より）

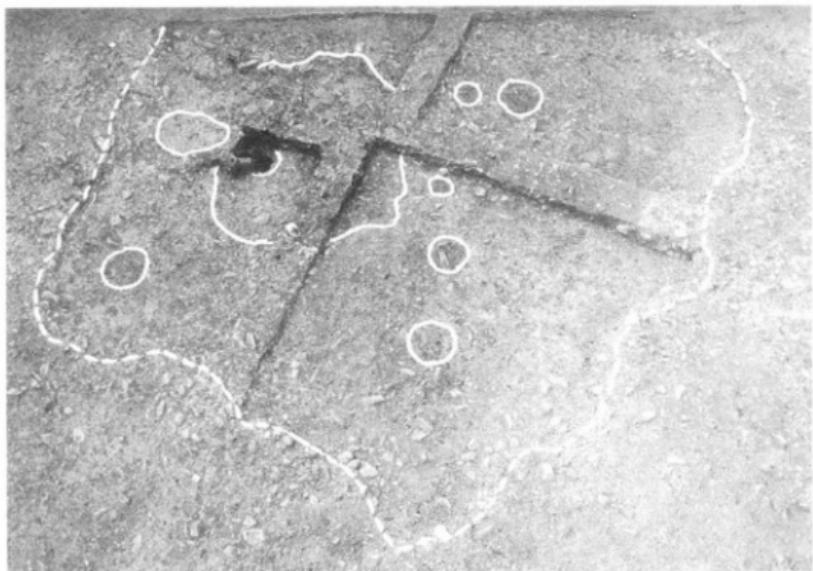


①SH02検出状況（東より）



②SH02遺物検出状況

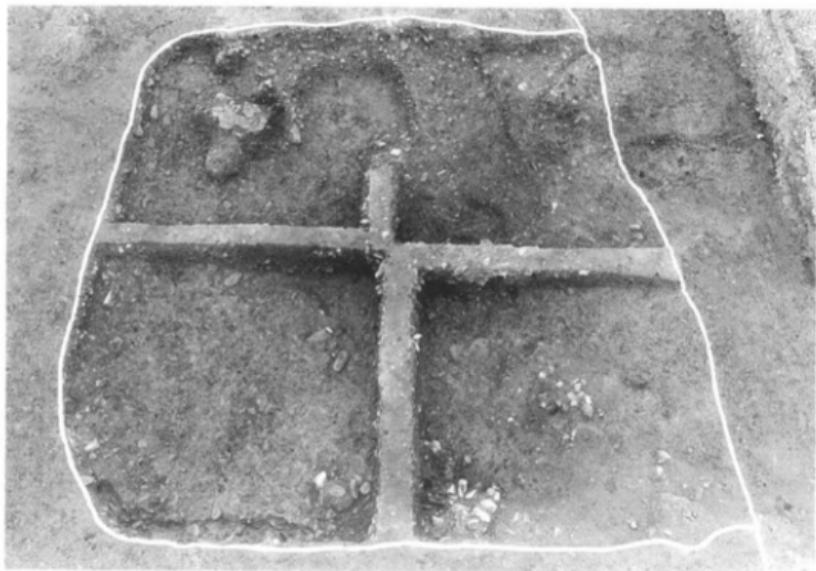
図版10



①SH03検出状況（東より）



②SH03遺物出土状況



①SH04検出状況（南より）



②SH04土層断面

図版12



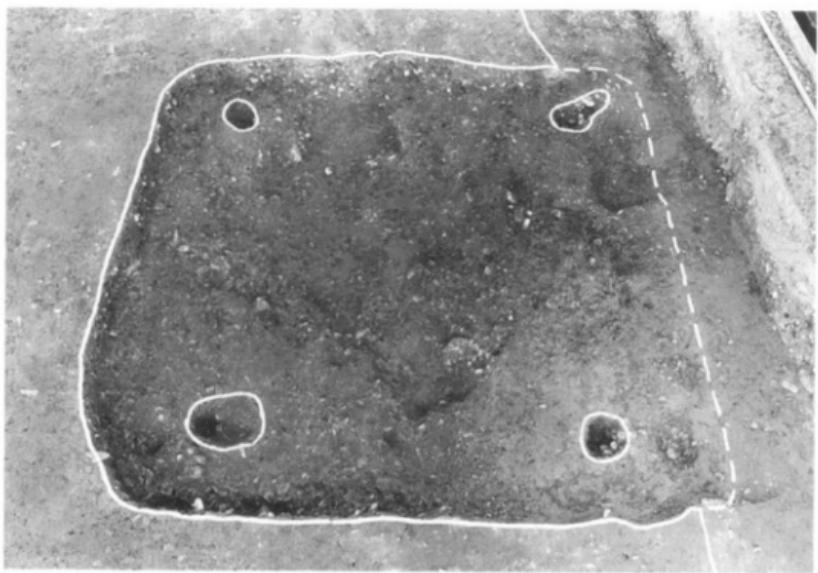
① SH04遺物出土状況



② SH04遺物出土状況



①SH04遺物出土状況（南より）



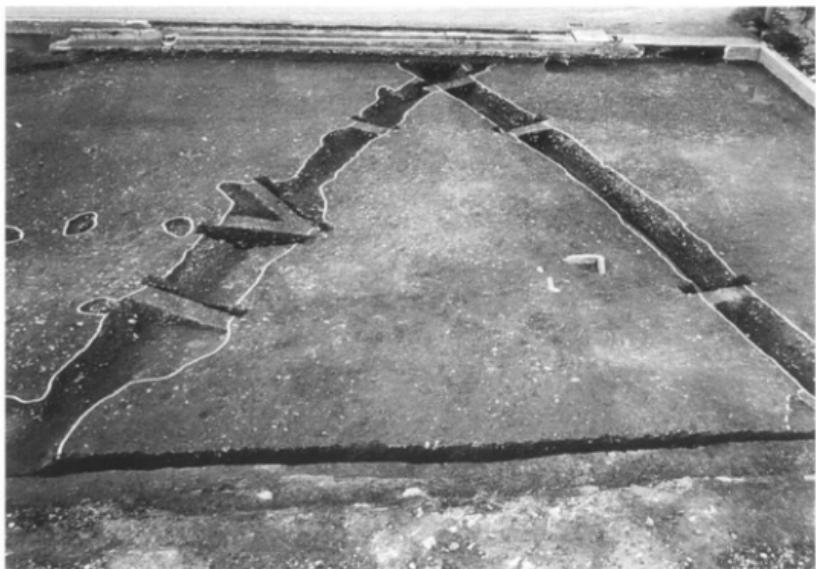
②SH04検出状況（南より）



①SK02遺物検出状況（北より）



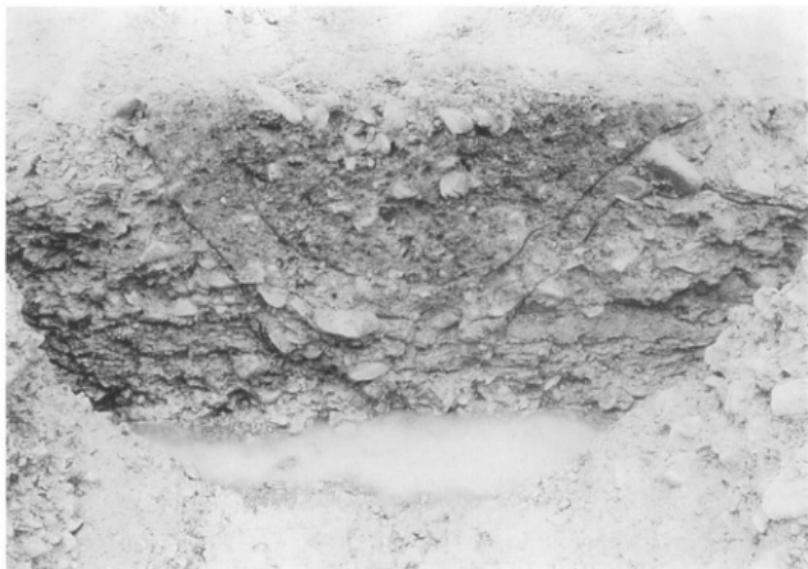
②SD06～09・SK01検出状況（北より）



①SD12・13検出状況（南より）



②SD12遺物出土状況



①SD12土層断面 (G' - G)



②SD12土層断面 (H' - H)



①SD01土層断面（A-A'）



②SD02土層断面（B-B'）

図版18



①SD11検出状況（北より）



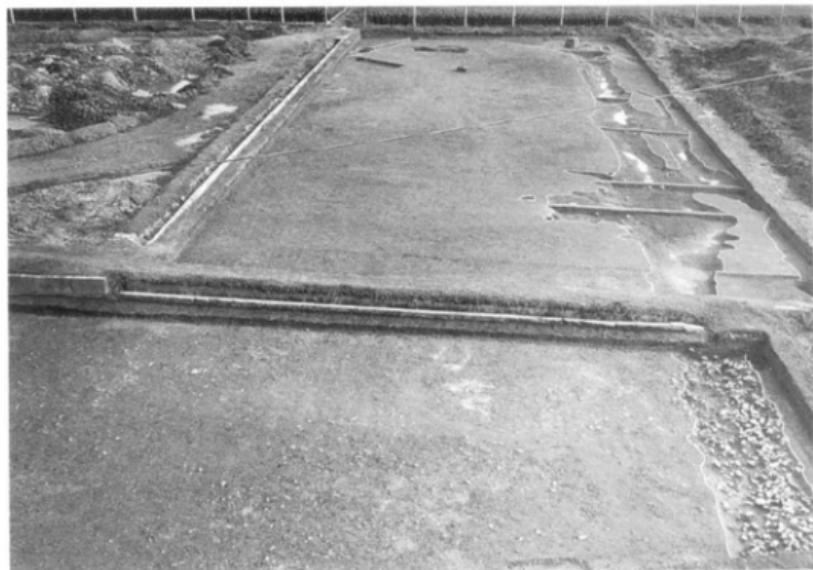
②SD12検出状況（北より）



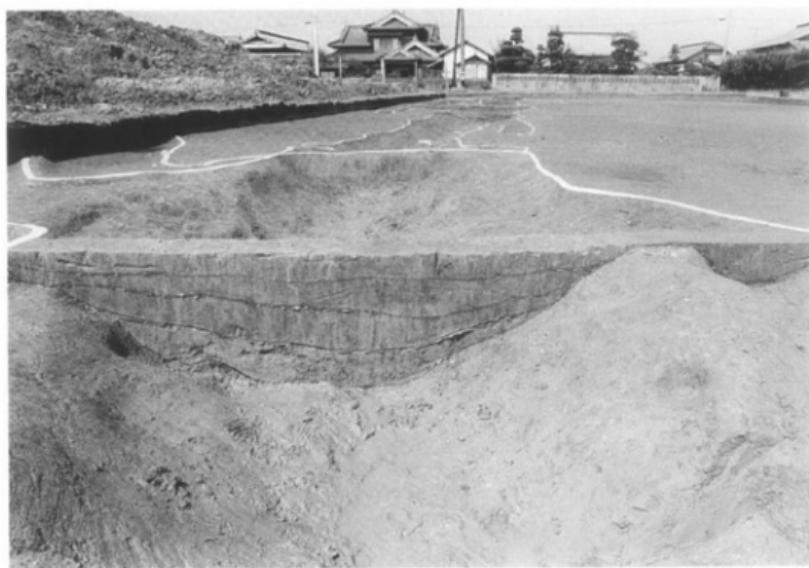
①SD11土層断面



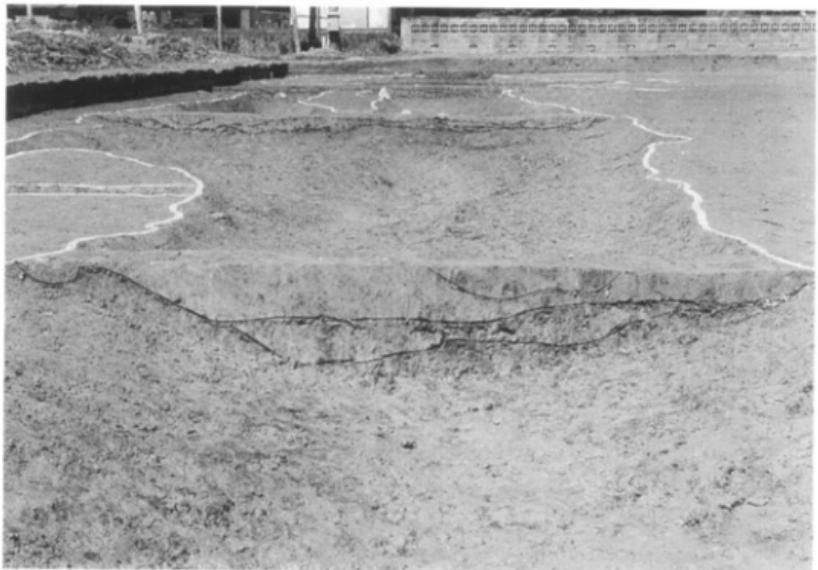
②SD11発掘作業風景



①SD14検出状況（北より）



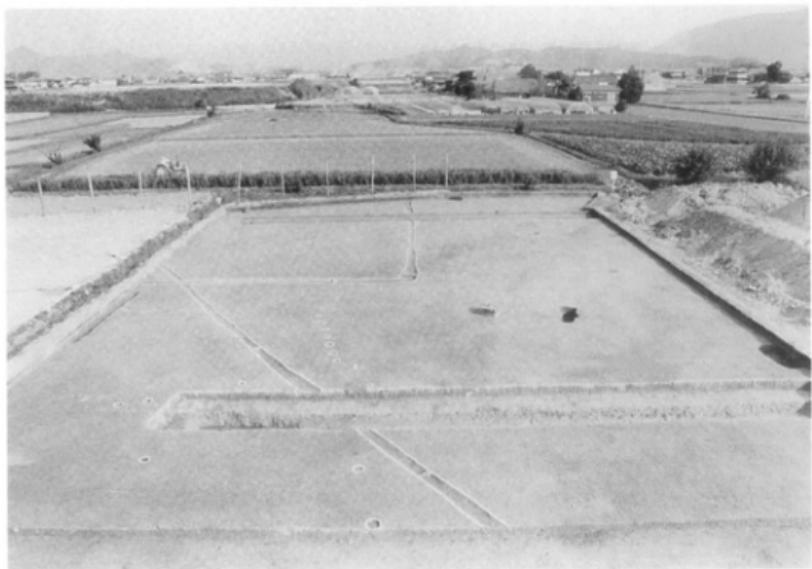
②SD14土層断面（南より）



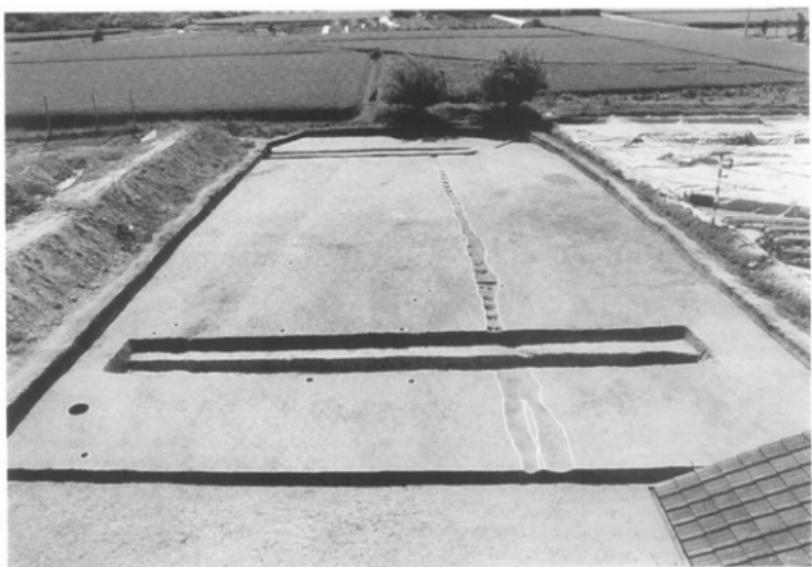
①SD14土層断面（南より）



②SD20土層断面（北より）



①SD23・24検出状況（北より）



②SD25検出状況（北より）

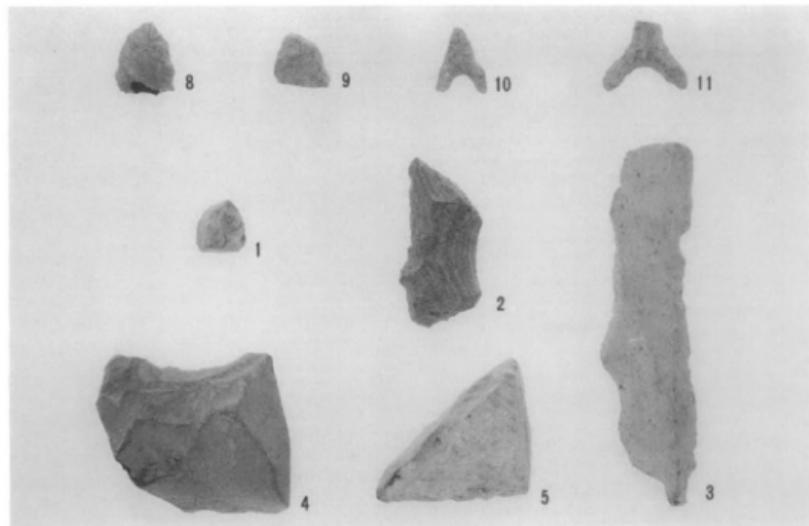


① SE01検出状況

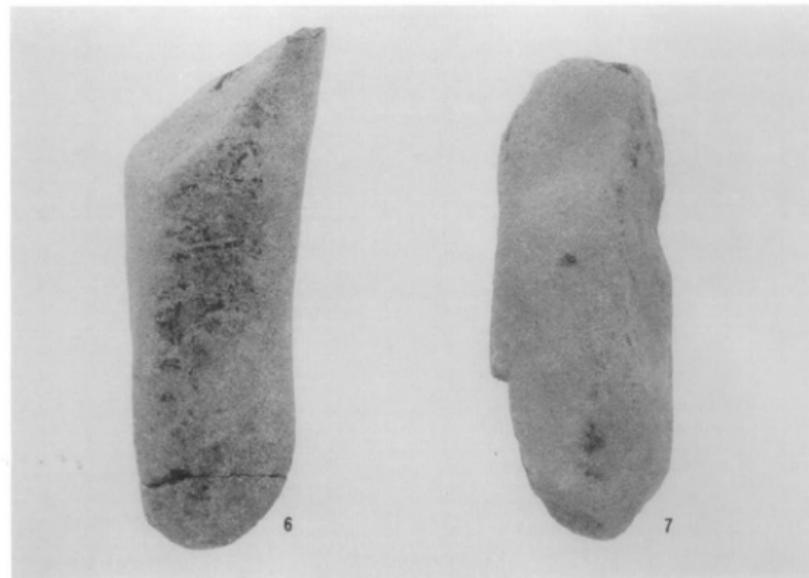


② SE01検出状況

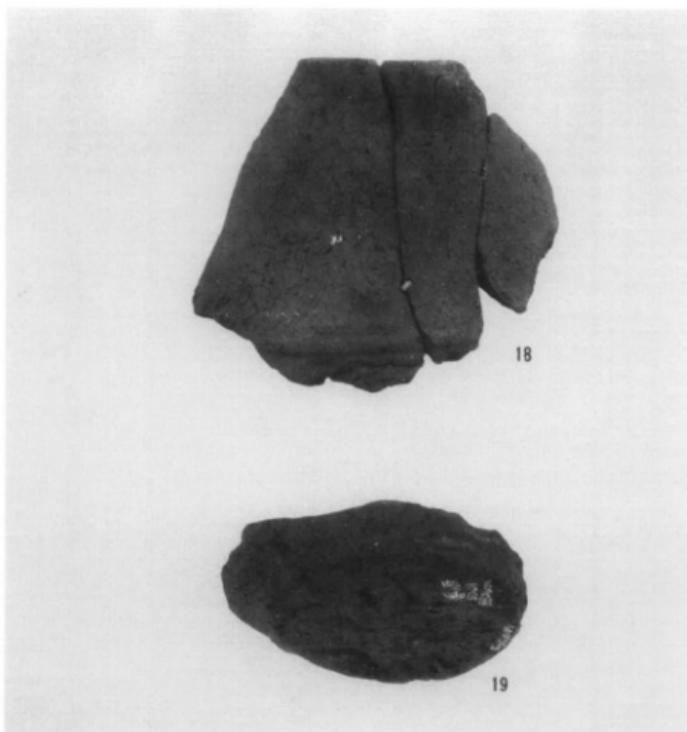
図版24



①SX01・02出土遺物

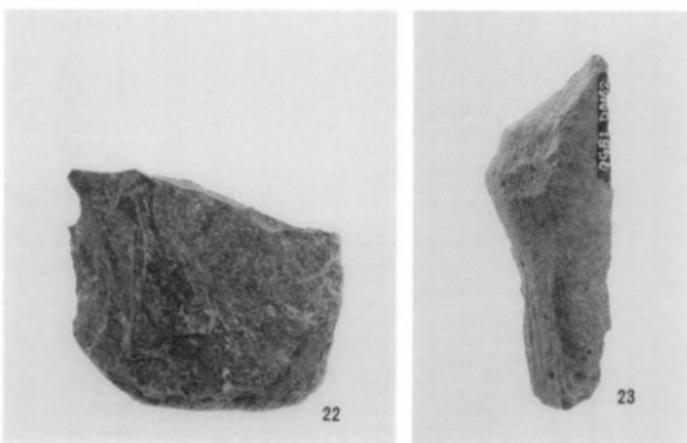


②SX02出土遺物



18

19



22

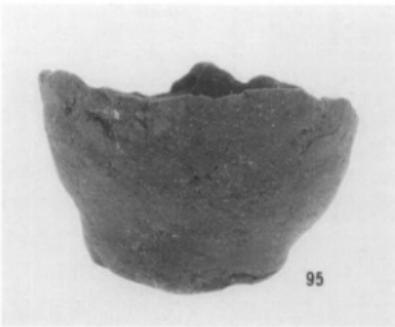
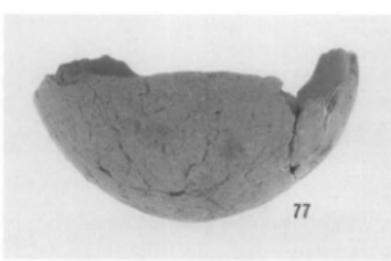
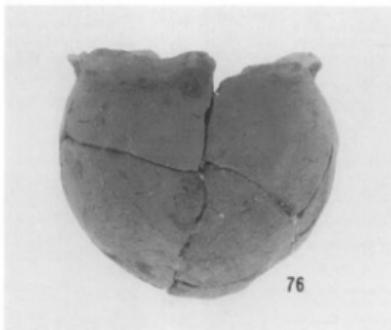
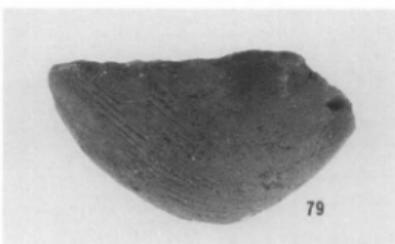
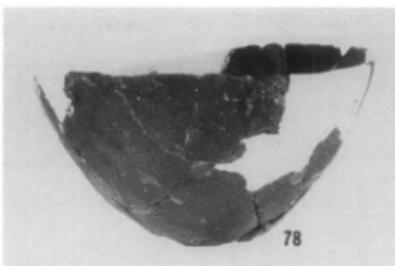
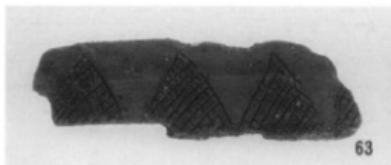
23

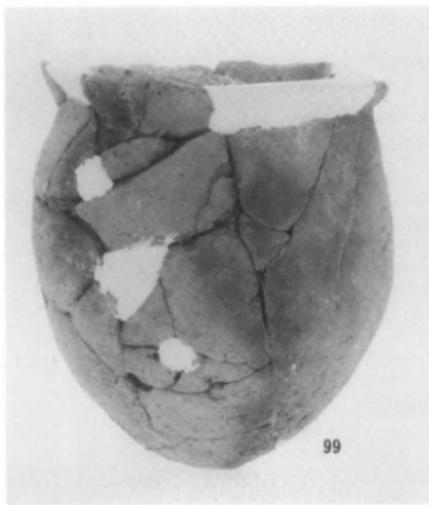
SD22出土遺物

図版26

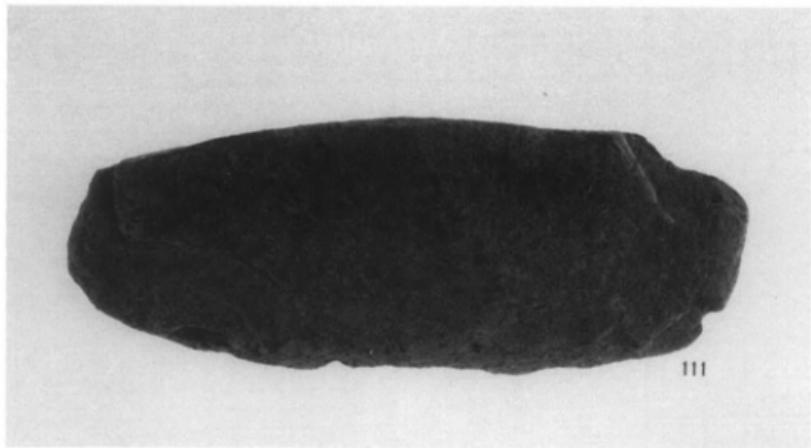


SH02出土遺物

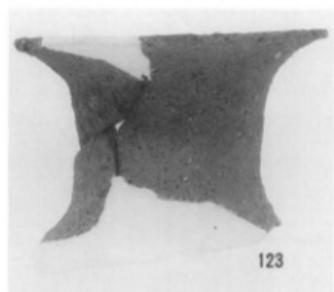




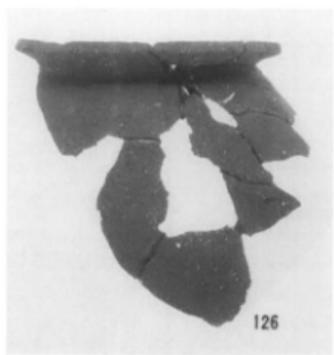
SH04出土遺物



①SK01出土遺物

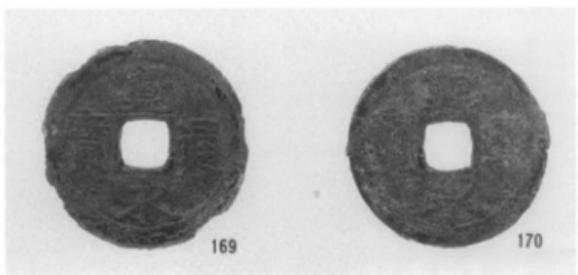
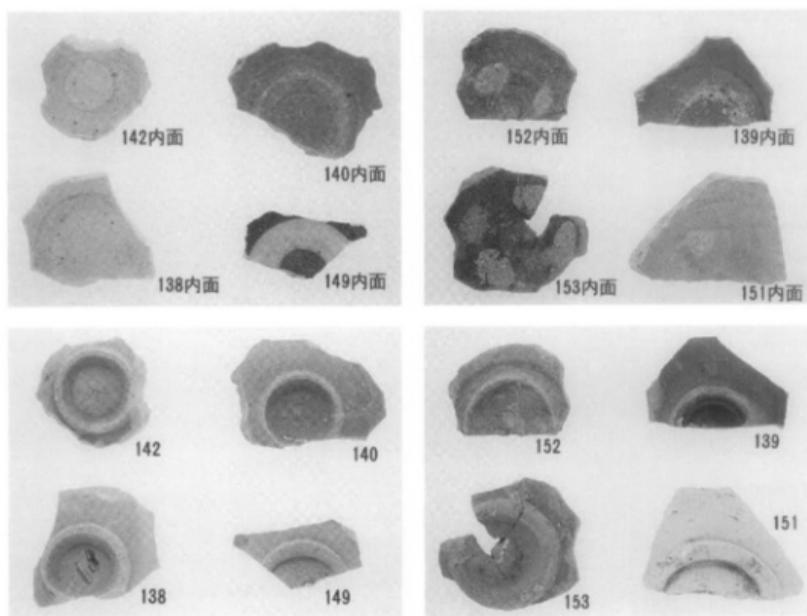
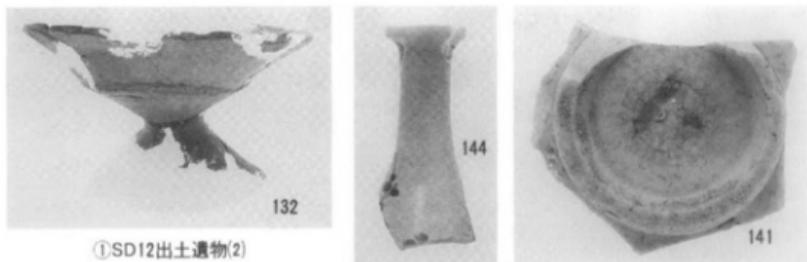


②SK02出土遺物

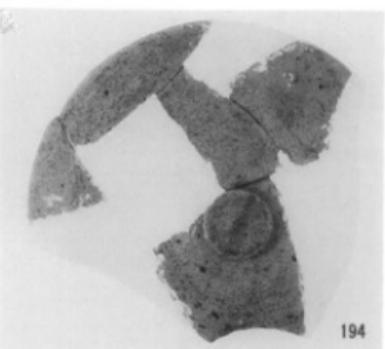
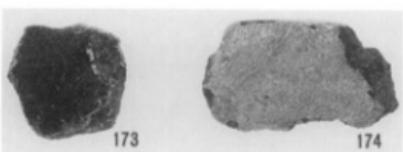
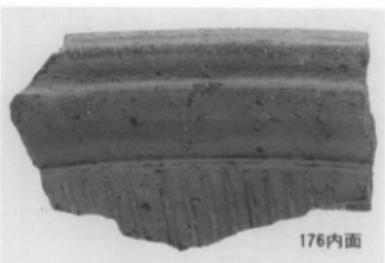
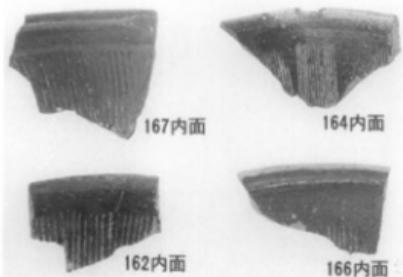
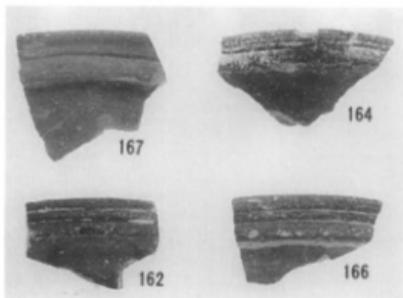


③SD12出土遺物(1)

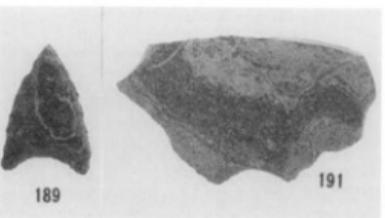
図版30



②SD01出土遺物(1)

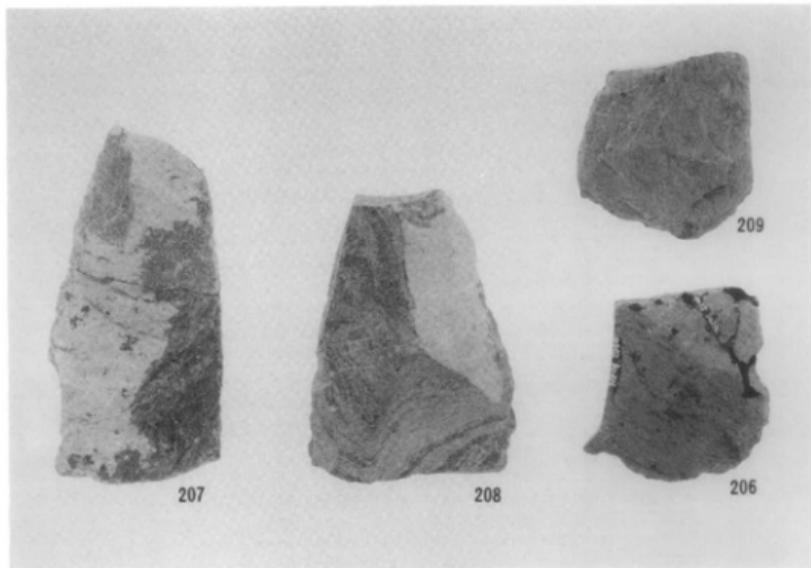


①SD01出土遺物(2)

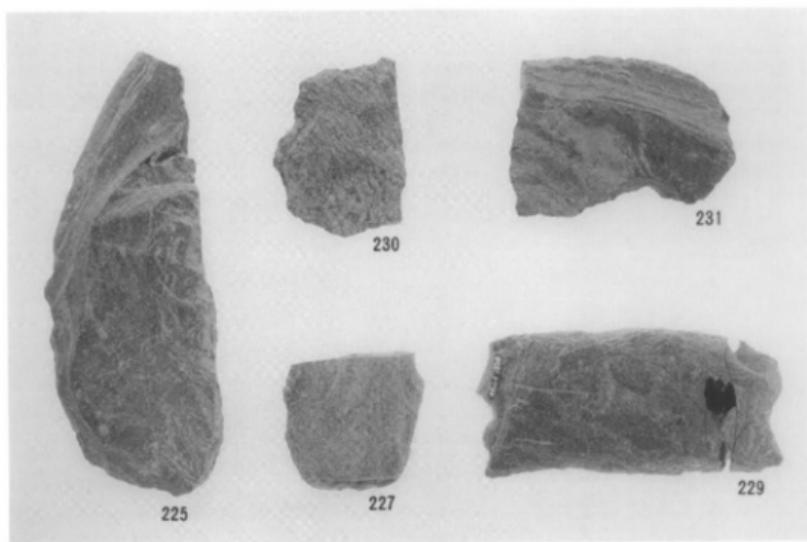


②SD14出土遺物

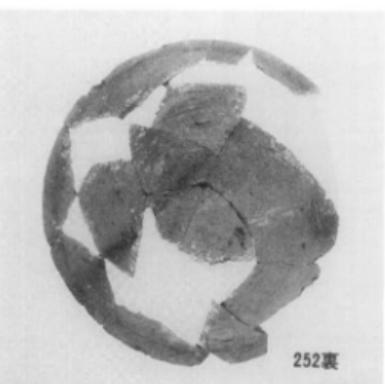
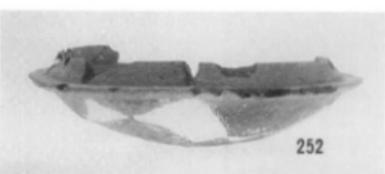
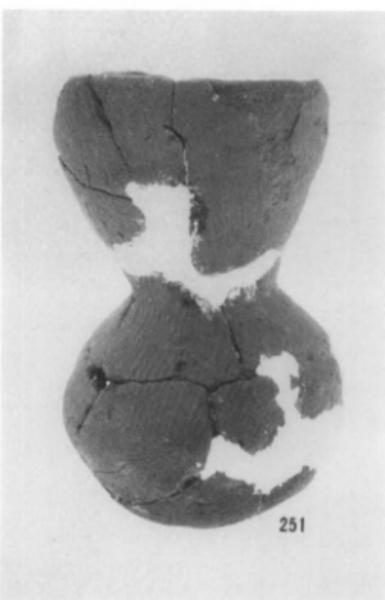
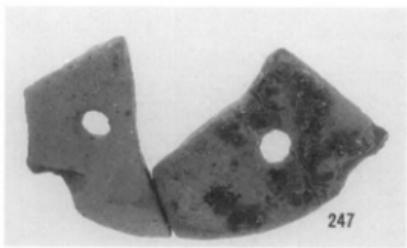
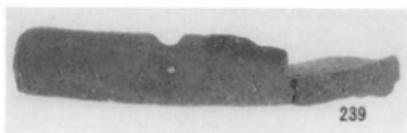
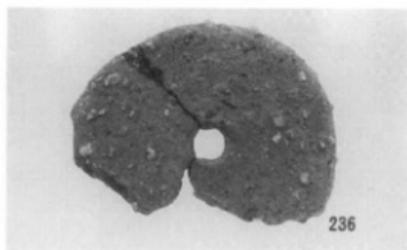
④SD11出土遺物



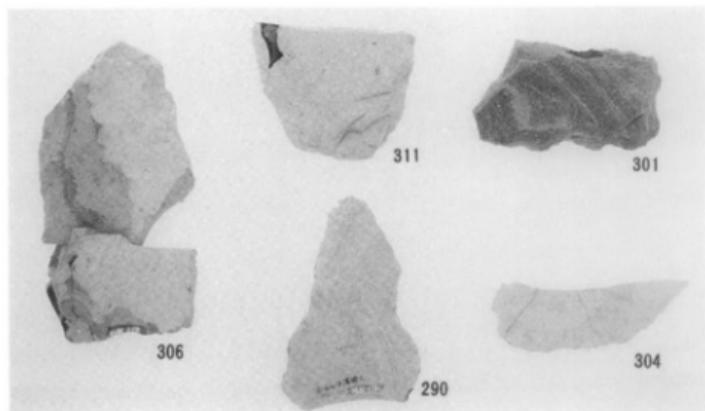
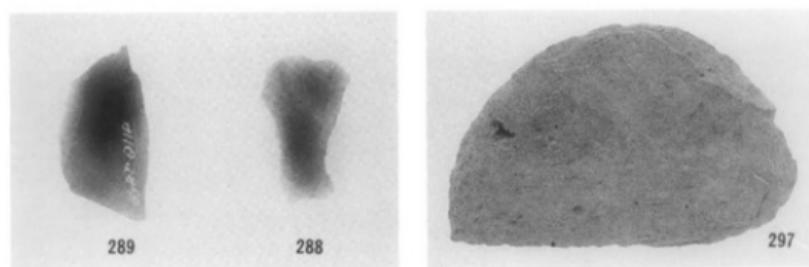
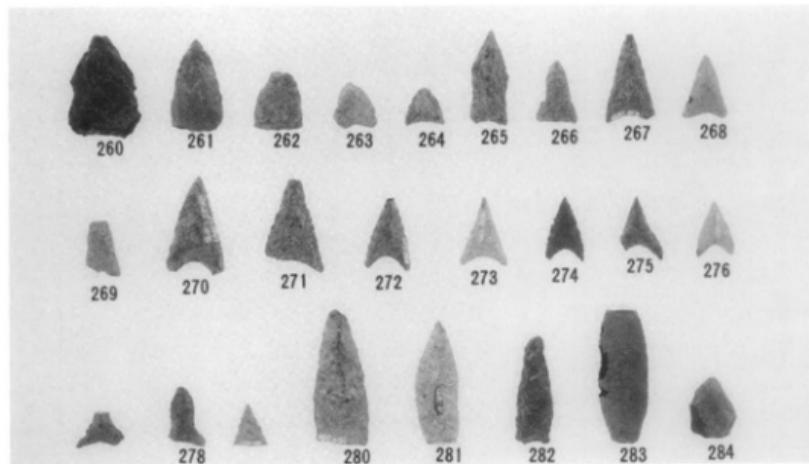
①SD17出土遺物



②SD27出土遺物



包含層出土遺物(1)



包含層出土遺物(2)

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第十一冊

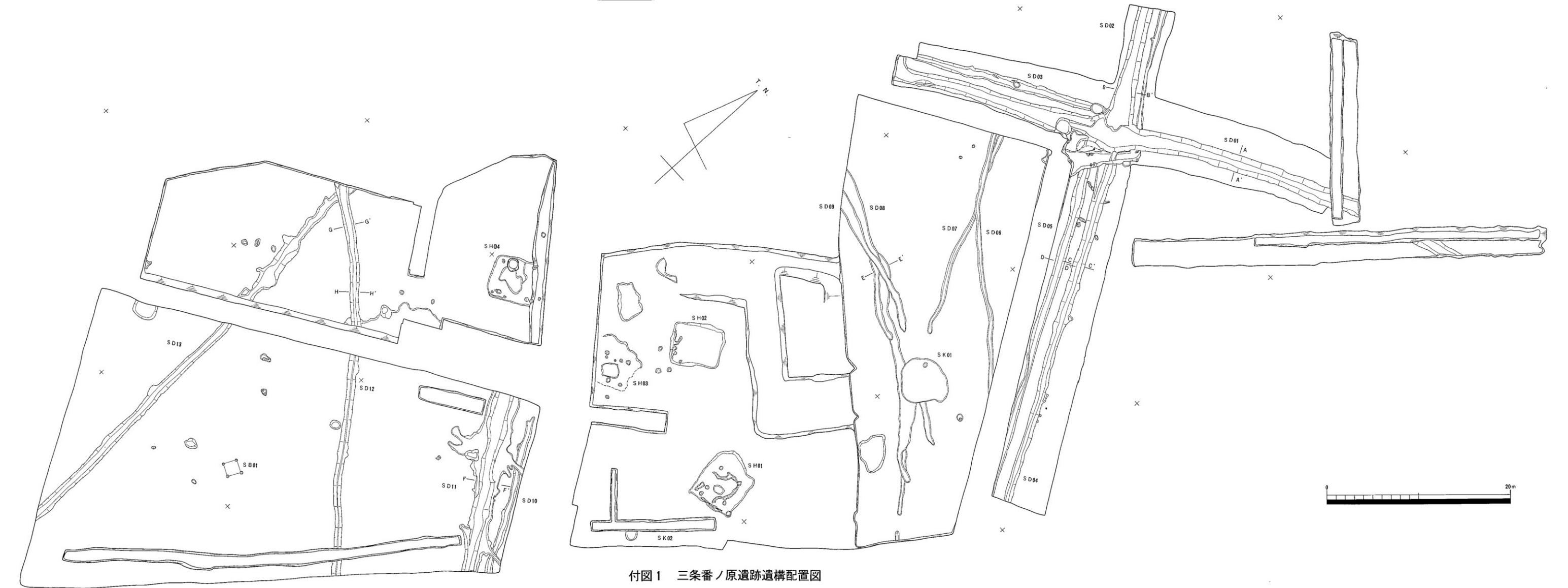
三条番ノ原遺跡

平成4年8月31日 発行

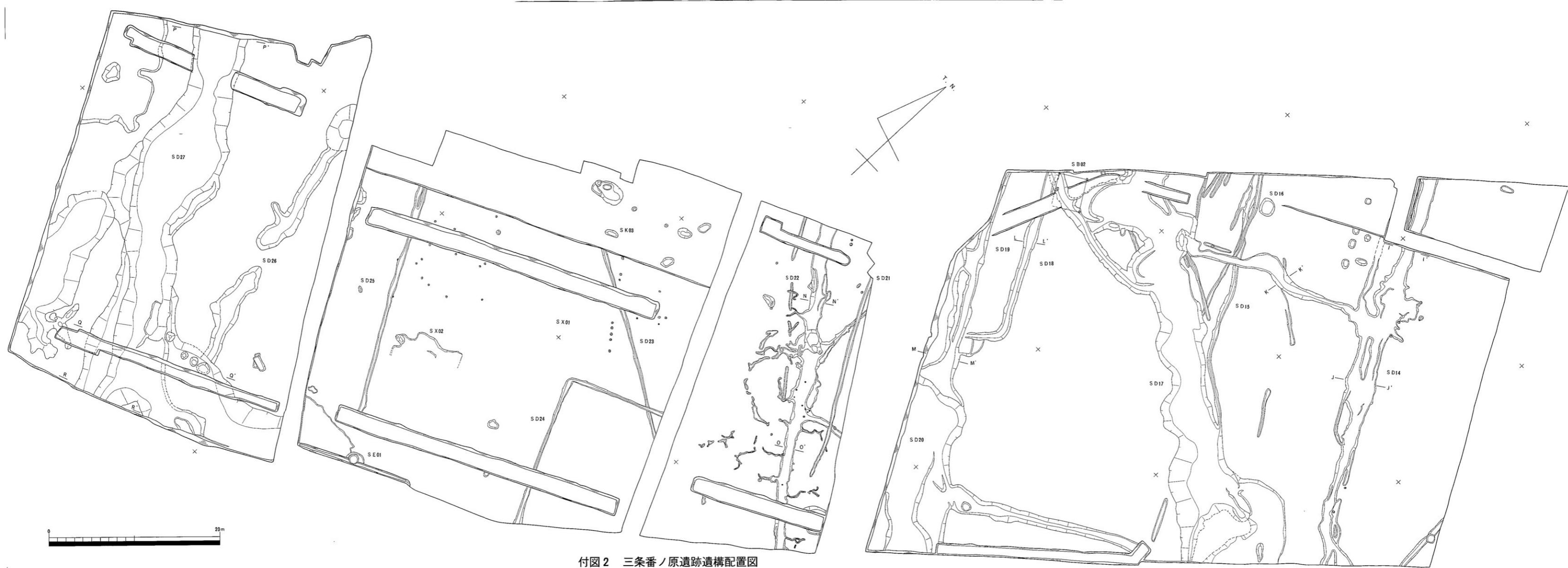
編集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
〒762 香川県坂出市府中町字南谷5001番の4
電話 (0877) 48-2191 (代表)

発行 香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

印刷 株式会社 中央印刷所



付図1 三条番ノ原遺跡遺構配置図



付図2 三条番ノ原遺跡遺構配置図

